

千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム

私たちの柏の歴史

— 牧から街へ —

History of *Kashiwa*



全体の目次

前書き	p. 1
序章 現代—柏の葉地区の歩み—	p. 2
第1章 原始古代	p. 12
I 柏の遺跡	p. 13
第2章 中世	p. 33
I 古代から戦国時代の柏市域	p. 35
II 柏市の製鉄遺跡	p. 50
第3章 近世	p. 57
I 江戸時代の柏と小金牧	p. 59
II 柏の水運—手賀沼と利根川の開拓と物流—	p. 74
第4章 近代	p. 85
I 小金牧の開墾—十余二地区を中心として—	p. 86
第5章 柏市の農業	p. 93
I 昭和から平成までの変遷	p. 94
II 柏市の農業 トピックス	p. 105
第6章 (小金牧) 十余二開墾物語	p. 116
I 小金牧の開墾—入植時の苦労話—	p. 117
II 十余二の土壌と栽培作物に関する話	p. 118
III サツマイモ・農業に関する話	p. 119
IV 柏飛行場の開設に関する話	p. 120
V 戦後の農地改革・金属工業団地に関する話	p. 120
柏市とその周辺の歴史年表	p. 122
制作メンバー一覧	p. 126

はじめに

この書籍の制作は、2017年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム A コース『柏の歴史、文化、産業』の開講がきっかけになっています。柏市に長年居住している人でも、柏地域の歴史や文化、そして経済についてよく知っているわけではありません。そこで、柏市のことを勉強するというプログラムが企画されました。

このプログラムを通して柏市の歴史に興味を持った市民が集まり、大学と一緒に、地域の歴史について勉強したり、調べたりして、この書籍を完成させました。2018年1月20日に第1回のミーティングが開催され、2020年2月22日まで20回以上のミーティングを重ねて作りあげました。

地球上のどこの地域にも、地域ごとに先人たちの歴史があります。その歴史が幾重にも積み重なり、私たちが生活している現代に繋がっています。この書籍は千葉大学柏の葉キャンパスが位置する十余二地域を中心にして、まとめてあります。この書籍を手にとった方がこの地域の歴史を知ること、この地域への愛着を少しでも持っていただけたら幸いです。

なお、2017年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラムは柏市教育委員会文化課と経済産業部に協力していただきました。そして、この書籍の作成には、プロジェクトの立ち上げ当初から柏市教育委員会文化課に多大なるご協力いただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

2020年9月1日

千葉大学環境健康フィールド科学センター
野田勝二

序章 現代－柏の葉地区の歩み－

目次

1. 概要	p. 3
2. 柏飛行場から米軍通信所へ	p. 3
(1) 飛行場跡地の開拓	p. 3
(2) 米軍通信所の設置と周辺の変化	p. 4
① 通信所の設置と開拓地の接收	
② 国道 16 号の開通と工業団地	
③ 常磐自動車道の開通	
3. 柏の葉地区の成り立ち	p. 6
(1) 米軍基地の返還と跡地利用	p. 6
(2) つくばエクスプレス (TX) の開通	p. 7
① 常磐新線建設計画	
② TX の開通と沿線開発	
4. スマートシティを目指して	p. 9
(1) 柏の葉国際キャンパスタウン構想	p. 9
(2) スマートシティ	p. 9

柏の葉地区の歩み

1. 概要

柏の葉地区は、柏の葉キャンパス駅を中心に最先端の研究教育施設やショッピングセンター、住宅、公園等に恵まれ、近年急速に人口が増加している地域です。

かつて、この地域には、戦前に首都防空のための陸軍柏飛行場が作られていました。戦後飛行場は閉鎖され、引揚者や旧軍人のための緊急開拓地となりました。その後アメリカ軍が通信所を設置、土地の多くは国有となりました。そしてこの通信所の返還に伴い、188haの跡地は「緑を生かした土地利用」などを基本方針として計画的に整備されることになりました。

そして、この地域の中央部は“つくばエクスプレス (TX)”が開通し、柏の葉キャンパス駅を中心に賑やかな住宅・商業地区が整備されました。現在、この地域は「柏の葉地区」と呼ばれ、「スマートシティ」「健康長寿都市」「新産業創造都市」を目指して、さらに発展を遂げています。

2. 柏飛行場から米軍通信所へ

(1) 柏飛行場跡地の開拓

昭和20(1945)年8月、敗戦により軍隊が解体した後、柏飛行場は食糧増産のための開拓地となりました。敗戦により経済が大混乱し、食糧、生活物資が不足しました。また軍隊の解体により失業した軍人、軍需工場の工員などが巷に溢れました。さらに海外からの引揚者への施策も緊要でした。このため政府は昭和20年11月「緊急開拓事業実施要項」を決定し、戦後の開拓を進めました。第一には大食糧生産、第二には離職した工員、軍人、海外から帰国する引揚者の帰農促進が目的でした。柏飛行場の跡地は緊急開拓地となり124戸が入植しました。入植当時は電気もなく、地味や水利が良くない土地に、陸稲、小麦、甘藷、落花生などを作りました。種をまいても収穫が少ない時期が続きましたが、農民たちは懸命に畑作業を行いました。

(2) 米軍通信所の設置と周辺の変化

① 通信所の設置と開拓地の接收

少し収穫が期待できるようになった昭和 25（1950）年に朝鮮戦争がはじまりました。アメリカ軍は開拓地の近くにある元の滑走路（国有地）の中央に大きなテントを建てました。十余二は通信感度が良いことから、通信基地になるとのうわさが流れました。農民たちは土地の接收反対の運動を起こして全力で戦いました。昭和 28（1953）年農民の反対にもかかわらず土地の接收が決定されてしまいました。反対運動のため、その条件は少し良くなりました。居住、耕作は従来通り、接收された土地については賃借料を支払う、米軍が農作物を踏み荒らしたときは補償する、畑地灌漑施設を作る、電気を導入するなどの条件でした。

昭和 30（1955）年アメリカ空軍柏通信所（キャンプ・トムリンソン）が建設されました。しばらくは基地と地元農民が同居する形となりましたが、昭和 38（1963）年基地拡充のための国家買収問題が起こり、農業を続けることへの不安から多数の農民が土地を手放しました。その結果開拓集落はほぼ消滅し、大部分は国有地となりました。

② 国道 16 号の開通と工業団地

国道 16 号は神奈川県横浜市を起点・終点として千葉県富津市を經由して首都圏を一周する環状道路です。柏市域では、地元の熱心な陳情もあって、昭和 32（1957）年部分的に建設工事が始まりました。昭和 45（1970）年野田から千葉の間が開通して、交通量が一気に増加しました。また国道 6 号との立体交差も昭和 48（1973）年に完成しました。

こうして交通インフラが整備されると、東京都心から 30km 圏にある交通、流通の利便性を生かして、工業団地の誘致が図られました。柏市ではこの地域を工業団地として整備し売り出すことにしました。昭和 41（1966）年高田に柏機械金属工業団地が成立、続いて昭和 46（1971）年に十余二工業団地が成立しました。ここには金属、機械器具、食品製造などの企業が集まりました。

またアメリカ空軍通信所に隣接して、昭和 36（1961）年「柏ゴルフクラブ」が開場しました。首都圏近郊の名門ゴルフクラブとして支持を受けていましたが、平成 13（2001）年柏の葉地区の開発に伴い閉鎖しました。



図1. 昭和22（1947）年の航空写真（原図：国土地理院空中写真）

③ 常磐自動車道の開通

十余二地区の北部には常磐自動車道が通っています。常磐道は首都高速と接続し、北東日本を縦貫する幹線道路ですが、当初は地元住民の反対で工事の着工は大幅に遅れました。昭和 56（1981）年柏 IC 以北が先行着工されました。そして「科学万博つくば '85」に間に合わせるため、昭和 60 年三郷 IC から柏 IC 間が半地下方式により完成しました。この常磐道の開通により、首都圏の物流は一層便利になり、十余二地区は物流拠点としても発展することとなりました。

3. 柏の葉地区の成り立ち

(1) 米軍基地の返還と跡地利用

アメリカ空軍通信所は昭和 40 年代後半の米軍基地整理統合計画を受け、柏をはじめ地元の熱心な返還運動の結果、昭和 54（1979）年全面的に返還されることとなりました。

政府はその跡地利用について、三分割有償方式^注を打ち出しました。これを受けて県と地元市町による米空軍柏通信所跡地利用促進協議会が「緑を生かした土地利用」などの基本方針を作成しました。そして昭和 59（1984）年から土地区画整理事業が始まり、平成 2（1990）年に完成しました。地域名は公募の結果、「柏の葉」と命名され、さらに町名も柏の葉 1～6 丁目となりました。

現在、平坦な 188ha の跡地は整然たる街区に分割され、国の施設としては国立がんセンター東病院、税関研修所、科学警察研究所、千葉大学環境健康フィールド科学センターなどが、地元施設としては 45ha の県立柏の葉公園をはじめ、県立柏の葉高校、柏市立十余二小学校、さわやかちば県民プラザなどが設置されています。また柏の葉 1 丁目から 3 丁目は主に住宅専用地域として利用されています。そして留保地には、東京大学柏キャンパスとして宇宙線研究所はじめ最先端の研究教育施設が並んでいます。

注：三分割有償方式とは、跡地を、国の利用地三分の一、地元利用地三分の一、予測できない将来の需要を考えて三分の一を留保地とする三分割で、地元分は国が時価で売却するというもの

(2) つくばエクスプレス（TX）の開通

① 常磐新線建設計画

常磐新線構想は常磐線の恒常的な過密状態の緩和のため計画され、昭和 60（1985）年運輸政策審議会で新設が適当であるとの答申をえて具体化が始まりました。平成元（1989）年に鉄道整備と沿線の地域開発を同時に推進するという一体化法^注の成立により、地元自治体が宅地の開発も同時に進めることができることとなり、TXはこの法律の適用第1号となりました。平成2（1990）年新線の整備・運営主体となる第三セクターの首都圏新都市鉄道株式会社が設立され、建設コースも各種の候補案の中から、現在の秋葉原～つくば研究学園都市コースが決定しました。

平成13（2001）年新線の呼称が「つくばエクスプレス」とされ、平成17（2005）年8月、ついに開業に至りました。

注：大都市地域における宅地開発及び鉄道整備の一体的推進に関する特別措置法

② TXの開通と沿線開発

TXの開通に先立ち、米軍基地に隣接して展開していた柏ゴルフクラブは平成13（2001）年に閉鎖され、跡地は大規模な再開発地域となりました。その敷地内にTXの柏の葉キャンパス駅が作られ、平成18（2006）年、駅前に大型ショッピングセンターららぽーと柏の葉が開業しました。そして大規模マンション群の建設がすすみ、また病院やホテル、その他の商業施設も続々と開業し、利便性と住環境が良い地域として人気を博しています。



図2 昭和63（1988）年の航空写真（原図：国土地理院空中写真）

4. スマートシティを目指して

(1) 柏の葉国際キャンパスタウン構想

柏の葉地区には千葉大学環境健康フィールド科学センターと東京大学物性研究所・宇宙線研究所・大学院新領域創成科学研究科などの先端的研究機関が設けられたことから、柏の葉地域のまちづくり推進拠点として、平成 18（2006）年両大学と千葉県、柏市さらに民間企業等が連携して UDCK（柏の葉アーバンデザインセンター）が開設されました。これは「公・民・学」が連携して、新たな産業・文化の創造が盛んな「国際学術研究都市」を目指して「柏の葉国際キャンパスタウン構想」の実現をめざしていくものです。

「柏の葉国際キャンパスタウン構想」とは、自然と共生し、質の高いデザインを実現した、持続性の高い次世代の環境都市づくり、そして、市民や企業、自治体と最先端の大学や公的研究機関が双方向に連携・交流する中で、新たな産業や文化的価値を創造していく都市づくりを目指すものです。さらには、地域に暮らす全ての人々が大学とかかわりを持ち、創造的環境の中で環境にやさしく健康的なライフスタイルを実現できる都市づくりを目指しているものです。

(2) スマートシティ

平成 30（2019）年柏の葉スマートシティコンソーシアムが国土交通省のスマートシティモデル事業に選定されました。スマートシティとは IoT 技術などを使って環境に配慮しながら人々の生活の質を高め、継続的な経済発展を目的とした新しい都市のことです。柏市はこの柏の葉地区を「人と環境にやさしいまちづくり」を目標に土地区画整理事業を進めています。そして世界が直面する諸課題の解決モデルとして街づくりを通じて世界に提示していく「モデルまちづくり」を目指しています。

柏の葉地区は、そこに住む人々とともに新しい生活モデルを作り上げる実践をこれからも続けていくでしょう。



図3. 平成25（2013）年の航空写真（原図：国土地理院空中写真）

参考文献

「柏・新風土記」 相原正義 崙書房 昭和 61 年

「歴史ガイドかしわ」 柏市史編さん委員会 平成 19 年 柏市教育委員会

UDCK HP 「柏の葉ナビ」 2019 年 8 月 20 日閲覧

<http://www.kashiwanoha-navi.jp/>

柏市 HP 「市民が育むスマートシティ」 2019 年 8 月 20 日閲覧

<http://www.citykashiwa.lg.jp/soshiki/blogtokume/p019390.htm>

第1章 原始古代

目次

I 柏の遺跡	
1. 旧石器時代	p. 13
(1) 旧石器時代の概要	p. 13
(2) 常磐道建設時の柏地区発掘旧石器時代遺跡	p. 17
① 中山新田 I 遺跡 ② 聖人塚遺跡 ③ 元割遺跡	
(3) T×周辺（柏北部）の遺跡	p. 21
① 溜井台遺跡 ② 原山遺跡 ③ 農協前遺跡 ④ 大割遺跡	
⑤ 大松遺跡 ⑥ 富士見遺跡 ⑦ 駒形遺跡 ⑧ 原畑遺跡	
(4) 柏のその他の遺跡	p. 22
① 鴻ノ巣遺跡 ② 光ヶ丘遺跡 ③ 天神向原遺跡	
④ 片山古墳群 ⑤ 石揚遺跡 ⑥ 大六天遺跡 ⑦ 鍵作古墳	
2. 縄文時代	p. 23
(1) 縄文時代の概要	p. 25
(2) 縄文時代の遺跡	p. 25
① 花前 I 遺跡 ② 中山新田 I 遺跡 ③ 中山新田 II 遺跡	
④ 聖人塚遺跡 ⑤ 水砂遺跡 ⑥ 小山台遺跡	
3. 常磐道以外の柏の遺跡	p. 30
⑧ 石揚遺跡 ⑨ 山神宮裏遺跡	
⑩ 小青田駒形・大松・富士見・原畑遺跡 ⑪ 湖南台遺跡群	
⑫ 明坊池貝塚 ⑬ 鴻ノ巣遺跡 ⑭ 山ノ田台遺跡	
⑮ 金山宮後原遺跡 ⑯ 雷神遺跡 ⑰ 天神向原遺跡 ⑱ 原遺跡	
⑳ 布瀬貝塚 ㉑ 追花遺跡 ㉒ 田中小遺跡 ㉓ 埋田遺跡	
㉔ 宮ノ内遺跡 ㉕ 中島込第 2 遺跡 ㉖ 中島遺跡 ㉗ 大井貝塚	
㉘ 岩井貝塚	
4. 調査継続中の注目される遺跡	p. 32
① 大久保遺跡・大室小山台遺跡 ② 矢船遺跡 ③ 高砂遺跡	

I 柏の遺跡

1. 旧石器時代

表1 古代の遺跡（遺跡年表）

年代	時代	時期	掲載した主な遺跡	主な出来事
約 35,000 年前	旧石器時代		常磐道・柏地区の遺跡、鴻ノ巣遺跡、光ヶ丘遺跡、中馬場遺跡、TX・柏地区の遺跡、石揚遺跡、片山古墳群	柏にヒトが住み始める
約 13,000 年前		縄文時代	草創期	元割遺跡、中山新田遺跡
	早期		駒形遺跡、富士見遺跡	貝塚の形成が始まる ムラの誕生
	前期		雷神遺跡、石揚遺跡	温暖化がピークとなり海水面が最も高くなる
			大松遺跡、石揚遺跡	柏に小規模な貝塚が増加する
	中期		大松遺跡、追花遺跡、聖人塚遺跡、大室小山台遺跡、布瀬貝塚	大規模な貝塚・ムラが出現する
後期	岩井貝塚、大井貝塚 中島遺跡		大規模な貝塚・ムラが発達する	
約 2,600 年前	弥生時代	晩期	岩井貝塚	遺跡数が減少する
		前期		稲作が日本列島に伝わる
		中期		壺棺再葬墓の盛行 方形周溝墓の出現
西暦 200 年ごろ	古墳時代	後期	笹原遺跡、中馬場遺跡 狸穴遺跡	倭国国王が金印を授かる（57 年）
		出現期 前期	一番割遺跡	卑弥呼が魏に朝貢する（239 年）
			戸張城山遺跡 幸田原遺跡、北ノ作 1 号・2 号墳 呼塚遺跡、浅間古墳	定型化した大型前方後円墳が各地に造られ、ヤマト政権の勢力が広がる
中期		弁天古墳	大仙陵古墳（現仁徳天皇陵）が造られる	
後期 ～終末期		花野井大塚古墳	「辛亥」銘鉄剣（稲荷山鉄剣）が造られる（471 年）	
		原 1 号墳、箕輪古墳群 船戸古墳群 若林 I 製鉄遺跡	仏教の伝来（538 年） 飛鳥寺の造営（588 年）	
710 年 （和銅 3 年）	奈良時代		大井東山遺跡、中山新田遺跡、大井東部地区遺跡群	乙巳の変（645 年） 平城京に都を遷す（710 年）
794 年 （延暦 13 年）	平安時代		宿ノ後遺跡、花前遺跡、天神台遺跡、根戸高野台遺跡、手賀廃寺、中島込第 2 遺跡	平安京に都を遷す（794 年）

(1) 旧石器時代の概要

常磐道の建設にあたり柏地区にある 11 遺跡の発掘調査が行われました。これまでこの地域の歴史といえば野馬土手と牧の存在くらいしか知られていなかったのですが、これらの遺跡すべてから旧石器時代の石器が見つかっただけでなく、7,000 点に及ぶ埋蔵文化財が出てきたことにより、旧石器時代から幕末に

至る約2万年間の生活が明らかになってきました。

日本の最古の人類の痕跡は、約35,000年前～13,000年前のもので、柏周辺に人々が住み始めたのもほぼこの頃です。この時代を旧石器時代といい、石を巧みに利用した様々な石器を使い、狩りや採集をしながら生活していました。

この頃は、氷河期の最寒期で、降水量は少なく、関東地方の冬にはほとんど雪が降りませんでした。年平均気温は現在よりも7～8℃低く、現在の札幌(8.2℃)や函館(8.5℃)とほぼ同じ気温だったといえます。

寒冷な氷期を生き抜いた旧石器時代人は針葉樹林や落葉樹林のなかで、石器で狩猟具を作り獲物を狩り、木の実を採取し、食料として移動生活を送っていました。氷期の動物群としてはナウマンゾウ、オオツノジカが主な狩猟対象でしたが気候が温暖化するにつれ滅亡したため、替わってニホンシカ、イノシシ、ノウサギ等の小形動物を狩っていました。住居跡が発見されないことから石器は季節によって移動する動物の群れを追う旧石器人が残したものと推測されます。

旧石器を包含する関東ローム層は、当時盛んであった火山活動によって運ばれた火山灰をもとに生成されています。古いものから多摩ローム層、下末吉ローム層、武蔵野ローム層、立川ローム層という序列で、千葉県内で旧石器が発見されているのは最も新しい立川ローム層(35,000年前から12,000年前)です。立川ローム層は主に古富士火山の火山灰で構成され、その厚さは地表下約2mです。

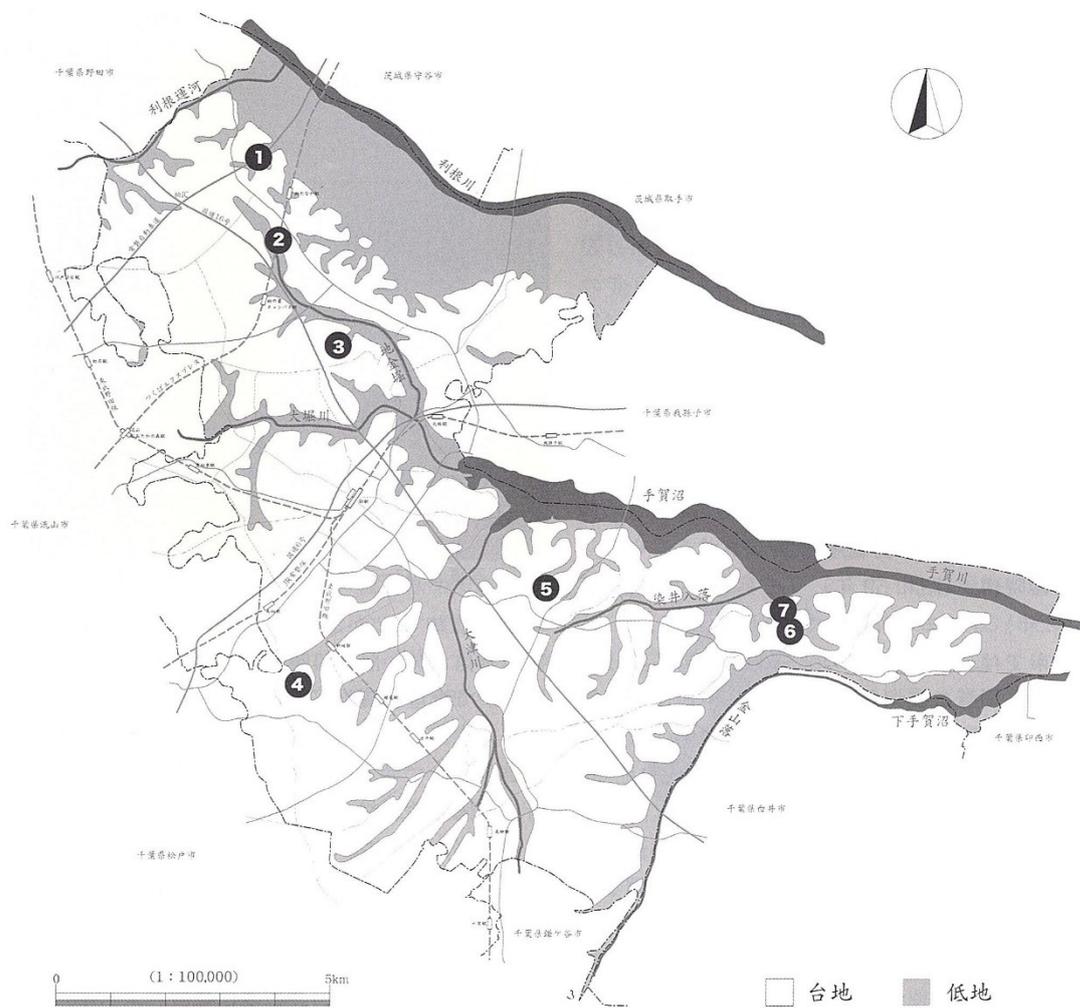
下総台地の立川ローム層は、大きく8枚(ⅢからⅩ層)に分層され、その間に浅間山起源の立川ローム上部ガラス質火山灰(UG)、鹿児島県始良カルデラ^{あいら}から飛来した始良TN火山灰(AT)などの数枚の鍵層が挟まれています。それぞれの土層の年代は測定されており石器の年代は発見された土層から判断できます。

現在市内には68か所の遺跡が確認され、この中には石器がまとまって出土している場所もあり、これをブロック(遺物集中地点)と呼んでいます。この時代には様々な石器が考案され、石材は様々な地域から運ばれました。柏市内でも三大石材^{注1}と呼ばれるもののうち、硬質頁岩や黒曜石^{けつがん}が使用されています。石材の各産地はかなり遠隔地であり、直接持ち込まれることはなかったと思わ

れ、地域間の交易などを介して、間接的にもたらされたと思われます。

注1：三大石材とは

- ①硬質頁岩：堆積岩の一種で粘土が固まってできたもの。薄くて板状で柔らかい
- ②黒曜石（天然硝子）：全国60か所から取れる。神津島、信州産他
- ③サヌカイト（讃岐岩）：近畿から九州まで緻密な古銅輝石。カンカン石（たたくと良い音がする）とも呼ばれる



旧石器時代遺跡分布図

番号	遺跡名
①	常磐道・柏地区の遺跡
②	TX・柏地区の遺跡
③	鴻ノ巣遺跡
④	光ヶ丘遺跡
⑤	天神向原遺跡
⑥	片山古墳群
⑦	石揚遺跡

図1 旧石器時代の遺跡（「柏市史（原始古代中世考古資料）」）

(2) 常磐道建設時の柏地区発掘旧石器時代遺跡

ここで注目されるのは常磐自動車道が建設される時発掘された遺跡です。

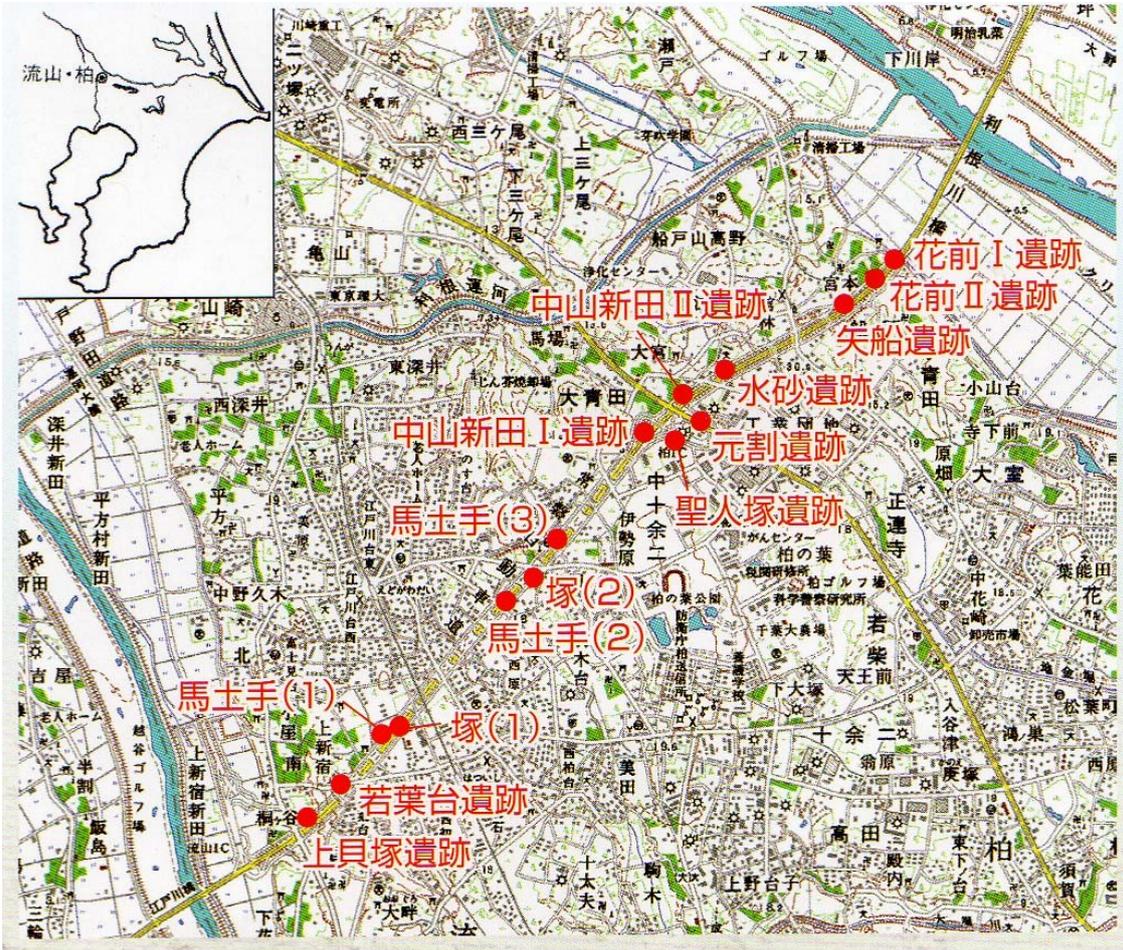


図2 常磐自動車道の遺跡（「悠久の歴史を旅して」）

中山新田Ⅰ遺跡、^{しょうにんづか}聖人塚遺跡、^{もとわり}元割遺跡の3か所で、この地域の遺跡の7割ほどの遺跡が見つかっています。これらの遺跡からの出土物を見ると石器石材の産地が広範囲にわたっており、各地からもたらされたものと思われます。栃木南部から下総西部に連なる台地（15m～20m）は、現在では利根川や利根運河で寸断されていますが、当時は栃木方面と地続きであったため、物資の交流があったものと推測されます。

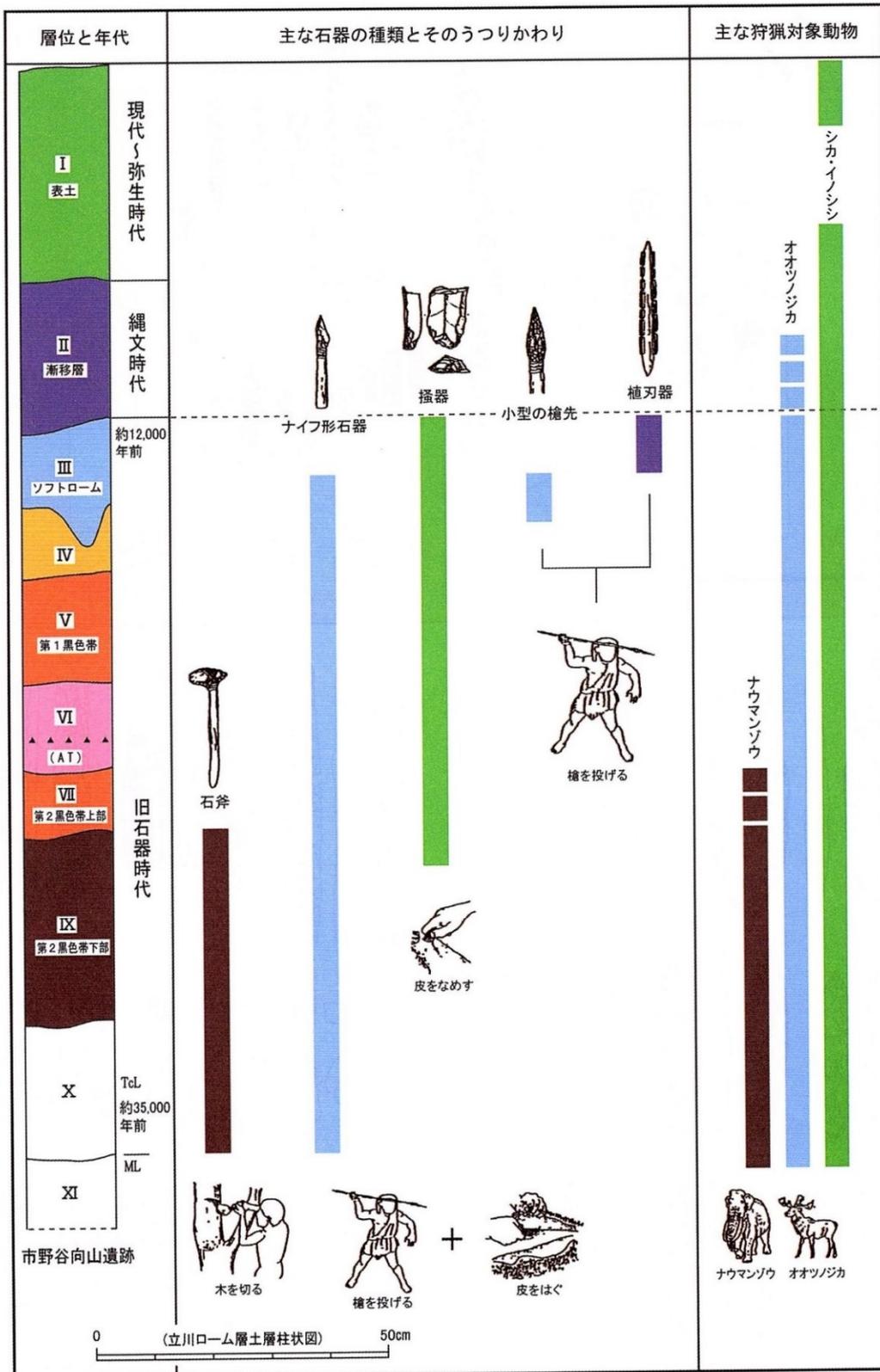


図3 常磐道の遺跡から発掘の石器の移り変わり（橋本 2015 を一部改変）
 （「悠久の歴史を旅して」）

① 中山新田 I 遺跡

図3のⅢ層から黒曜石製の小型石槍が散見するものの、主体はⅩ層（約30,000年前）で、7か所の石器集中地点に分けられます。

中央部では4か所の石器集中地点（ユニット）が発見され、この時期の特徴である局部磨製石斧が出土しています。一方、最南端部には環状ブロックと呼ばれるユニットが位置しています。

利根運河に向かう大青田支谷に北面しており東側には小支谷を隔てて聖人塚遺跡があります。9つのユニットからなり立川ローム層Ⅹ層からナイフ形石器、台形様石器を基調として局部磨製石斧や削器等計2,156点もの多様な石器群が出土しており、千葉県内でも有数の大遺跡です。

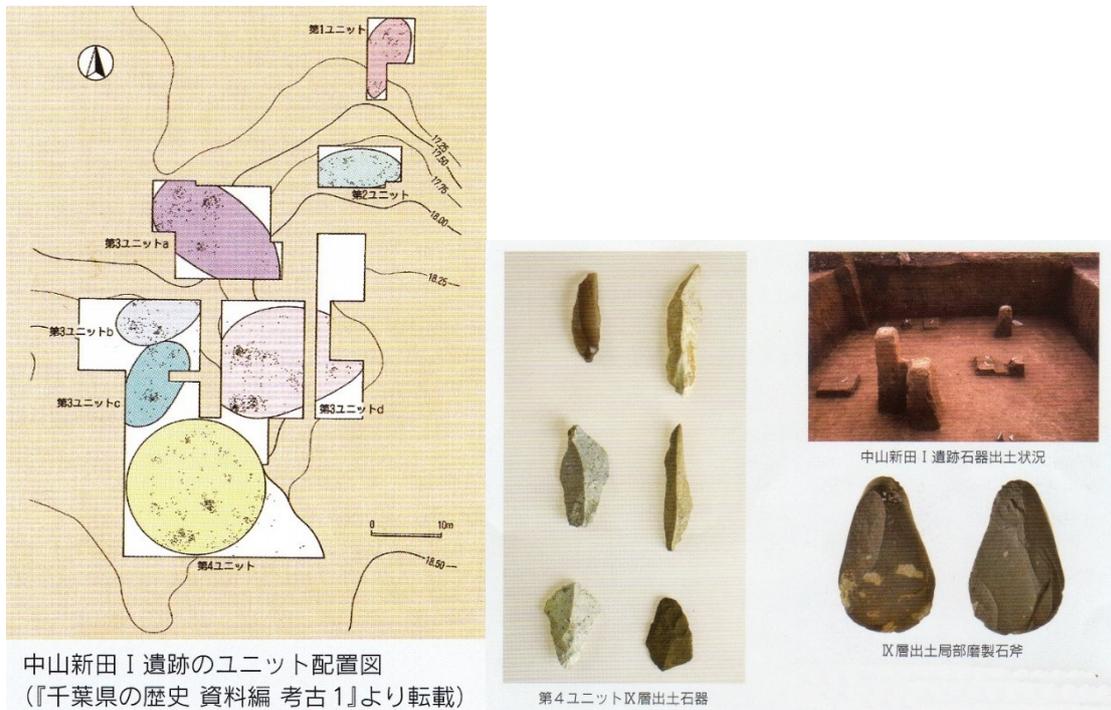


図4 ユニットの配置図と出土状況（「悠久の歴史を旅して」）

② 聖人塚遺跡

立川ローム層のほぼ全層から石器が出土しており、出土層位を基準にした5つの文化層と、21か所もの石器集中ブロックに区別されることから、25,000年以上もの長期間にわたり、同一場所で人々の営みが続いていたと推測されます。

総数 1,324 点もの石器のうち、約 900 点が石器製作の際に産出された剥片や削片であることから、石器製作遺跡であると考えられます。



図5 聖人塚遺跡の出土品（「悠久の歴史を旅して」）

③ 元割遺跡

Ⅶ層（第2黒色帯上部）やⅣ・Ⅴ層（ハードローム層上部）で石器群が見つっていますが、特に後者では 745 点もの石器類が出土し、ナイフ形石器や削器などこの時期に一般的な器種で構成されています。

一方、本遺跡で最も注目される資料が、石槍を主体とした石器群です。出土した層位から、発掘調査報告書や「千葉県歴史」などでは縄文時代草創期の資料として扱われていますが、この時期の土器が 1 点もなかったことや、他遺跡の例などから、旧石器時代最終末の資料ではないかと推測されます。

2 か所の石器集中地点から、石槍 31 点、削器 6 点のほか、剥片類 23 点が出土しています。石槍の石材は、黒色の珪化岩、チャート（珪質の堆積岩の一種・きめ細かで固い）、ガラス質の黒色安山岩の 3 種類が使われています。

集中して出土した石槍は昭和 31（1956）年に調査された新潟県本ノ木遺跡の成果から本ノ木型」と呼ばれています。



図6 元割遺跡の出土品（「悠久の歴史を旅して」）

(3) T X 周辺（柏北部）の遺跡

① 溜井台遺跡^{ためいだい}

地金堀と大堀川に挟まれた標高 18m の平坦な台地上に 15 か所のブロックと 4 か所の礫群検出。ナイフ形石器が主体。958 点の石器出土（23,000～18,000 年前の石器群）

② 原山遺跡

地金堀上流右岸に 52 か所のブロック検出。2,258 点の石器群と礫出土。環状ユニット、黒曜石、安山岩、チャート、珪質頁岩等。5 枚の文化層が検出され、第Ⅱ文化層で環状ユニットが認められた

③ 農協前遺跡

手賀沼に注ぐ地金堀上流の左岸、標高 20m の平坦な台地上 18 か所のブロックから 1,217 点の石器群と礫出土。Ⅳ層の環状ユニットでは、10 か所に及ぶ火所が想定されている

④ 大割遺跡

地金堀の右岸、標高 20m の台地。50 か所のブロック。2,927 点出土。ナイフ石器と角錐状石器。23,000～18,000 年前の石器群が中心となっていて、石材は黒曜石が中心で、高原山が主体だが、関東周辺の産地が出そろっている

⑤ 大松遺跡

支谷に向かい突出した半島状の地形、標高 18m。21 か所のブロック。2,487 点の石器群出土。ナイフ形石器と石槍。Ⅳ層上部を主体として、環状ユニットを構成している

⑥ 富士見遺跡

標高 10～17m。18 か所のブロック。2,002 点の石器群出土。ナイフ形石器、局部磨製石斧。大別、4 枚の文化層に分かれている

⑦ 駒形遺跡

富士見遺跡とともに支谷に向かい突出した半島状の地形、標高 15～17m。6 か所のブロック。363 点石器群出土

⑧ 原畑遺跡

利根川低地からのびる支谷の最奥部。北側が富士見、東側が小山台、西側が矢船Ⅱ遺跡と隣接。標高 18～19m。27 か所のブロック。1,475 点の石器群出土。

ナイフ石器（石刃素材）、石斧など。石材は概ね北関東型の黒色安山岩、黒色頁岩、黒曜石（箱根信州産）、緑色凝灰岩（石斧）、ガラス質黒色安山岩が主体

(4) 柏のその他の遺跡

① 鴻ノ巣遺跡

（昭和48（1973）年に調査された古い調査事例。23,000～18,000年前の石器群が中心）

北柏駅北西2km。標高17～18m。旧石器時代、縄文、弥生、平安時代の遺跡、遺物が発見

② 光ヶ丘遺跡

柏市内でも出土例の少ない有樋尖頭器の出土。増尾駅西方1.5kmの台地上、標高24mに位置。5か所のブロック。151点の石器。1か所の礫群。177点の遺物が発見

③ てんじんむかいはらいせき 天神向原遺跡

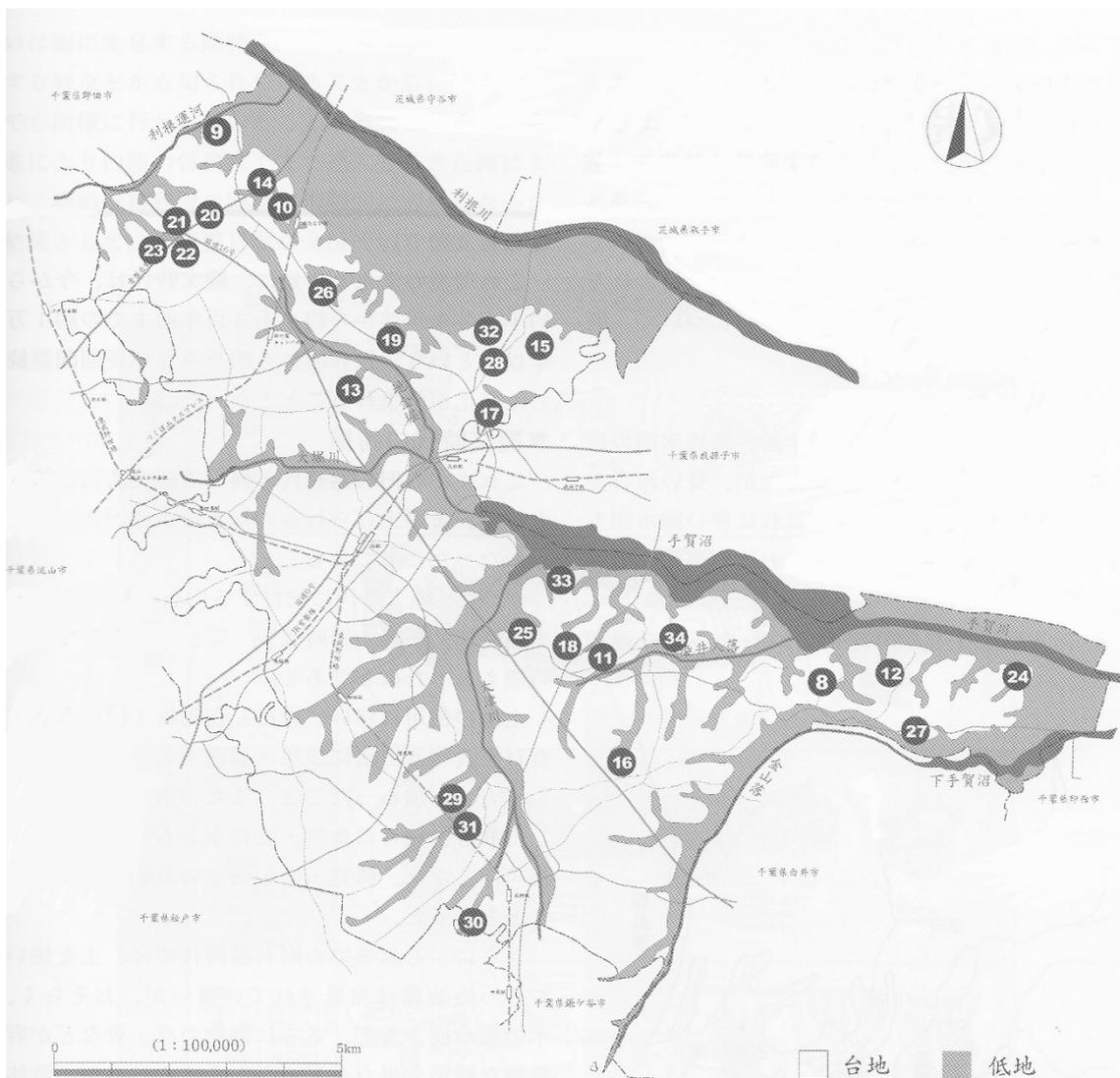
立川ローム層Ⅶ層段階の一般的な様相をよく反映した遺構で大規模なブロックを形成する。手賀沼に向かう支谷最奥部、標高24mの台地上。北に大井東山遺跡、船戸古墳群、船戸貝塚（縄文時代の主淡貝塚）、西に大井大畑遺跡（奈良平安時代）、追花遺跡、追花遺跡Ⅱ遺跡、浅間山遺跡（古墳時代）が所在している。中でも大井東山遺跡からは、時代が下るが三彩釉小壺と銅鈴は優品として特筆される

④ 片山古墳群

手賀沼南岸での数少ない調査例の一つで、18,000～16,000年前の資料が一括して検出される事例は乏しく、希少価値が高い遺跡である。手賀沼南岸の平坦な台地上、湖岸から0.7kmの距離。標高は22m。旧石器時代から奈良、平安時代の遺跡が密集している。北作1、2号墳、西に石揚遺跡がある。3か所のブロックから155点の石器出土

⑤ 石揚遺跡

手賀沼を北に望む標高20～22mの平坦な台地上。湖岸から300mの距離。36か所のブロック。2,213点の石器出土。2点の有舌尖頭器、5点の石槍出土。旧石器時代前半の資料が中心。特にⅦ層段階に良好な接合資料^{注2}があり、当時の石



第1図 本書所収遺跡位置図

番号	遺跡名	番号	遺跡名	頁	番号	遺跡名
8	石揚遺跡	17	雷神遺跡		25	追花遺跡
9	山神宮裏遺跡	18	天神向原遺跡		26	田中小遺跡
10	小青田駒形・大松・ 富士見・原畑遺跡	19	原遺跡		27	埋田遺跡
11	湖南台遺跡群	20	水砂遺跡		28	宮ノ内遺跡
12	明坊池貝塚	21	中山新田遺跡 (旧：中山新田II遺跡)		29	林台遺跡
13	鴻ノ巣遺跡	22	聖人塚遺跡		30	中島込第2遺跡
14	花前遺跡	23	中山新田遺跡 (旧：中山新田I遺跡)		31	中島遺跡
15	山ノ田台遺跡	24	布瀬貝塚		32	布施城山遺跡
16	金山宮後原遺跡				33	大井貝塚
					34	岩井貝塚

図8 縄文時代の遺跡の位置図（「柏市史（原始古代中世 考古資料）」）

(1) 縄文時代の概要

約 20,000 年前に最終氷期の最も寒冷な時期のピークを迎えましたが、徐々に気温が温暖化し、海水面も上昇し、谷の陸地奥まで海岸線が侵入しました（貝塚の形成）。土器が使用され始めると、動物や植物の食材の加熱調理や保存が行われるようになります。

縄文時代には人々は一か所にムラを作って定住し、ムラを中心に食料を始め生活に必要な道具類等を調達しました。一方、明かに領域内にはない遠い地域にしか存在しない材料で作られた道具もムラの跡から発見されています。

縄文時代を代表する道具である縄文土器は、制作者が自由に創作したのではなく、制作者が所属する集団によって形や文様がある程度決まっていたようです。その証拠に、よく似た土器が異なる遺跡から発見されています。このような類似したモノのまとまりを「型式」と呼び、時代や地域をとらえる単位とします。

全国の縄文時代の貝塚のうち約 2 割（750 か所）は千葉県にあり、全国最多で、江戸川などの川近くや印旛沼に面した台地の端に多くあります。中でも柏市の岩井貝塚は有名な遺跡です。

(2) 縄文時代の遺跡

① 花前 I 遺跡

縄文時代前期前半の竪穴住居跡が 9 軒調査されています。いずれも隅丸方形の平面形で、8 軒の竪穴住居跡内の覆土中に貝層が堆積していました。特に、103 号竪穴住居跡内には全面に貝層が堆積し、多くの遺物が発見されています。ハマグリの貝刃もこの住居跡から出土しています。関山式の文様様式を引き継いでいないことから、流山市若葉台遺跡よりやや新しい時期と思われる。

黒浜期の竪穴住居跡覆土中に捨てられた貝種から、当時の古鬼怒湾（現在の利根川下流域に広がる）での生業の様子をうかがうことができます。

一方、前期後半の浮島式土器が出土した竪穴住居跡は 2 軒のみで、この時期の 2 軒の竪穴住居跡には貝層が伴っていませんでした。



図9 花前I遺跡の出土品（「悠久の歴史を旅して」）

② 中山新田I遺跡（図8の遺跡③）

縄文時代中期前半の竪穴住居跡は5軒と小規模ですが、いずれも屋内炉がなく、床面中央部に支柱穴が位置するという共通の特徴をもっています。また、5軒中3軒の竪穴住居跡は、床面に同心円状の段が掘り込まれる「有段竪穴」の構造です。

出土した縄文土器は、中期前半の阿玉台式期の古い段階で、中部高地に分布の主体をおく「^{むじなさわ}猪沢式土器」の文様が入った土器も一定量見ることができます。



図10 中山新田I遺跡の出土品（「悠久の歴史を旅して」）

③ 中山新田Ⅱ遺跡（図8の遺跡①）

聖人塚遺跡北側の小さな谷を挟んだ台地上に位置し、谷を望む台地南側縁辺部の比較的狭い範囲に竪穴住居跡群が集中して形成されています。

調査で見つかった竪穴住居跡は、すべて縄文時代中期前半の阿玉台期^{あたまだい}に営まれています。比較的短期間の集落と思われます。

阿玉台式土器は、香取市の阿玉台貝塚を標識遺跡として名付けられた特徴のある土器です。千葉県を含む東関東や北関東に分布の中心があり、土器の胎土中にキラキラ光る雲母片が多く含まれるのもこの土器の大きな特徴です。隆起線文や半分に割った竹管を用いた角押文などの文様が付けられています。



図11 中山新田Ⅱ遺跡の出土品（「悠久の歴史を旅して」）

④ 聖人塚遺跡（図8の遺跡②）

竪穴住居跡等は、北西から流れ込む小河川が分岐する沖積地を望む台地縁辺部に集中しています。早期～晩期の遺物が見つっていますが、主体を占めるのは、縄文時代中期前葉～中葉（約4,500年前～5,500年前）の遺構・遺物です。

出土した土器は、神奈川県相模原市の勝坂遺跡から出土した土器をもとに名付けられた「勝坂式土器」の影響が部分的に認められます。

この遺跡の大きな特徴としては、多量に発見された石器があげられます。黒曜石の大形の石核や剥片が目立ち、その多くは神津島産と考えられています。

しかしながら、石鏃^{せきぞく}（やじり）の大半が黒曜石でありながらも神津島産は少なく信州系やその他の石材が主体となります。このことから、神津島産の黒曜石を使った石鏃は遺跡外に運び出されたものと思われます。



図12 聖人塚遺跡の出土品（「悠久の歴史を旅して」）

⑤ ^{みずすな}水砂遺跡（図8の遺跡⑳）

縄文時代中期の竪穴住居跡は5軒と少なく、阿玉台式期前半3軒と後半の2軒で構成されています。前者は、円形や楕円形の平面形で、屋内炉がなく、床面中央に支柱穴が見られます。後者は、隅丸方形と円形プランで、周溝と屋内炉を伴っています。

人面と思われる資料（図13）は、土器の把手となる可能性が高いのですが、土偶と同じような顔面表現をしています。正面の前頭部を欠いていますが、ゆるやかな三角形の頭部を持つものと思われます。両耳の下位に穴が開けられています。頭頂部内側は深くぼみがあり、竹管工具による刺突が見られます。胎土中に比較的多くの雲母を含み、目の周辺を巡る細い角押文（有節線文）等の特徴から、阿玉台期の前半段階と思われる。

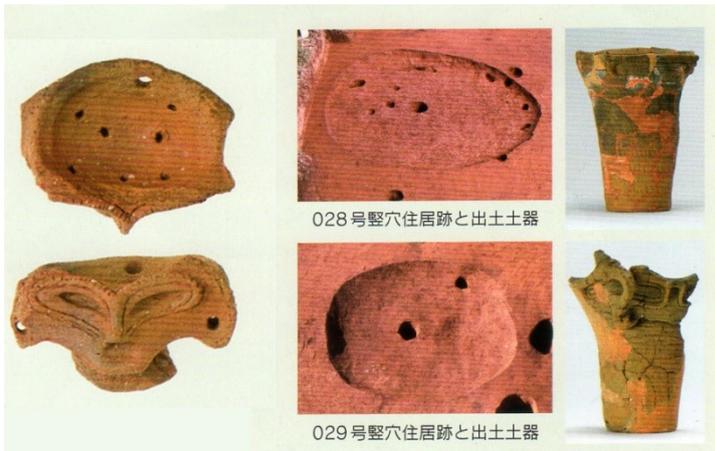


図13 水砂遺跡の出土品（「悠久の歴史を旅して」）

こやまだい
⑥ 小山台遺跡

つくばエクスプレスに関連した柏北部東地区内では、12の遺跡が調査され、縄文時代を中心とした大規模な集落が集中する地域として注目されています。

特に、小山台遺跡では縄文時代中期の環状集落が調査されました。多くの竪穴住居跡や貯蔵穴、土坑などが中央の空白部分を囲むように広がり、環の外側で直径100m以上の大きさを誇っています。この環状集落を中心にリーダーの象徴であるヒスイ製の大珠が7点も発見されました。

阿玉台式土器と同時期に作られた「勝坂式土器」も出土しています。勝坂式土器は東京・神奈川・山梨・長野南部で出土しています。勝坂式はヒト形や動物形の装飾が多く見られ、手を三つ指で表現するという特徴があり、小山台遺跡の土器は三つ指表現の勝坂式を取り入れたものです。



図14 小山台遺跡の出土品（「悠久の歴史を旅して」）

3. 常磐道以外の柏の遺跡

柏市内には、常磐道沿線以外にも多くの縄文遺跡が発掘されています。

表2 縄文時代の遺跡の概要

図8	遺跡名	所在地	遺跡の特徴、出土資料 など
⑧	石揚遺跡	手賀の丘少年の家周辺	前期初頭に属する集落は千葉県、近隣地域でも発掘が極めて少ない狩りを中心とした生活、竪穴住居跡、動物を捕るための落とし穴 石器は石のかけら、黒曜石
⑨	山神宮裏遺跡	市立柏高校構内 標高 15m	早期後葉の炉穴を中心とするが、覆土に貝層を伴った炉穴は希少な事例 早期茅山期の住居 2 軒、前期黒浜期住居 3 軒、土坑貝層を伴った炉穴 9 基
⑩	こあおた 小青田 駒形・ おおまつ 大松・富士見・ 原畑遺跡	柏北部東地区 標高 13~18m	前期を通して集落が形成され、黒浜期には合計 179 軒もの住居が検出 住居跡、貝層、黒浜式土器、装身具、石錐、石匙、磨製石斧等出土
⑪	湖南台遺跡群	沼南高校付近、岩井、箕輪、若白毛 標高 20m	中期前葉から後期初頭を中心とした遺跡、定住集落 炉穴 22 基、土坑 4 基、柵方住居、炉穴内にはマガキ、シオフキ 柄鏡形住居より南海産のオオツタノハを模した土製腕輪は希少な事例
⑫	明坊池貝塚	手賀沼南岸、少年自然の家と石揚遺跡の近く谷の斜面 標高 20m	前期黒浜式土器がまとまって出土
⑬	鴻ノ巣遺跡	松葉町 5 丁目 標高 17~18m	縄文集落の全容を明らかにした全面発掘の先駆 黒浜式土器を伴う竪穴住居 21 軒、貝塚
⑮	山ノ田台遺跡	あけぼの山公園 標高 19m	黒浜式土器、貝層（サルボウ、マガキ、ハマグリ）、集石土坑出土、住居 2 軒
⑯	金山宮後原遺跡	手賀大橋の南 3 km 標高 25~26m	黒浜期の竪穴住居 8 軒、住居内貝層出土
⑰	雷神遺跡	布施新町 4 丁目三井団地 標高 19m	昭和 45 年に調査された、柏市でも古い段階の調査事例 住居跡 4 軒、貝層土器出土

⑮	天神向原遺跡	柏市大井	前期中葉を主体とした集落 竪穴住居 12 軒、土坑 7 基、土器、石製品出土
⑲	原遺跡	柏市花野井吉田家住宅付近、利根川に向かって突き出した舌状台地 標高 18~19m	縄文時代前期後半の霊園 竪穴住居 3 軒、土坑 96 基、土器、石製品（玦状耳飾り、石さじ、琥珀製垂飾品）出土
⑳	布瀬貝塚	印西市との行政界 標高 20m	中期の貝塚で、岩偶など極めて希少な重要資料 ハマグリ、シオフキ、サルボウ出土
㉕	追花遺跡	柏市大井 標高 20m	前期中葉～後葉環状集落 住居 7 軒、深鉢の土器出土
㉖	田中小遺跡	柏市大室柏ビレッジの一画 標高 18m	中期の掘立柱建物跡や柱穴列の確認されたことは、本地域では希少な事例 前期黒浜期の住居 1 軒、土坑出土、中期阿玉台期の住居
㉗	埋田遺跡	柏市手賀 標高 22m	中期の集落 竪穴住居 2 軒、土坑 2 基出土
㉘	宮ノ内遺跡	柏市布施、 標高 20m	中期阿玉台期、加曽利期の竪穴住居 30 軒、土坑 147 基出土
㉚	中島込第 2 遺跡	柏市高南台 3 丁目	後期初頭の小規模な集落 竪穴住居 10 軒、土坑 18 基出土、溝穴 2 条
㉛	中島遺跡	柏市逆井、水源を鎌ヶ谷市に発する大津川本流と支流との台地上に位置 標高 14~15m	低標高の北側緩斜面に形成された後期前半の集落 竪穴住居 4 軒
㉜	大井貝塚	柏市大井、大津川河口右岸 20m	後晩期の集落遺跡、馬蹄形貝塚と推定されている ヤマトシジミ、ハマグリ、ハイガイ、淡水類の貝出土 石鏃、打製石斧、土偶出土
㉝	岩井貝塚	手賀沼南岸、沼南高校に隣接 標高 20m	3 千年前、 ヤマトシジミ、アサリ、ハマグリ、アカガイ、アワビ、クジラ、クロダイ、スズキ、シカ、イノシシ出土

注：番号欄の数字は、図 8 の遺跡名（白抜き数字）

4. 調査継続中の注目される遺跡

柏市の遺跡は現在も調査継続中のものが多くあり、新しい調査資料が順次発表されています。最近は、次の資料も注目されています。

① 大久保遺跡・大室小山台遺跡

トンネル状遺構。大室小山台遺跡では、高さ・幅ともに平均0.8mほどの横穴（トンネル）が曲がりくねって総延長310m以上もつながっている。その所々に0.8～1.0m、深さ1.6mほどの地上までの円筒形縦穴が掘り込まれている。また出入り口と見られるスロープがある（アナグマの巣穴を広げて活用したのか）

② 矢船遺跡

前期後葉の土製・石製の玦状^{注3}耳飾りが15点も集中して出土されている

③ 高砂遺跡

中期初頭の土製土器が出土。房総における縄文中期初頭の状況を知るうえで注目される遺跡である

注3：環状の一部を欠き取ったもの。本来は腰下げの玉の一種

第2章 中世

目次

I 古代から戦国時代の柏市域	
1. 概要	p. 35
2. 大和の力が柏に (弥生、古墳時代)	p. 35
(1) 弥生時代	p. 35
(2) 古墳時代	p. 36
(3) 「総」の国の様子	p. 36
3. 古代国家の形成・東国武士団のおこりと柏	p. 37
(1) 都と柏を結ぶもの (奈良時代)	p. 37
① 奈良時代の交通路	
② 都に納めたもの	
(2) 将門旋風ふきあれる (平安時代)	p. 39
① 平将門の登場	
② 下総の荘園のおこり	
4. 武将の争乱のころの柏	p. 42
(1) 頼朝挙兵を手助けした千葉氏 (鎌倉時代)	p. 42
① 源頼朝と柏	
② 千葉氏の6人の兄弟が下総一帯に勢力を伸ばした	
③ 阿弥陀如来坐像をめぐる謎	
(2) 境根原の決戦 (室町時代)	p. 44
① 南北朝の争いの時、千葉氏はどのように行動したか	
② 相馬御厨をめぐる争い	
③ 境根原の合戦とは	
④ 合戦・武士にまつわる地名	
(3) 上杉氏と北条氏の戦い (戦国時代)	p. 46
① 戦乱に巻き込まれる東葛地方	
② 天下の統一と柏周辺	

③ いろいろな職業

④ 地域に残る城跡

II 柏市の製鉄遺跡

- | | |
|-------------|-------|
| 1. 概要 | p. 50 |
| 2. 世界の鉄の歴史 | p. 50 |
| 3. 日本の製鉄史 | p. 50 |
| 4. 柏市の製鉄遺跡 | p. 52 |
| 5. たたら製鉄の概要 | p. 54 |

参考文献

I 古代から戦国時代の柏市域

1. 概要

弥生時代、古墳時代を経て、大和地方に古代国家が誕生しました。律令制度のもとに、全国に国府（長官「国司」の役所）、国分寺、国分尼寺がおかれ、これらと都を結ぶ交通網が整えられ古代国家が形成されていきました。

都からは皇族や貴族が各地方に派遣され、地方の行政、開発が進められていきましたが、地方の開発が進むにつれて、力をつけた地方長官などが都に帰らず土着して地方豪族となり荘園制度（私的な大土地所有の形態）が生まれます。これに伴い土地（領地）争いなども起こるようになります。豪族は自らの土地（領地）を守るために武力を持つようになり、武士の棟梁が生まれてきます。

平安時代後期になると武士団が勢力を持つようになり、政治体制は天皇・貴族の政治から武家政治へと大きく変化していきませんが、鎌倉幕府、室町幕府と時代が進むにしたがって、地方の武士団（領主、大小名）が台頭して、領地争い、権力争いが激しくなっています。

柏市域を含む東葛地方もこの流れの埒外にはいられず、千葉氏や高城氏などの武將が誕生しましたが、特に室町幕府時代以降は幕府の勢力争いに巻き込まれ、さまざまな戦が繰り広げられました。

戦国時代になると地方の豪族（領主）は、勢力のある大名などの勢力下に入ることにより保身を図らざるを得なくなります。東葛地方ではほとんどの豪族が小田原城の北条氏の麾下に入っていたため、豊臣秀吉との戦いにより東葛地方の有力武將のほとんどは討死するなどして滅び、その家臣たちの多くは農民として土着していきました。

江戸時代になって、東葛地域の土着の豪族・武將が突然に姿を消すのはこのような時代の背景によるものです。

2. 大和の力が柏に（弥生、古墳時代）

(1) 弥生時代

弥生時代に中国から朝鮮半島を経由して水田稲作とともに鉄器（青銅器、鉄

器)が伝えられました。

北九州地方に伝えられた水稻栽培は、西日本から東日本の各地へ広まってきました。また、弥生時代後期になると、小規模ながら製鉄が開始されます。鉄生産が本格的に行われるようになるのは古墳時代後期に中国山地が中心と考えられます。

鉄器の普及や土地を耕して食料を生産する生活は、社会を大きく変え、やがて貧富の差を生み、支配するもの・支配されるものが生まれ、原始国家とも呼ぶべき耶馬台国などの「クニ」ができました。

柏市域を含む東葛地域では、水稻・畑作の耕作に関する資料は見つかっていませんが、多く出土している紡錘車などの遺物から、畑作に主体が置かれ、織物による産業が盛んであったのではないかとわれています。

(2) 古墳時代

3世紀の後半になると、大和地方(奈良県)を中心に定型化した大型の前方後円墳が出現しました。前方後円墳は、大和政権がリーダーシップをとり、集団(地域国家)をこえた共通の文化的シンボルを浸透させたものです。

地方の首長たちは大和政権のリーダーシップを認め、自分が仲間であることを証明するために前方後円墳をつくり、連合内の力関係を古墳の大きさに反映させたと考えられます。

千葉県は全国で最も多く前方後円墳があり、手賀沼周辺の台地上には前方後円墳をはじめ、前方後方墳、円墳など多くの古墳が分布し、大和政権とのつながりが想定できます。

また、製鉄に関して特筆されるのは、手賀沼周辺から多くの製鉄遺跡が発見されていることです。製鉄は、鉄原料の採鉱⇒燃料である木炭の製造⇒製錬⇒鍛冶と高度な知識・技術を必要とする専門性の高い作業であり、国家的規模を必要とすることから、大和政権との強い結びつきが推測されます。

(3) 「総」の国の様子

古墳時代、千葉県のほとんどは「総」の国^{ふさ}注¹と呼ばれ、11の国造^{くにおみやつこ}(古代国家の地方を治める役人で長官)が大和政権から氏姓制度に基づき「姓(かば

ね)」を与えられました。上総国の国造の姓は「臣（おみ）」（有力豪族の姓）が多いが、下総国は広い地域に「千葉」「印播」「下海上（しもつうなかみ）」の3つの国造しかなく姓も「直（あたえ）」（大和政権に服した一般の地方豪族の姓）です。このことから、大和政権の支配は上総から下総へと進められたことがうかがえます。

柏市域を含む東葛地域には国造の存在は確認されていませんが、大規模な古墳分布から有力な首長がいたと考えられます。

注1：「古語拾遺」によると、天富命（あめのとみのみこと）が阿波国の忌部（いんべ）を率いて東国に赴き、麻を栽培させます。このとき良質の麻が成長したところを「総（ふさ：麻の古語）の国」と称したとの説話があります。（「柏市史 原始・古代・中世」）

3. 古代国家の形成・東国武士団のおこりと柏

(1) 都と柏を結ぶもの（奈良時代）

奈良時代は、公地公民を基礎とする律令制度（班田収授法）に基づき、天皇や貴族による中央集権的な全国支配が確立しました。

大宝元（701）年に制定された「大宝律令」では全国を国・郡・里という地域に分けて治めました。また、仏教の力で国を治めようと中央に東大寺、地方に国分寺、国分尼寺を建てました。

今の千葉県は安房、上総、下総の3つの国に分けられ、下総国には11の郡がありました。下総の国府、国分寺は市川市周辺におかれ、現在の柏市域は相馬郡、葛飾郡に属していました。

① 奈良時代の交通路

大化元（645）年の大化改新後、情報伝達手段や税の運搬等を目的に都と地方を結ぶ官道がいちはやく整備されました。当初の古代東海道は相模国（三浦半島）から海路で房総にわたり常陸国府（茨城県石岡市）に向かうものでした。その後、武蔵国（東京都・埼玉県）の開発が進むにつれて、「相模国—武蔵国—下総国—常陸国」の道が本道になりました。

このような主要道には30里（約16km）ごとに駅家と役所がおかれました。下総国には5駅が置かれ、井上・茜津・於賦には馬10頭が置かれたといま

す。なお、茜津の場所は柏市藤心付近であり、於賦の場所は柏市北柏付近、我孫子市新木、湖北周辺のどこかと考えられています。北柏にあった中馬場遺跡は、於賦の駅家の地で、古道に沿った拠点集落として栄えたという説もあります。

また、記録によると、8世紀後半には東北地方への「蝦夷征伐」のため下総国から兵士300人、兵糧米6,000斗を出すことが命令されており、奈良時代に下総国は東北経営の前進基地として大きな役割を果たしていたことがうかがえます。

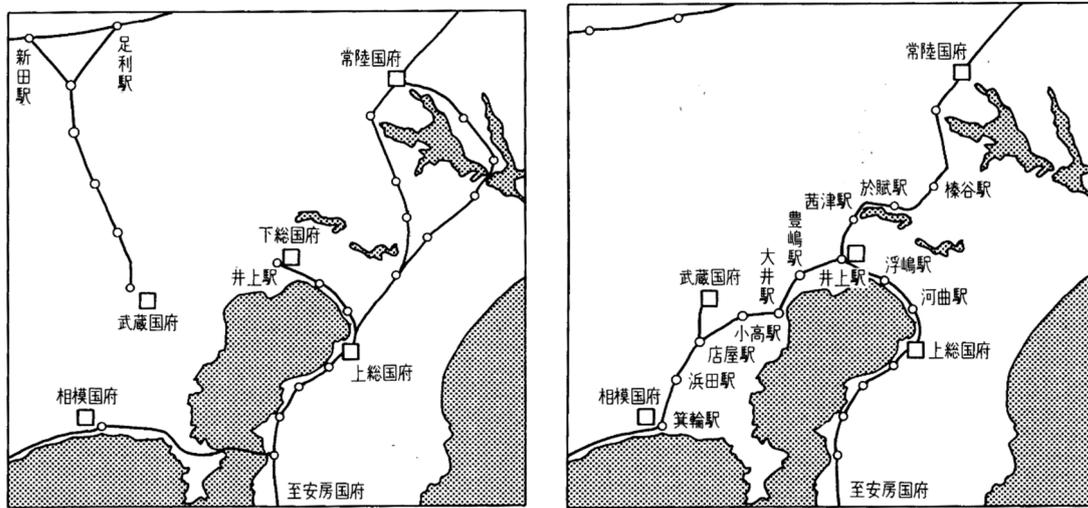


図1 古代東海道 (奈良時代)

(平安時代) [延喜式]

(「柏市史原始・古代・中世編」)

② 都に納めたもの

律令制度を支えたものは地方からの租税（租・庸・調）でした。

税を納めたり労働したりするための移動は公民が自ら食料を持参して行うことと決められており、長旅となりました。

当時の記録をみると、下総から都までは往路 30 日（貢納物は背負って行く）、帰路 15 日と定められていました。

奈良・正倉院に納められている麻袋には、天平 17
やはぎべのまる
 (745) 年の年号や矢作部麻呂という大井郷（現在の柏市大井付近）の村人の名が見られます。



下総国相馬郡大井郷戸主矢作部麻呂調并庸布吉端

写真1 布袋銘

(2) 将門旋風ふきあれる（平安時代）

平安時代になると都では藤原氏が力を伸ばし、摂政や関白の職につき9世紀の中頃から政治の実権を握るようになりました（摂関政治）。そのため、国司として地方に下った貴族や天皇の子孫の中には、そのまま朝廷の権威を利用して、その土地に住み着くことが多くなりました。桓武天皇の子孫である平氏も坂東に住み着き、坂東平氏となったのも同じ理由からでした。この平氏の一族は、常陸・下総・武蔵・相模などを治める役人となり、やがてこの地域の民衆をまとめ、武士の棟梁として領地を広げて、力を大きくしていきました。

① 平将門の登場

関東一円をまきこんだ平将門の乱は、将門が承平 5 (935) 年に叔父・国香を殺したことがきっかけに起こりました。その原因は土地をめぐる争いといわれています。その後、他の豪族をまきこんでたびたび争いを続けるうちに、将門の名前は周辺に知られるようになりました。

天慶 2 (939) 年になると将門は朝廷を相手に争うことになりました。常陸の藤原玄明が国司に反抗して税を納めず、将門に助けを求めてきました。将門は玄明を助けたばかりか、求めに応じて常陸の国府を攻め、建物を焼き払ってしま

いました。その後、下野、上野を攻め、国司を京都に追い払ったことで、朝廷への反逆は明確なものになりました。

やがて、将門は「新皇」（新しい天皇）と名のり、下総国猿島の石井（現在の坂東市）に「王城」をつくり朝廷に反抗しました。しかし農繁期で大多数の兵が村に帰った隙をつかれ、あっけなく敗北してしまいました。将門を鎮めたのは、地方に住み着いた国司の子孫、藤原秀郷や国香の子貞盛などでした。

地方では武士が大きな力を持ちはじめ都の貴族もその力を認めざるを得なくなったのです。

こうして、将門の乱は収まりましたが、「将門記」には「稲束を田に敷きつめて人馬がわたった」とか「幾千の人家を焼いた」など、戦乱の激しかった様子が記されており、各地に伝説が残されました。また、将門ゆかりの地である下総地域には、時の権力者に反抗し、国司の圧政に苦しめられた民衆が、将門を英雄として崇める将門信仰が受け継がれています。

柏市岩井には将門を祀る神社が残るだけでなく、将門を裏切った桔梗御前を疎んで桔梗を植えず、また将門の調伏を祈って建立された成田山には詣でないという風習があります。



写真2「将門神社」（柏市岩井）（撮影：野田）

② 下総の荘園のおこり

8世紀以降、班田収授法をもとにした土地制度は、公民の逃亡や荘園（豪族の私有地）の拡大によって次第に崩れていきました。広大な未開地を残した下総一帯も、9世紀に入ると荘園がさかんにつくられました。多くは平氏一族のものといわれています。将門の乱の後、相馬郡は将門の叔父平良文の領地になり、代々その子孫が受け継ぎました。

やがて、「坂東八平氏」と称される下総国の千葉氏、上総国の上総氏、武蔵国の秩父氏、相模国の三浦・土肥・大庭・梶原・長尾氏などの武士団が成長していきます。

大治5（1130）年平常重（千葉常胤の父）は自分の領地である相馬郡布施郷を、伊勢神宮に寄進し、「相馬御厨」（相馬郡の伊勢神宮の荘園、およそ我孫子市と取手市を中心とした辺り）としました。平常重は自分の土地を名目だけ伊勢神宮の領地とし、自分は下司職（荘官）になり、不輸ふゆの権（自分の領地の租税を納めなくともよい権利）を得ました。このことが、他からの脅威から逃れることと同時に荘園の実質的な支配を確実にしたのです。

市松ヶ崎には「頼朝通」という地名も残っていたといわれています。

注 2：千葉常胤は、阪東平氏の流れをくみ代々下総の国を根拠地とすることから「千葉」氏を名乗るようになりました。

② 千葉氏の6人の兄弟が下総一帯に勢力を伸ばした

頼朝に協力した功績で、千葉常胤の6人の子が下総各地に勢力を伸ばしていきました。

柏市域を含む千葉県北西部一帯及び茨城県南部に広がる相馬御厨一帯を支配したのは、二男の千葉師常（相馬氏を名乗る）でした。これが相馬氏の始まりで、相馬氏の支配は、室町時代まで続きます。

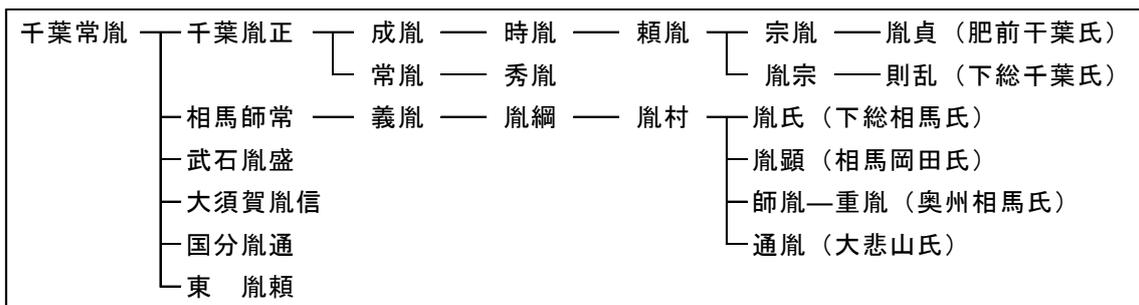


図3 千葉氏略系図（「柏市史 原始・古代・中世編」から引用）

鎌倉時代に柏周辺を支配した相馬氏の城（館）がどこにあったか、今のところはっきりと分かっていません。発掘調査で大きな堀が見つかった「根戸」、古文書に記録がある「増尾」などがあったのではないかとされています。

源義経の活躍を描いた「義経記」には、その家来に増尾十郎という者がいて活躍したと記されています。この増尾十郎こそ増尾出身の武士で、相馬氏に深い関係のある者ではないかともいわれています。

③ 阿弥陀如来坐像をめぐる謎

柏市増尾の万福寺は、江戸時代初期に建てられた寺ですが、ここには平安時代の終わり頃の作という阿弥陀如来坐像がまつられています。

万福寺には境内に阿弥陀堂という小さなお堂があります。これは、当時から

この地域に極楽浄土への往生を願う浄土信仰が広まっていたことにつながるといわれています。さらに、同じ境内に妙見様がまつられている祠が残っています。妙見様は、相馬氏が代々信仰している守り神でした。阿弥陀如来坐像は、妙見様とともに手厚く保存されていたことがわかります。

このほか、柏に伝わる鎌倉時代の寺社として知られているのは、藤心の八幡神社、その南にある宗寿寺、布施にある善照寺などです。これらの周辺には人々が村を作り住んでいたと思われます。この頃の文書を見ると次のような村が名を連ねていることがわかっています。「わしのやむら」「みのわむら」「いつみのむら」「おほ井のむら」「ますおのむら」「たかやなきのむら」「ふちかやのむら」、これらはいずれも相馬氏が支配する村でした。

(2) 境根原の決戦（室町時代）

① 南北朝の争いの時、千葉氏はどのように行動したか

柏周辺を領有していた千葉氏の一族である相馬氏は、そのまま相馬御厨に残った一族と、源頼朝による奥州合戦の軍功で得た奥州の所領（現在、南相馬市あたり）へ本拠を移していた一族に分かれていきました（当時はまだ相馬御厨の一部の所領を持っていた）。

鎌倉幕府が滅亡する時、千葉氏・相馬氏は南朝（後醍醐天皇ら）に味方する一族と北朝（足利尊氏ら）に味方する一族に分かれました。相馬氏の多くは、南朝の新田義貞に従い、やがてライバルであった足利尊氏に滅ぼされてしまいました。北朝に味方した千葉氏は、守護となり下総国をそのまま領有することになりました。

② 相馬御厨をめぐる争い

相馬御厨は、伊勢神宮（三重県）の荘園でした。しかし室町時代になると、実際に土地を管理する相馬氏の力が強くなり、伊勢神宮への年貢も滞りがちとなったといわれています。そこで、伊勢神宮から何度も年貢を送るよう催促や訴えがあり、争いになりました。この頃から、荘園領主の力が次第に弱くなり、土地を治める武士が力をつけていったことがわかります。

この頃、税など大量の荷物を運ぶための交通路は、水上交通が中心でした。

当時は、太平洋までつながる現在のような利根川はできていなかったので、手賀沼やそこにつながる小河川の水路を関宿（野田市関宿町）近くまでさか上り、そこから陸路を経て再び大田川（江戸川）を下り、さらに江戸湾に出て海路を使うという方法が取られたようです。

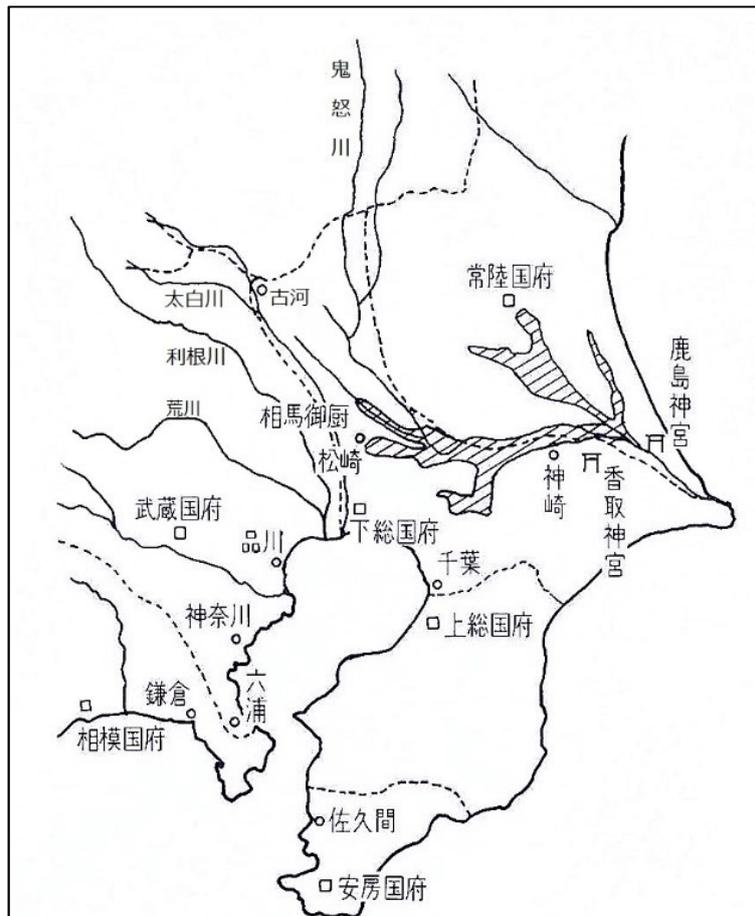


図4 南関東要図（「柏市史 原始・古代・中世編」から引用して一部加筆）

③ 境根原の合戦とは

応仁の乱が終わる頃、東葛飾地方一帯も土地の主導権をめぐる激しい戦が繰り広げられました。文明10（1478）年かねてから対立関係にあった武蔵国の太田道灌と下総国の千葉孝胤が激しい合戦を繰り広げた場所が境根原（柏市光ヶ丘周辺）です。

この時、小金原（松戸市）に陣取った千葉孝胤に対し、太田道灌は国府台（市川市）に軍を進めました。両軍が衝突した境根原では、戦いは一日中続い

たと記録に残っています。

野戦を得意とした道灌の軍は、千葉孝胤の重臣である原氏や木内氏を討ち、高田（柏市高田）に居を構える匝瑳氏をも討ち死にさせ、孝胤を佐倉に退かせてしまいました。

戦いの後、太田道灌は敵味方の区別なく戦死者を埋葬したといわれ、光ヶ丘周辺には、団地ができる前までたくさんの塚が残っていたそうです。

市内には道灌堀（豊四季）や道灌橋（根戸）などの地名が残っています。

④ 合戦・武士にまつわる地名

藤ヶ谷には「念仏塚」という地名があります。これは戦いで逃げてきた落ち武者が寺で念仏を唱えた場所だといわれています。その近くには、激しい戦いで矢が何本も飛来して橋のようだったということから「矢の橋」という地名も残っています。また境根、根戸のように、地名に「根」のつく場所は境界線、つまり領地の境だったようです。

(3) 上杉氏と北条氏の戦い（戦国時代）

① 戦乱に巻き込まれる東葛地方

応仁の乱の頃になると室町幕府の力は弱くなり、地方の守護や大名（領主）が武力によって力をつけてくるようになります。

そのころ、千葉氏よりも勢力を増してきたのが安房国の里見氏です。天文 7（1538）年、里見氏は北関東の足利氏と同盟（小弓公方軍）を結び、相模国から攻めてきた北条氏（古河公方軍）と戦いました。これが、第1次国府台合戦です^{注3}。激しい戦いの末に北条氏が勝利すると、敗れた里見氏はいったん安房に退きました。

里見氏は、永禄 7（1564）年、今度は越後の上杉謙信と同盟を結び、北条氏と戦いました。これが第2次国府台合戦です^{注4}。この戦いで重要な役割を果たしたのが小金城主の高城氏^{たかぎ}です。高城氏は南下してくる上杉氏を食い止め北条氏の勝利に貢献しました。そして、東葛飾地方一帯は、高城氏が小金城を本拠にして治めるようになりました。

注 3,4：室町幕府は関東 10 か国統治のため鎌倉公方を設置したが、後年、勢力争いの結果、鎌倉公方が本拠を古河に移し、その後古河公方が分裂して小弓公方が起こり、古河公方、小弓公方が勢力下の武将を巻き込んで戦いを繰り返しました。

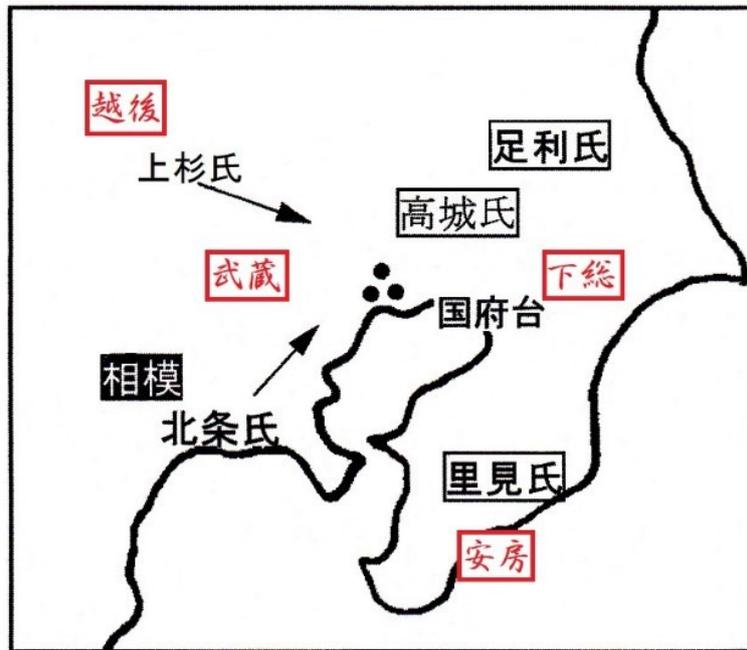


図5 国府台合戦の模式図（「郷土かしわ」から引用して一部加筆）

② 天下の統一と柏周辺

織田信長の時代になると、東葛飾地方は引き続き北条氏とその配下の高城氏が支配しました。

天正 17（1589）年、信長の後に天下を取った豊臣秀吉は、徳川家康らとともに関東で最大の勢力を持っていた北条氏を小田原城に包囲しました。この時、下総地方の領主である千葉氏や高城氏は小田原城内に立てこもっていました。そこで、豊臣秀吉は、小田原城に集まっていて領主が留守になっている東葛飾地方を攻め、支配下においてしまいました。やがて小田原城も落城、豊臣秀吉は天下統一を成し遂げました。

その後、徳川家康が江戸を本拠にすえ、江戸幕府が開かれます。それとともに、小金城をはじめとして東葛飾地方にあった多くの城が取り壊され、領地は江戸幕府に没収されてしまいました。千葉氏や高城氏の家臣の多くは、下総地方や東葛飾地方に農民として土着していきました。

③ いろいろな職業

室町時代の頃になると産業が発達し世の中にはいろいろな職業が生まれました。この頃の資料である「本土寺過去帳」（松戸市殿平賀の本土寺に残る古文書）によると、武士や僧侶、農民だけでなく現在にも残る仕事がいくつも記されています。

柏市の酒井根、戸張、高田に番匠（大工）をして生計を立てていた人のことが記録に残っています。この頃の大工は、武士の屋敷やお寺を作る宮大工がほとんどで、戸張の大工は本土寺の造営に参加したとも記録されています。

当時として貴重な塩を売る塩売りの彦四郎という人物が酒井根に住んでいたことも記録に残っています。このことから、塩が商品として流通していたことがわかります。さらに音楽に合わせて滑稽に踊る猿楽という演芸を営む人（曲舞々）が現在の豊四季周辺にいたことも記録されています。そして時には、有名な寺で猿楽を演じたこともあったようです。これらの地域には人々が住み、やがて村がつくられていきました。



図6 上記職人図版3枚は柏書房「資料日本歴史図録」から転載

④ 地域に残る城跡

柏市域には、公園となっている増尾城跡や市の指定文化財の松ヶ崎城跡をはじめとして、戸張城跡や箕輪城跡など、戦国時代のものと考えられる城跡が多く確認されています。近年、考古学の分野で研究が進んでいますが、沼沢地や河川に沿って城が築かれていたり、狭い地域に複数の城跡が見られたりするなど、多くの疑問が残されており、当時の様子は十分に解明できていません。



図7 戦国時代の城跡（「郷土かしわ」から引用）

II 柏市の製鉄遺跡

1. 概要

鉄の歴史は、世界的には、紀元前 20 世紀から始まり、日本では、諸説ありますが、早くは弥生時代、遅くとも奈良時代には製鉄が始まったと考えられており、柏でもその遺跡が発掘されています。ただ、この製鉄がその後どのような経緯をたどったかは、定かではありません。しかし、この柏でその昔、製鉄の高度技術集団が大いに活躍した事実があったのです。

2. 世界の鉄の歴史

世界の製鉄の歴史で現在最古の製鉄技術とされているのは、トルコ中部のカマン・カレホユック遺跡で BC 20 世紀ごろにはすでに鉄を生産する技術が存在していたとされています。北方からここに侵入したヒッタイト人が、この製鉄技術をさらに発達させ、その技術を秘密として、鉄を独占し、軍事的に利用することで帝国を築きました。BC 1,200 年ごろヒッタイトが滅亡すると、中近東一円に鉄が出回りましたが、技術の普及にはいたりませんでした。

中央アジアに伝わったのは BC 10 世紀ごろで、中国にはヒッタイトの滅亡から 8 世紀後の BC 4~3 世紀ごろに伝わっています。BC 3 世紀、秦の始皇帝は全国に鉄を司る鉄官を配置、さらに前漢武帝の時代、鉄は塩と同様に国家の専売制となり、鉄官は 49 カ所に及び漢の重要な基幹収益となりました。さらに、時代は下って、朝鮮半島では AC 1 世紀に製鉄が本格化しました。

3. 日本の製鉄史

日本で製鉄（鉄の精錬）が始まったのは、いつころからでしょうか。確実といわれる製鉄遺跡は 6 世紀前半まで遡れますが、5 世紀には大規模な鍛冶集団が成立して、6 世紀には多数の製鉄・鍛冶炉からなる製鉄コンビナートが形成されていたことから、5 世紀には既に製鉄は始まっていたと考えるのが妥当であるという意見があります。

更に、製鉄炉の発見はないものの、弥生時代に製鉄炉があったとする意見もあります。その論拠は 1) 弥生中期以降、石器から鉄器への転換が急速に全国的

に進んだ。2) 外国では鉄器の使用と製鉄は同時期に始まった。3) ガラス製作技術があり、1,400~1,500°Cの高温が得られていた。4) 大型銅鐸の鑄造など優れた冶金技術があった。という考古学的背景です。

当時のすべての鉄原料は朝鮮半島に依存していたという説がこれまで主流でしたが、最近発掘された広島県の小丸遺跡（三原市）、京野遺跡（千代田町）、西本6号遺跡（東広島市）は弥生時代後期から古墳時代にかけての製鉄址ではないかといわれています。鉄鉱石を使用する古代の製鉄址は山陽地方と琵琶湖周辺に限られています。山陰側その他は砂鉄を原料に用いており、製鉄技術の伝来ルートに違いがあることを暗示しているのかもしれませんが。滋賀県には60か所以上の製鉄遺跡があり、近江は古代における近畿地方最大の鉄生産地でした。大和にとって近江は地政学上の要地でしたが、それだけではなく資源的にも重要な場所でした。

古墳時代から奈良時代にかけて、鉄鉱石を用いた製鉄遺跡が中国山地の山陽側、近畿地方の近江で発見されていますが、平安時代以降は全国的に砂鉄原料に変わりました。古書によれば、出雲・伯耆・備後・備中・美作・播磨などの中国地方を中心に、筑前・筑後・肥前・能登・常陸・上野・越後・武蔵・相模・陸奥など全国にわたって砂鉄の産出が知られていました。

弥生時代末期に伝えられた製鉄技術は「野たたら」といい、山の中程の風通しの良い斜面に炉を作って、砂鉄と薪を積み上げて、自然の風力によって幾日も火を燃やし、わずかな鉄を得ていました。やがて技術の進歩に加えて、風雨の憂いなく操業できる屋内工場となるのが13世紀の半ばです。

たたら吹き精錬法の屋内工場は、「高殿」と呼ばれる特殊な建物で、この移行によって、鉄は産業として量的生産が可能になったといえるでしょう。たたら精錬に用いられるのは砂鉄です。砂鉄は採取される場所により、山砂鉄・川砂鉄・浜砂鉄に分けられます。上質なのは風化した母岩から直接採取する山砂鉄で、たたら精錬では山砂鉄を使うのが普通でした。たたら吹きによる製鉄業は、慶長年間時代を境に勃興し、その後経営の無秩序から、一時衰えましたが、江戸中期になるとふたたび興隆して、野たたらから屋内のたたらへと進化し、その後明治10年代に到るまではたたら吹きの全盛時代でした。しかし、明治政府による近代製鉄の導入や、原材料である木炭生産の制約（「鉄は大量の

木材（森林）を食い尽くす」といわれる）によって徐々に衰退に向かいました。たたらの炎を見つめてきた職人・古老達も、生き残っているのは極めて少なくなってきました。

そうした状況でも、江戸中期の製鉄業再興に際して著わされた貴重な製鉄技術書が記録として残されていることが、今日のたたら製鉄法の復元へと通じました。今日でも、ただ1か所島根県鳥上で年に1回、昔ながらの「鉄穴流し」が行われ、この方法で山砂鉄から木炭銑に精錬され、安来の日立金属に送られ、高級特殊鋼の原料となっています。

4. 柏市の製鉄遺跡

柏市内の製鉄遺跡は、千葉県製鉄遺跡分布地図によると63か所ありますが、利根川流域と手賀沼南岸地域に分布します。なかでも、旧沼南地域は53か所と県内トップの千葉市の59か所に次ぐ密集地帯となっています。このように市内には、製鉄遺跡が多く分布していますが、調査歴もあり年代や構造が明確なもの、花前Ⅱ遺跡（船戸）、宮後原製鉄遺跡（大島田）、若林Ⅰ遺跡（藤ヶ谷）、松原製鉄遺跡（若白毛）、天神向原遺跡（大井）、宿ノ後遺跡（布施）、榎方遺跡（岩井）の僅か7か所を数えるだけです。時期は、花前Ⅱ遺跡が平安時代、他は奈良時代と考えられています。花前Ⅱ遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居跡が22軒調査されていますが、最も注目されるのは、斜面部で見つかった9基の製鉄関連遺構です。その内訳は、製錬炉6基、精錬炉3基となっています。多くの鋳型も出土しており、鉄素材から鉄器製品まで一貫した生産を行った最先端のハイテク工場だったと考えられます。

古代の製鉄は、まずは製錬炉で不純物を取り除き粗製の鉄材を取出し、次に精錬炉で精錬して初めて加工可能な鉄材が得られました。そしてこれを鍛冶炉で熱して鉄製品を作りました。

製錬炉はその形態から、ユニットバスのような長方形箱型炉と円筒状の半地下式の竪型炉に分けられ、どちらも、台地斜面に構築されているのが特徴です。若林Ⅰ遺跡、松原製鉄遺跡は、箱型タイプで、宮後原遺跡、花前Ⅱ遺跡は竪型タイプです。従来の研究により、箱型は、西日本を中心に分布しており、竪型より早い時期登場するとされていますが、千葉県においては、両者が混在

して発展していったものと考えられます。

製錬炉は木炭と砂鉄を交互に投入し、溶解させ、不純物を排除するために、炉内温度は 1,300°C 以上を常時保たねばなりません。それには、燃料となる木炭の燃焼温度を高温に保つために^{ふいご} 鞴と呼ばれる送風装置が必要となります。製鉄の原料については、一部には鉄鉱石を使用している地域もありますが、東日本では、砂鉄が主流となっています。製鉄には多量の木炭を必要としますので、炉の周辺には炭焼窯が必ず数基存在します。また、古代製鉄における送風装置となる鞴は「踏み鞴」で、長方形の穴を掘って、中心に軸となる丸太を置き、そこに踏み板を被せて、シーソーのように人が交互に踏むことによって起こした風を、送風管を通じ羽口から炉内に送り込みます。作業中は昼夜を問わず踏み続けなければならない、大変な労力を必要とします。大島田の宮後原製鉄遺跡では、この踏み鞴が比較的良好に保存されていました。

精錬炉も製錬炉と工程は似ています。それほど大掛かりな構造ではなかったようですが、製錬炉と同一の斜面や台地上の集落内で操業されています。

鉄器の普及により、耕地面積は飛躍的に拡大し、武器の殺傷能力が高まりました。製鉄遺跡は、古代の柏に当時のハイテク技術を持った製鉄技術者集団が多数いたことを物語っています。

平将門の本拠地下総国北西部には、古くから良馬を生産する大結馬牧や長洲馬牧などの官営の牧が存在しました。また、武具や馬具の素材である鉄の生産も平安時代になると活発になりました。将門は、こうした下総の馬と鉄に支えられた武装私営田領主の一人でした。将門の軍団の中核は騎馬集団でした。将門が寡兵をもって大軍を撃ち破ることができたのは、騎馬軍団の機動力を巧な用兵によって最大限に発揮し得たからに他なりません。



写真3 花前Ⅱ遺跡の竪型炉（製鉄炉）

「常磐道の遺跡をさぐる」から引用

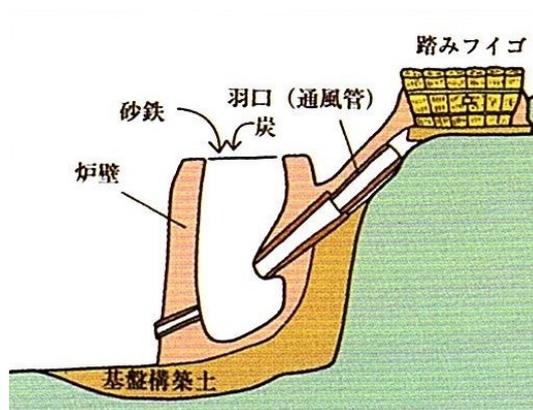


図8 竪型炉構造模式図

「悠久の歴史を旅して」から引用

5. たたら製鉄の概要

たたら製鉄の工程は概ね次の通りです。

- | | |
|--------------|---------|
| ①砂鉄の採鉱 | ④製鉄炉の製造 |
| ②製鉄木炭用広葉樹の伐採 | ⑤製鉄 |
| ③木炭の製造 | ⑥鍛冶 |

「日刀保たたら」の事例に基づくと、たたら製鉄において、1回の操業で使用される資材は、砂鉄約8t、木炭約13t=原木材90tを要し、これより、約2.5tのケラが生産され、うち玉鋼は0.8~1tです。また、採鉱の際には、多量の水を必要とします。90tの原木材を生産するには凡そ約1haの収量に相当し、輪伐期30年として、継続生産するには30haの森林を伐採する必要があります。年間60回の操業として、1800haの森林を要します。従って、たたら製鉄は大量の水と木材の供給を必要とし、その立地は、河川の沿岸の広大な森林地帯が適しています。

但し、この数値は、日刀保^注の実績で、柏市の遺跡において生産されていた製鉄規模は、上記より小規模で玉鋼の生産効率もより低いと思われます。

注；日刀保・・・公益財団法人日本美術刀剣保存協会

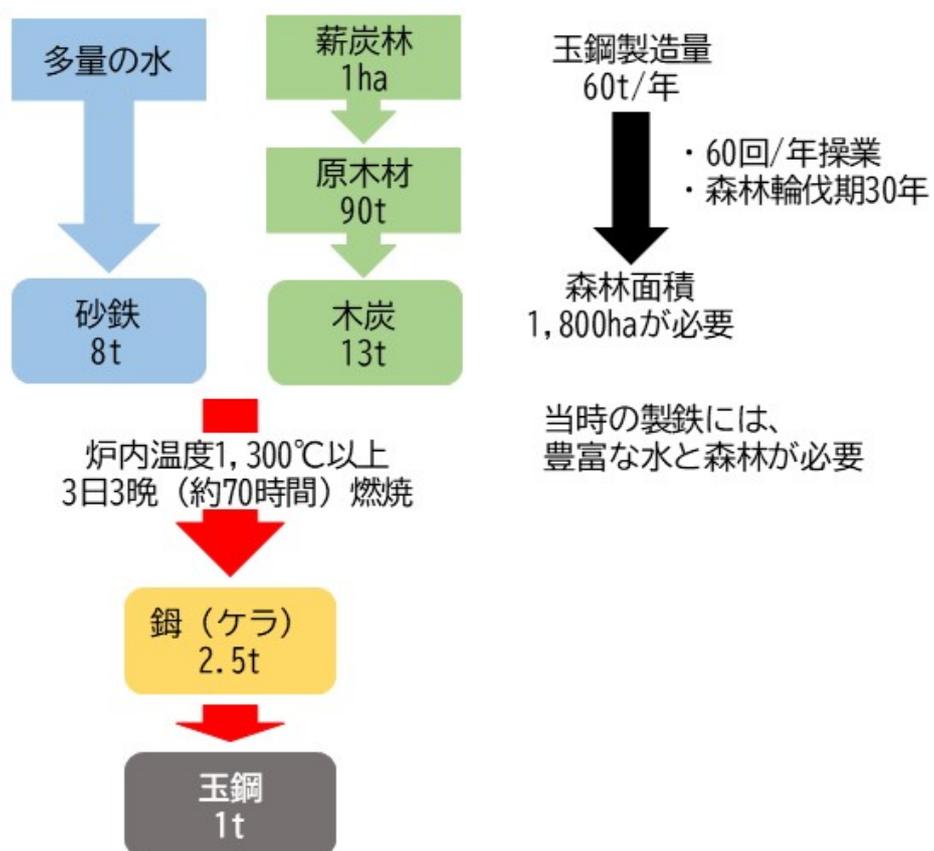


図9 たたら製鉄の工程・材料（数値は日刀保実績から）

参考文献

- 「郷土かしわ」 柏市教育委員会 平成30年度版
- 「柏市史 原始・古代・中世編」 柏市教育委員会
- 柏市HP「将門伝説と相馬氏」最終更新日 2017.3.26、 2019.02.08 参照
<http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/280400/p007290.html>
- 「人物でたどる日本荘園史」 阿部猛・佐藤和彦編集 東京堂出版 1990年
- 「資料日本歴史図録」 笹間良彦編著 柏書房 1992年
- 「柏の歴史よもやま話」 浦久淳子 崙書房 1998年
- 「柏市史(原始古代中世 考古資料)」 柏市教育委員会 平成31年2月22日発行
- 「常磐道の古代製鉄遺跡」 吉田秀享 公益社団法人福島県文化振興財団
2018年(平成30年)
- 「常磐道の遺跡をさぐる」 千葉県教育振興財団 平成30年2月講演会資料
- 「悠久の歴史を旅して」 千葉県教育振興財団 平成29年7月14日発行
- 「千葉県の歴史」 石井進・宇野俊一 2012年9月25日版 山川出版社
- 「鉄 一塊の鉄が語る歴史の謎」 立川昭二 1966年7月25日初刷発行 学生社
- 「シンポジウム 鉄と帝国の歴史」 愛媛大東アジア古代鉄研究センター
(2008)
- 埋もれた文化財の話「近江の古代製鉄について」 滋賀県埋蔵文化財センター
- 「古代の製鉄工場」(柏市教育委員会「歴史ガイドかしわ」2007年)
- 「常磐道の遺跡をさぐる」－悠久の歴史を旅して－(講演要旨) 千葉県教育振興財団 平成30年2月10日講演
- 千葉県森林インストラクター会 会報2007.1(No.19)
- 「日本全史」 ジャパン・クロニック 講談社

第3章 近世

目次

I 江戸時代の柏と小金牧	
1. 概要	p. 59
2. 江戸幕府と柏	p. 59
(1) 江戸時代の柏	p. 59
① 大名本多氏	
② 大名の配置	
③ 江戸時代の村と飛地領の陣屋	
(2) 幕府の牧場小金牧	p. 60
3. 中世以前の下総の牧	p. 63
4. 江戸時代の小金牧	p. 64
(1) 江戸時代の小金牧	p. 64
① 小金牧	
② 野馬捕り	
(2) 牧の管理体制	p. 65
① 牧の管理	
② 享保・寛政の改革	
(3) 小金牧士と花野井 吉田家	p. 66
① 牧士	
② 吉田家	
(4) 野馬除土手と野付村	p. 67
① 野馬除土手	
② 野付村の負担	
(5) 享保期の新田開墾	p. 69
(6) 小金牧御鹿狩	p. 70
① 御鹿狩	
② 享保期の御鹿狩	

③ 百姓勢子	
(7) 相馬野馬追と小金牧	p. 72
① 牧と野馬追い	
② 相馬氏と相馬野馬追	
トピックス① 「野馬追之記」	
トピックス② 将門ゆかりの故郷を偲ぶ民謡	
II 柏の水運—手賀沼と利根川の開拓と物流—	
1. 概要	p. 74
2. 手賀沼	p. 76
(1) 手賀沼の歴史	p. 76
(2) 手賀沼の開発の歴史（近世）	p. 76
(3) 手賀沼～江戸湾（東京湾）運河構想	p. 77
3. 利根川	p. 78
(1) 利根川の水運	p. 78
(2) 利根運河の水運	p. 79
(3) 利根運河の建設	p. 80
4. “布施河岸・七里ヶ渡し”と“（通称）うなぎ道”	p. 81
(1) 布施河岸の七里ヶ渡し（渡船場）	p. 81
(2) （通称）うなぎ道～利根運河完成までの陸送路	p. 82

I 江戸時代の柏と小金牧

1. 概要

江戸時代になると幕府は江戸に近い地域に譜代や旗本を配したり、直轄領としたりして守りを固めました。柏の多くの村々を領地として与えられたのは本多正重でした。本多氏は江戸中期になると駿河国田中藩へ移り、下総国相馬・葛飾両郡内の1万石はその飛地領となりました。

この頃、柏には50ぐらいの村がありました。村では検地が行われ、大勢の名請人と呼ばれる所有者名が記録に残されています。農民が連帯して年貢の責任を負う五人組が作られ、村をまとめるために、名主、組頭、百姓代の村方三役が責任者となりました。

柏周辺は、平将門の頃から馬の放牧地として知られていましたが、江戸時代になると幕府が直接管理する「小金牧」が設置されました。小金牧には「高田台牧」^{たかただいまき}「上野牧」^{かみのまき}「中野牧」^{なかのまき}「下野牧」^{しものまき}「印西牧」^{いんざいまき}の5つの牧がありました。小金牧では年1回幕府に馬を差し出すために「野馬捕り」^{のまど}が行われ、付近の農民が人足として駆り出されました。日頃から、馬が田畑に入って来ないように野馬土手^{のまどて}を作ったり、牧場の手入れをしたりと、大きな負担がありました。

幕府は牧の管理運営のため、周辺の有力農民の中から牧士^{もくし}を任命しました。また、牧の維持のため、野付村という牧近隣の村から労働力を提供させました。花野井村の吉田家はこの牧士を文政9（1826）年から代々勤めました。

福島県相馬地方の相馬野馬追は、相馬一族がその信仰する妙見神に駿馬を捕えて奉納する妙見信仰と深く結びつき、相馬氏の遠祖平将門が下総国葛飾郡小金原に野馬を放牧し武術調練したという故事に始まります。

2. 江戸幕府と柏

(1) 江戸時代の柏

① 大名本多氏

江戸時代になると親藩、譜代、外様の大名が各地に配置されましたが、元和2（1616）年柏周辺に領地を得たのが本多正重でした。徳川家康の参謀として重要な働きをした本多正信という重臣がいましたが、正重はその弟です。江戸時代中

期になると本多氏は駿河国田中藩に移りますが、正重以来の下総国相馬・葛飾両郡内の1万石はその飛地として残りました。下総の飛地領には、葛飾郡船戸村と同郡藤心村にそれぞれ船戸陣屋（中相馬御役屋敷）と藤心陣屋（南相馬御役屋敷）が置かれ、代官が常駐しました。船戸陣屋が統括した地域を中相馬領、藤心陣屋が統括した地域を南相馬領と呼んで区分していました。

今でも藤心には、本多氏が配置した代官所の跡が残っています。また、かつて柏市北部にあった田中村の村名は、本多氏が治めていた田中藩（駿河国）からとったものだといわれています。

② 大名の配置

このほか柏の近くには、小金城（松戸市）に徳川信吉（家康の五男）が、山崎城（野田市）に古くからの徳川氏重臣の岡部長盛が、関宿城（野田市）に家康の弟松平康元がそれぞれ領主として入城しました。しかし、小金城と山崎城は、その後幕府直轄地（天領）となり取り壊されました。このほか、東葛地方は旗本や御家人の領地となっており、さまざまな領主がいたことから「碁石混じり」と呼ばれました。

③ 江戸時代の村と飛地領の陣屋

領主は、村役人に明細書等を書かせ、収穫高や人口、馬の数、作物の種類等村の様子を細かく報告させたので、今でもその様子を知ることができます。

陣屋の代官は、春から田植え時分にかけて村周りをし、秋彼岸頃には作柄を調べる検見を行い、領民の人数は2年に1度、その宗旨は毎年9月に調べました。また、馬の調査は年3回実施しました。このように代官の仕事は多岐にわたるため、領内の有力農民のなかから手代を選び、補佐にあたらせました。

(2) 幕府の牧場小金牧

柏周辺は、平将門の頃から馬の放牧地となっており、優れた馬を育てる地域でもありました。江戸時代になると幕府が小金牧を設置し、野馬奉行を置いて直接管理するようになりました。

小金牧には「高田台牧」「上野牧」「中野牧」「下野牧」「印西牧」の5つの牧があり、鎌ヶ谷や白井、船橋まで広がる大きな牧でした。このうち「高田台牧」「上野牧」（一部流山市）「中野牧」（松戸市、鎌ヶ谷市も含む）が現在の柏市に当たります。

小金五牧は葛飾郡、印旛郡、千葉郡の3郡にまたがり、野付村々（牧に隣接している村）も222か村、総村高5万2,643石という広大な地域にわたっていました。

小金五牧のそれぞれの位置を、現在の主な地名に当てはめてみると以下のようになります。

- ・高田台牧 柏市十余二、中十余二、新十余二、柏の葉、他
- ・上野牧 柏市豊四季、柏1～3丁目、明原、泉町、中央1～2丁目、千代田2丁目、富里1～2丁目、他
- ・中野牧 鎌ヶ谷市初富、松戸市五香、六実、柏市高柳新田、他
- ・下野牧 船橋市二和、三咲、高根台、習志野台、他
- ・印西牧 白井市十余一、他

柏市には所々に起伏に富んだ地形があります。江戸時代、手賀沼周辺や大津川、大堀川沿いの低地では、水田耕作が行われましたが、台地やその周辺の林には、野生の馬が千頭以上はいたといわれています。

幕府は、馬があまり来ない平地を耕し、新田になるように進めました。これらが塚崎新田や今谷新田（中新宿村）といわれるところです。

小金牧では、年1回幕府に馬を差し出すために「野馬捕り」が行われました。牧に放されている馬を「捕込^{とっこめ}」という土手で作った囲い（柏市では今の柏第2小学校付近にもあったといわれる）に追い込んで捕えたそうです。

このような時には、付近の農民が^{にんそく}人足としてかり出されました。その他、農民は野馬が田畑に入って来ないように野馬土手を作ったり、手入れをしたり、牧（野馬）の見回りと、当時の農民には大きな負担になりました。

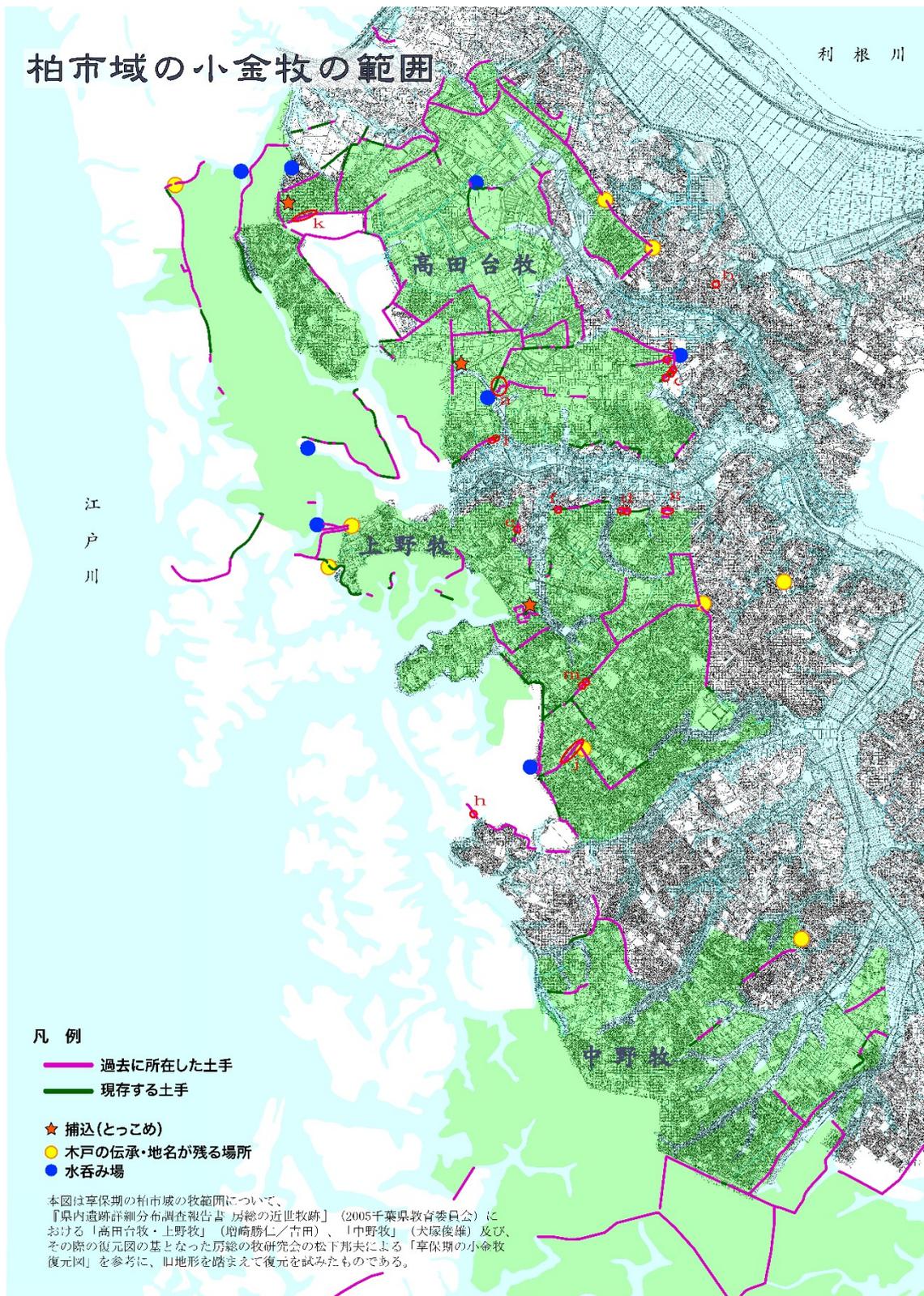


図1 柏市域の小金牧の範囲（「柏市史（原始古代中世 考古資料）」から引用）

3. 中世以前の下総の牧

日本人にとって馬が密接な関係になるのは、5世紀末以降です。先史時代にも、日本列島に馬は存在しました。ところが、縄文時代に絶滅してしまいました。その後、古墳時代に至って、朝鮮半島からもたらされた馬が、全国へと広まってきました。その馬は、家畜化されたもので、飼養技術を持つ人々とともにもたらされたことによって、日本における馬利用の文化が発生しました。

馬は、とくに軍事的なツールとして普及していきました。そのため、ヤマト朝廷は、馬匹生産の制度を整備していきます。天智7(668)年7月、近江国(滋賀県)に多くの牧を設置して馬を放牧したとされます(「日本書紀」)。文武4(700)年3月諸国に牧を設置して牛馬を放牧させました(「続日本記」)。これが全国的な官制の牧の設置です。そして、養老令[養老2(718)年改修、天平宝字元(757)年施行]に、^{きゅうもくりょう}厩牧令が設けられ、官制の牧の経営・管理に関する規定が定められ、牧の経営制度が確立しました。なお、厩牧令は、大宝令[大宝元(701)年]以前の令には確認されていません。

官制の牧は、兵部省配下の兵馬司によって管轄されました。そして、牧ごとに、牧の責任者の^{ほくちょう}牧長1人、文書事務に当たる^{まきちょう}牧帳1人、馬牛一群(100頭)ごとに^{もくし}牧士2人を置くこととされました。官制の牧の管理・運営は彼らが担いました。放牧中に馬を痩せさせたり、失ったり、あるいは母馬100頭に対して^{こまとく}駒犢(子馬・子牛)60頭という規定の繁殖数に達しない場合には罰せられ、弁償責任を課せられました。その一方で、規定以上に駒犢を増やした場合には報奨として種を受け取ることができました。このことは、彼らが私的にも馬牛を飼育していたことを示しています。彼らは^{よう ぞうよう}庸や雑徭などの税負担を免除されており、馬牛の飼育に専念できるように配慮されていました。

この頃の牧の馬の生産方法は、一年中放牧して自然に増殖させるというものでした。自然に増殖するとオス馬が増加しすぎ、発情期のオス同士の闘争が激化します。そのため群が不安定になります。こうした状況を回避するために、若いオス馬を捕獲して、軍馬に充てるというシステムが採用されました。この若いオス馬捕獲が野馬追いです。福島県相馬市で行われる野馬追い行事の起源は、増殖するオス馬を捕獲するという馬生産のための作業でした。

4. 江戸時代の小金牧

(1) 江戸時代の小金牧

① 小金牧

下総国は古くから軍馬供給の地とされ、10世紀前半の「延喜式」では官牧が置かれていたことが知られます。そして江戸時代にも、軍馬の外に輸送用・農耕用の駄馬を民間へ供給することを目的に、下総国に小金・佐倉牧の2牧、安房国に嶺岡牧という幕府直轄牧が置かれていました。このうちの小金牧は、下総台地上の葛飾・印旛・千葉の三郡にまたがり、高田台・上野・中野・下野・印西の5牧からなっていました（もとは、新田開発により廃止された庄内牧、中野牧に統合された壱本(いっぽん) 櫛(くぬぎ) 牧を加えた7牧)。このうち柏市域に係わる牧は高田台・上野・中野3牧です。

江戸時代の小金牧は、野馬の逃亡を防ぐために谷津地形を利用し、野馬除土手や野馬堀を設け、馬は広い丘陵上の野原や灌木のなかに放し飼いでした。そんな下総の野馬は、諸国の馬と違って粗食で寒暑に耐え、「20年以上荷物輸送にも耐えられる」頑強な馬でした。その上、廉価で飼育費も余りかからなかったということです。

② 野馬捕り

野馬は牧に散在していたので、これを捕らえるためには1か所に集める必要がありました。それが野馬捕りで、年に1度（享保期以前は3年に1度）、捕込^{とっこめ}（野馬を捕獲するための土塁で囲まれた施設）に野馬を追い込みました。野生馬を追い集める野馬捕りは、本や絵馬にも描かれるほどの年中行事となり、江戸からの見物客も集めるほどでした。

そこでは、調教のしやすい3歳馬を選別し、良馬は江戸城の厩へ送り、それ以外の子馬や母馬、種馬を除く野馬を民間に払い下げました。野馬捕りの古い例としては、慶長19（1614）年や元和6（1620）年が知られます。前者では馬96疋のうち8疋を「御馬」（上げ馬）として江戸城に送り、88疋を「売馬」とし、後者では145疋のうち5疋が「御馬」、牧士^{もくし}や伯楽^{はくらく}（後の牧士の長）の取り分を除く134疋が「売馬」で、江戸や小金町などの者たちに払い下げられました。

(2) 牧の管理体制

① 牧の管理

野馬の飼育は半ば自然任せであったとはいえ、牧を管理・運営していくためには多くの人手がかかりました。享保期までの牧場支配は、老中配下の厩預^{うまやあずかり}諏訪部氏が担当しましたが、野馬盗の露見を契機に明暦3（1657）年、小金御厩^{すわべ}（松戸小金町）を設け、諏訪部氏の下役が詰めることになりました。そこでの実務を取り仕切ったのが千葉氏浪人の由緒を持つ綿貫氏で、先の慶長19（1614）年「小金之領野馬売付之帳」には「綿貫十右衛門」とみえます。ここからみても、小金牧の組織は慶長末年には成立していたようです。また、牧の直接管理担当者は周辺の有効農民が就任する世襲の牧士で、業務中は苗字帯刀、乗馬、鉄砲所持が許されました。小金牧では、牧士は目付牧士・牧士・牧士見習・野先見習の別があり、その給与は牧士金5両（享保期以前は馬2頭）、牧士見習金1両2分（同1頭）でした。その他、牧を維持するために野付村という牧近隣の村があって、労働力を提供させました。

② 享保・寛政の改革

牧の管理体制は時期や牧により相違しましたが、享保・寛政年間の2度、大きな変化がもたらされました。下総の牧も幕府の改革と無縁ではられません。享保7（1722）年、小金牧と佐倉牧が老中支配から若年寄支配に移り、また勘定奉行配下の野方代官として小宮山壱之進昌世^{こみやまもくのしん}が日暮村金ヶ作（松戸市）に陣屋（役所）を設け、小金厩預り（後の小金野馬奉行）綿貫氏とともに支配にあたるようになりました。代官である小宮山壱之進の狙いは、牧周辺の土地を野付村に新田開発させることにあり、それにともない牧の組織改革を実施しました。そこで、小金5牧の管理は、綿貫氏支配の小金御厩付きの高田台・上野・印西の3牧、代官支配の金ヶ作陣屋付きの中野・下野の2牧に分け、牧士も同様に2分しました（佐倉7牧は小金御厩付きの4牧と佐倉藩付きの3牧に分割）。続く2度目の改編は寛政5（1793）年のことで、小納戸頭取岩本石見守正倫が野馬掛として佐倉藩預かりの牧を除く野馬や牧地、牧士全てを一括管理することになり、牧運営の強化・合理化を図りました。岩本正倫は、嶺岡牧（鴨川市・南房総市の一部）の改革を行なった上で、小金・佐倉牧の下総2牧の改革に着手し、牧ごと

の焼印を作ることによって野馬の所属を明確にし、野馬増産のために寛政5年から向こう5年間の駄馬売り払いを中止させました。その他、小金・佐倉牧では、牧収入の増加を目的に、自生や植林した櫛(くぬぎ)を薪炭として出荷させてもいます。岩本は従来の習慣を改め、牧の管理を一元的に行い、野馬増産・経費節減を図りました。

(3) 小金牧士と花野井 吉田家

① 牧士^{もくし}

牧の維持・管理を担ったのは野付村の農民でしたが、日常的に彼らを指揮し業務の中心にあったのが牧士です。元和5(1619)年「下総小金領野馬売付帳」に伯楽とともに「もくし」とあるのが初見で、野馬のために食料や飲料水の面倒をみたり、寒暑時の避難場所や野犬にも注意を払いました。また、傷ついた野馬や母馬からはぐれた子馬を世話し、馬数や年齢をチェックし、牧の周りにある野馬除土手^{のまよけ}の整備監督も担当しました。

② 吉田家

柏市内には小金牧創設以来の由緒を持つ牧士はおらず、江戸時代後期に牧士となった家として花野井村吉田家、松ヶ崎村吉野家、名戸ヶ谷村木村家の3家がありました。このなかの吉田家は、家伝によるとこの地に土着した相馬家の一族で、名主を務めるかたわら質屋や穀物商を営み、文化2(1805)年には醤油醸造を開始するなどの有力者であったとのこと。牧士としての由緒書によれば、文政9(1826)年吉田官蔵のときに松ヶ崎牧士吉野五右衛門の病気を理由にしてその跡役を継いだことに始まります。天保10(1839)年には「牧士役出精相勤候」とのこと目付牧士に昇進し、その後は2代目鷹助、3代目信次郎、4代目金五郎と続きました。この吉田家は江戸時代から明治～昭和期の多量の文書を伝えてきたことでも知られています。江戸時代の史料としては、本多氏による領内最初の検地である元和6(1620)年「下総国中相馬領花野井村地詰帳」(写)、村の様子が分かる元禄16(1703)年「下総国花野井村郷差出帳」などがあります。その他、牧士を勤めていた関係から鹿狩などなど史料も含まれます。



図2 「富嶽三十六景」のうち小金牧 船橋市図書館蔵

(4) 野馬除土手と野付村

① 野馬除土手

牧と村の耕地の堺には、場所により野馬除土手・野馬堀が築かれ、野馬の逃走を防いでいました。土手の高さは3 mほどもあり、牧境の土手は「御普請」といわれ幕府や田中藩から手当てが出る工事もありましたが、「自普請」といって農民が自分たちの費用負担で築いたり修復したりする工事もありました。例えば、享和3(1803)年の高柳新田明細帳に「自普請之儀者野馬除堀長四百間程有之候」とあるのがこれで、同様の記載は周辺の村々の明細帳によく見られます。また、牧内には野馬追いに便利なように勢子土手が縦横に築かれていましたが、これは御普請といって構築・修復の際には手当てが支給されました。土手は大雨などにより崩れ、その修復には多くの人出がかかり、村にとって大変な負担となっていました。

次の写真は、高田台牧の大塚野馬土手の発掘調査時の写真ですが野馬土手の大きさがわかります。



写真1 柏大塚野馬土手の断面の調査 千葉県教育振興財団文化財センター

② 野付村の負担

牧近隣の村々は、野付村といって各牧に数十か村単位で付属していました。中野牧付き高柳村の享和元（1801）年の書上によれば、牧関係の毎年定まった人足として、「御野馬見廻り人足」毎日2人宛、野馬捕りの際の中野・下野・印西牧への「御野馬人足」など延べ870人余、その他御普請や自普請、病気や死んだ馬の「取仕舞人足」、耕地に入った馬の「追払人足」など数百人が課せられました。野付村は一方で馬を得やすく、牧内で薪をとったりその輸送に当たったりと現金収入の途もありましたが、牧内の獣や野馬に作物を食い荒らされることも多く、困難を強いられました。

そこに、野付村による人足軽減闘争が起こる要因がありましたが、なかでも寛政から文政の長期にわたる高柳村を中心とした嘆願活動はよく知られています。寛政12（1800）年、高柳村は捕馬の際、遠方の下野牧（松戸市・鎌ヶ谷市・白井市・船橋市）や印西牧（白井市・印西市）への人足免除を金ヶ作役所に歎願しました。これは、翌年に7か村・2新田を巻き込むことになりましたが役所に無視され、埒が明かないと見た本多領（田中本多藩）の村では享和3（1803）年に領主へと嘆願先を変えました。さらに文化元（1804）年、嘆願内容を整理して訴願

村を61か村に拡大させ幕府へ嘆願したものの、これまた要求は叶いませんでした。ついに文政10(1827)年、不誠実な対応にしびれを切らした村々は幕府3奉行への箱訴^{はこそ}を断行することになりました。その内容は、中野牧付村々は遠方の印西牧に夜通し歩いて出かけなければならない一方、印西牧近辺にもかかわらず人足を出さない村があるのは不平等だということに尽きました。この結果は不明ですが、今では当然である行政上の「平等」性の追求が、当時であっても訴願活動の原理となり得たことが分かる事件でした。

(5) 享保期の新田開発

小金中野牧に設置された金ヶ作陣屋は、牧の開発拠点でもありました。地方^{じかた}巧者^{こうしゃ}(農政の精通者)として著名な代官小宮山杳之進^{もくのしん}は、小金・佐倉牧の開発の命を受け、享保8(1723)年この陣屋を開きました。同じくこの年大岡忠相系の町奉行管下の代官は武蔵野新田の開発に着手し、また町奉行与力^{よりききゆうち}給地が広がる上総東金領^{せんちやうの}や千町野(茂原市)でも代官上坂安左衛門らによって開発が推進されていました。

小金牧・佐倉牧の開発は、これら享保改革新田開発政策の一環にありました。すでに寛文・延宝期には、庄内牧が新田開発されて消滅していて、印西牧周辺でも惣深新田^{そうふけ}(印西市)が開かれていたように、低い丘陵や牧周辺の野にも開発がおよび新田村が成立していました。それでも水利が悪い台地までは新田の開発がおよばず、牧は維持されていました。しかし享保改革期には年貢収納の増大をはかって、いよいよ台地の高いところにある牧の内にまで開発の手がおよび、野馬の生育圏に浸食を深めることになりました。

その開発手法は、開発地が野馬に踏み荒らされないように野馬除けの土手を築くことが必須でした。土手の築造などは野付の村々の負担で行い、そしてその内側に開墾地を確保して、現地を畑に仕立てました。開発に着手してから8年後の享保15(1730)年、代官小宮山の検地が行われました。その検地帳では、水をさほど必要としない林の仕立てが中心で、植林された地面は「林畑」という地目で記録されていました。

この頃、江戸で燃材需要が高まりをみせ、^{くぬぎ}櫛などが徳用の産物となり、林の開発が有効になってきていました。

(6) 小金牧御鹿狩

① 御鹿狩

江戸時代に、小金牧の一角（現在の松戸市五香六実辺り）で、4回にわたって將軍家の御鹿狩おしがりが行われました。第1回と第2回は8代將軍吉宗の時で享保10（1725）年と翌享保11（1726）年に、第3回は11代將軍家齊の時で寛政7（1795）年に、第4回は12代將軍家慶の時で嘉永2（1849）年に行われました。

鹿狩の仕方は4回ともほぼ同じで、まず中野牧・下野牧の野馬を六方野（四街道市）に追い移しておきました。享保期の鹿狩は小金牧内の獲物で間に合いましたが、寛政期の鹿狩では、獲物数が少ないため数日前から、東は銚子、西は江戸川、南は大多喜、北は利根川辺りから追勢子人足が中野牧の將軍の御立おたつば場のある狩場を目指して獲物を追い立てておきます。その追勢子人足は、下総を中心に、上総、常陸、武蔵、相模国の一部からも徴用されていました。狩の当日には將軍が老中を始め、諸役人を引き連れ、作法（鹿狩のしきたり）に則った狩をしました。その獲物は、鹿・猪・兎・雉などでした。

この御鹿狩は、小金牧の近隣農民にとっても大きな関心事でした。鹿狩の目的の一つは牧内に大繁殖している鹿や猪・兎などの小獣類や鳥類による農作物被害の増加を食い止めることでした。しかし一方で鹿狩は軍事訓練を名目に掲げた一大行事という面を持ち、武士の「遊戯」として最高のものであり、それだけ裏方である農民達の負担は重いものでした。

② 享保期の御鹿狩

享保10（1725）年の吉宗の鹿狩は、3月27日に行われましたが、それに先立ち15日には役人や勢子人足は、一の手から七の手まで、7組に分けられました。そして鹿狩の3日前になると、まず上野牧・高田台牧、そして下野牧の牧内から鹿・猪を追い出し、狩場内に追い込む内払いが行われました。この追勢子人足には15歳以上60歳未満の元気な農民が動員され、各人長さ2間の竹1本と3尺の縄を持参し、この内1村当たり5人位は竹貝ろうそくと称する鳴り物よせばを持ち、2泊3日の食料と蠟燭ろうそくを持って定められた寄場よせばに集合しました。

勢子人足の人数は、一の手が1,415人、二の手が1,771人、三の手が1,499人、四の手が1,462人、五の手1,490人、六の手が1,466人、七の手が1,500人

で合わせて10,603人でした。勢子の多くは、小金五牧周辺の村々から駆り出されていますが、遠くは相模国からも駆り出されています。勢子の各寄場は、一の手は日暮村（松戸市）、二の手は逆井村（柏市）、三の手は高柳村（柏市）、四の手は栗野村（鎌ヶ谷市）、五の手は中沢村（鎌ヶ谷市）、六の手は大町新田（市川市）、七の手は紙敷村（松戸市）に置かれました。柏市域が関係するのは二の手、三の手、四の手でした。二の手では酒井根村の清兵衛、逆井村の藤左衛門・七左衛門、大青田村の宇左衛門・七郎兵衛、増尾村の兵庫、船戸村の忠左衛門・武左衛門が、三の手では大青田村の官右衛門、逆井村武兵衛、松ヶ崎村武兵衛・八左衛門が、四の手では柏村の五兵衛・勘兵衛がそれぞれ村方世話役となっていました。

「徳川実記」には、3月27日の狩当日、吉宗一行は、午前2時ごろ出発し、両国橋から船に乗り、葛飾郡小菅村（東京都葛飾区）で陸にあがり、小金牧に到着しました。お供衆には老中松平左近将監（佐倉藩主）を始め、若年寄・御側衆・近習などのほか、若手の外様の家臣もいました。大番組等の旗本が騎馬勢子500騎余り、歩行勢子2,000人余りでした。そしてこの時の獲物は、猪3、鹿800余、狼1、雉10羽という結果でした。

吉宗の2度目の御鹿狩は、翌享保11（1726）年3月27日に前年以上の規模で実施されました。この時の、勢子農民は3万人以上で、鑓や鉄砲で猪11、鹿500余が仕留められました。

③ 百姓勢子

鹿狩の際に鹿や猪を狩場まで追い込むのは、百姓勢子といわれた農民の役目でした。家斉の行った寛政7（1795）年の鹿狩には、武蔵・下総・上総・常陸の4か国381村から本人足だけでも7万人以上の勢子が参加しています。

村ごとに指定された勢子たちは、村名や人足数を書いた御用幟（のぼり）、威鉄砲、竹竿に捕縄、食料などを持って、三日三晩をかけて獲物を御狩場まで追い込みました。



図3 百姓勢子のいでたち (松戸市立博物館 改訂版常設展示) 図録

(7) 相馬野馬追と小金牧

① 牧と野馬追い

野馬追いは、本来、馬の生産工程の一段階です。野馬を間引きするために、捕込とよばれる施設へ馬を追い込むことを、「捕込」「野馬捕り」または「野馬追い」と称されました。江戸時代の小金牧・佐倉牧では、追い込んだ野馬を、御用馬・再放馬・競売馬に区分けしていました。その野馬を追い込む行事の際には、多くの見物人で賑わったとのこと。野馬を追い込む情景は、牧が存在するところであれば、必ず見られたのです。

② 相馬氏と相馬野馬追

中世、下総国相馬郡を支配した相馬氏は、鎌倉時代末期、その一部が陸奥国行方郡（福島県南相馬市）に移住した結果、下総国に残った下総相馬氏と移住した奥州相馬氏に分かれます。奥州相馬氏は江戸時代を通じて相馬中村藩主として存続します。

相馬野馬追いは、相馬一族が、その信仰する妙見神に駿馬を捕らえて奉納する妙見信仰と深く結びつき、相馬氏の遠祖とされる平将門が下総国葛飾郡小金

原に野馬を放牧し、野馬を敵兵に見立てて軍事訓練した、という故事に始まりません。

トピックス① 「野馬追之記」

幕藩時代、相馬藩では“野馬追祭り”は公式行事でした。延享元（1744）年、時の藩主相馬尊胤が徳川幕府に上程した「野馬追之記」が残っています。

「鎮守妙見祭野馬追いのこと、先祖、下総国居住の節小金原において野馬追仕り候。その後当郡に移り候以来、野馬追の場所は行方郡原町と申す所に東西二里余南北二十丁余の原に四方高土手を築き、西は原の外山林まで囲い入り、鎮守神馬として数百匹の駒を放し置き、先祖より今に至るまで毎年五月中の申の日野馬追仕り候。・・・」

トピックス② 将門ゆかりの故郷を偲ぶ民謡

民謡の“相馬流れ山”とは、下総国流山（流山市）をさしています。下総の流山を唄ったこの民謡が、なぜ奥州海道の相馬で心をこめて唄い継がれているのでしょうか。

“相馬流れ山”は、鎌倉末期の元亨3（1323）年、相馬師常から6代目の重胤（奥州相馬氏始祖）が下総国相馬郡を離れて一族郎党とともに陸奥国行方郡に移った時、重胤たちが故郷流山を偲んで唄った歌だといわれています。彼らが、それほど相馬の地を離れがたいと思ったのは、なぜでしょうか。

下総国相馬の地は、平将門の伝承と深く結びついています。“相馬流れ山”は、その将門故地を唄いあげ、野馬追い祭も、将門の領地だった小金原の野馬追い行事に由来しています。

II 柏の水運―手賀沼と利根川の開拓と物流―

1. 概要

江戸幕府が開かれ江戸が政治の中心となりました。そのため、参勤交代制度、江戸城普請などをきっかけとして江戸の人口が増加し、大量の年貢米の輸送や、物資輸送が必要となりました。

江戸時代、東北諸藩では江戸への年貢米の輸送、廻米によって換金する必要がありました。当初は外海を通過して江戸に向かう航路でしたが、風待ちのために多くの日数を要し、鹿島灘や房総沖の難所を通ったりしなければなりません。これを避けるため常陸の那珂湊に入り、途中駄馬による陸送を伴うルートをとっていましたが、輸送力が限られていました。

江戸幕府は承応年間に利根川東遷事業を完成させました。その結果、利根川水系は関東平野に巨大な水路網を形成し、関東地方だけでなく、外海ルートと結ばれた津軽や仙台など陸奥方面との間で物資が盛んに行き交うようになりました。

このため利根川は、日本きっての内陸水路として栄え、本川・支川の沿岸には、荷を下ろす河岸が数多く設けられ蔵や河岸問屋が建ち並び、賑わっていました。

江戸から約 30 km と近い柏市域にも河岸が作られました。“布施河岸”は、江戸時代から明治初期にかけて、利根川舟運の物資を陸揚げして、江戸川の加村河岸（流山市）まで陸送し、江戸川を江戸まで舟運する輸送経路の要衝として繁栄しました。

明治 23（1890）年には利根運河が開通し、東京への舟運は従来と比較して航路、日程とも大幅に短縮できたため運賃も安くなり、最盛期には年間 37,594 艘もの船が利根運河を通りました。

この頃まで荷物輸送の中で重要な地位を占めていた舟運でしたが、鉄道の開通や道路の改良など陸上交通が発達し、舟運は徐々に衰退していきました。



図4 利根川水系・水運の図（千葉県立関宿城博物館所蔵図から引用（部分））

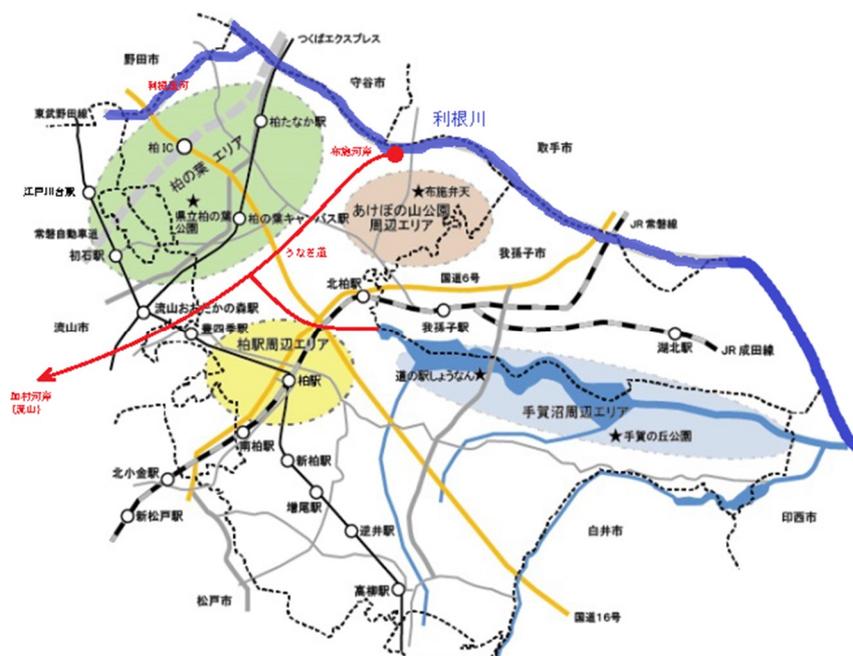


図5 柏市の旧水運要衝地（手賀沼・利根川の水路）

2. 手賀沼

(1) 手賀沼の歴史

約 6 千年前、手賀沼から鬼怒川辺りまでは海でした。鹿島灘に開いた奥深い入り江となっていました。その後、海が退き陸地となり、低い所はそのまま水が溜まって湖や沼になりました。しかし手賀沼などはまだ利根川に繋がっており、江戸時代初期までは利根川を利用した舟運は手賀沼内まで入り込み平塚河岸、戸張河岸なども栄えていました。

柏市域辺りが海であった証拠に布瀬でクジラの化石（12～13 万年前）が出土しています。

手賀沼の岸辺は、江戸時代頃から米などの増収を目的として、度々大規模な開拓が行われ、その過程で手賀沼は閉じられ利根川からの直接的な舟運は不可能となりました。



図 6 手賀沼宝永絵図（柏市教育委員会）

(2) 手賀沼の開発の歴史（近世）

江戸幕府が開かれた頃の手賀沼は、10 km²ほどの広さ（現在は 4.6 km²）、深さ 2 m ほどの沼で、一部で利根川とつながっていました。

江戸幕府は早くから新田開発のため、手賀沼の干拓に着手しました。開発をするには水路を作り沼の水を抜く必要があり、手賀沼と利根川の間に排水のために水門（^{いりひ} 坎樋）が建設されました。

手賀沼は、利根川との水位差が少ないため、沼水を自然排水することが極めて困難です。地元民から“逆さ沼”と呼ばれるように、利根川の出水のたびに逆流

する洪水に襲われ、堤防決壊や坎樋が壊れて、手賀沼洪水を繰り返し、新田開発は思うようには進みませんでした。

手賀沼の開発を、年代を追ってみてみましょう。

表1 手賀沼開発の略史

開発年	開発に関するできごと
寛文 11(1671)年	江戸の商人海野屋作兵衛など 16 名が開発を請負う。 坎樋を設けたため、舟運はできなくなった。 10 年後の検地では、開発田畑は約 298 町歩、年貢米 122 石でした。
享保 12(1727)年	幕臣井沢惣兵衛が開発計画を作る。 江戸商人高田友清に出資、事業をさせる。 千間堤を作って沼を区切り新田作りを目論む。 10 年後元文 3 (1738) 年の洪水により千間堤は破壊される。
天明 5(1785)年	老中田沼意次が手賀沼を干拓して新田開発を行う。 工事費用は全国の大地主や大商人の財力があてられた。 翌年の竣工直後、洪水により坎樋、堤は完全に破壊される。
	以後、復旧されることはなかった。 昭和時代まで、手賀沼大洪水は続く。
昭和 38(1963)年	機械式排水が可能となる。
昭和 43(1968)年	手賀沼干拓が完了し、沼の水面積が半減する。

(3) 手賀沼～江戸湾（東京湾）運河構想

江戸幕府は、後述 3. (1) のとおり利根川の東遷により内陸水運の大動脈を完成させました。内陸水運は、安全で輸送日数も安定しましたが、那珂湊や銚子湊から利根川を関宿まで遡り江戸川筋を下り江戸へ輸送することから、なんと

でも時間がかかったため、印旛沼、手賀沼辺りから江戸湾（東京湾）をつなぐ運河構想は幕府にとって課題となりました。

幕府にとっては内陸水運の必要性の増大と新田開発、地元農民にとっては沼の治水・洪水対策と新田開発を求めて東京湾への運河構想が希求されたのです。

徳川 2 代将軍秀忠が、手賀沼から江戸川への運送の水路を開発しようとしたが秀忠の死により中止となったとの記録（徳川実記）や、度重なる地元農民からの開発の試みなどの古文書も残っており、江戸時代初期から手賀沼から東京湾への運河開削の計画が幕府のみならず、手賀沼周辺の地元農民からも幾度も発案されましたが、実現には至りませんでした。

3. 利根川

(1) 利根川の水運

利根川の水運の歴史は承和 2（835）年の太政官符で、現在の墨田川に常設の渡船が存在し、物流を行っていた頃から始まります。

江戸幕府は、江戸湾（東京湾）に注いでいた利根川を、江戸を水害から守り、新田開発を推進すること、また、舟運を開いて東北と関東との交通・輸送体系を確立することを目的として「利根川東遷」を承応 3（1654）年に完成させました。

承応元（1652）年の“内川廻し”の完成とあわせて、^{なかみなと}那珂湊または銚子湊から利根川を関宿（野田市関宿町）までさかのぼり江戸川筋を下って江戸へ運ぶ、物資輸送の大動脈の輸送路が完成しました。

これにより東回り廻船^{注1}で江戸へ入る海上輸送の危険性と風待ちなどによる輸送日数の不安定さからは回避され、なくてはならない輸送路となりました。東回り廻船で運ばれた北海道や東北からの物資は、銚子で河舟（高瀬舟^{注2}など）に積替えて利根川を遡り関宿で江戸川へ入り、江戸川を下って江戸へ運ばれたのです。しかし、これには多くの日数がかかる上、江戸後期になると土砂が中州を作り渇水期には舟の運行に支障が出るなど難題がありました。

これの代替え策の一つとして、布施河岸など利根川流域の河岸から江戸川への陸送の発達はありましたが、駄馬などによる陸送は、米などの重いもの、馬に載せられない大きなもの、数量の多い物資の輸送には不向きであり、利根川舟運の難題は明治時代まで解決されることはありませんでした。

注1：東回り廻船は、幕府領があった日本海沿岸から津軽海峡を経て本州沿いを南下、親潮と黒潮が交差し強い西風（特に冬季）が吹く房総沖を避けて房総半島の東を廻り、伊豆下田で風待ちした後、順風を得て江戸湾に入る外海江戸廻りの輸送ルートを目指すもの

注2：当時の利根川水運で多く使用された高瀬舟は、全長最大30m（米俵約1,300俵を運べる）の巨大な船もあり、他の地方より大型だった。



写真2 利根川の高瀬舟（旧吉田家住宅歴史公園）

(2) 利根運河の水運

利根川を使った内陸水運が抱えた、輸送日数がかかること、渇水期には舟運に支障が出ることなどの難題を解決するため、明治時代になって利根運河という画期的な事業が実施されます。

利根運河は、利根川～江戸川間を結ぶバイパスの水運ルートとして、柏市船戸から流山市深井新田間を開削して利根川と江戸川を結んだ全長8.5kmの運河です。明治23（1890）年に完成しました。

運河の完成により、関宿を通る航路よりも、距離にして約40km、日数にして3日から1日に短縮できるようになり、時間・費用が大きく軽減したことで、多

くの船が運河を往来しました。運河開通から昭和の閉鎖までに通った舟は99万5,600隻以上(20,763隻/年平均)です。

その後、利根運河は、明治29(1896)年の土浦線(常磐線)の開通、自動車輸送の普及などで衰退し、昭和16(1941)年の台風による大洪水で壊れ舟止めとなったのを機に運河の役割を終えたのです。

昭和16年以降は利根川・江戸川の水量を調節する役割を担い、現在は運河及び周辺の自然を活かした憩いの場として活用されています。また、令和元(2019)年10月30日には文化庁の「歴史の道百選」に追加選定されました。

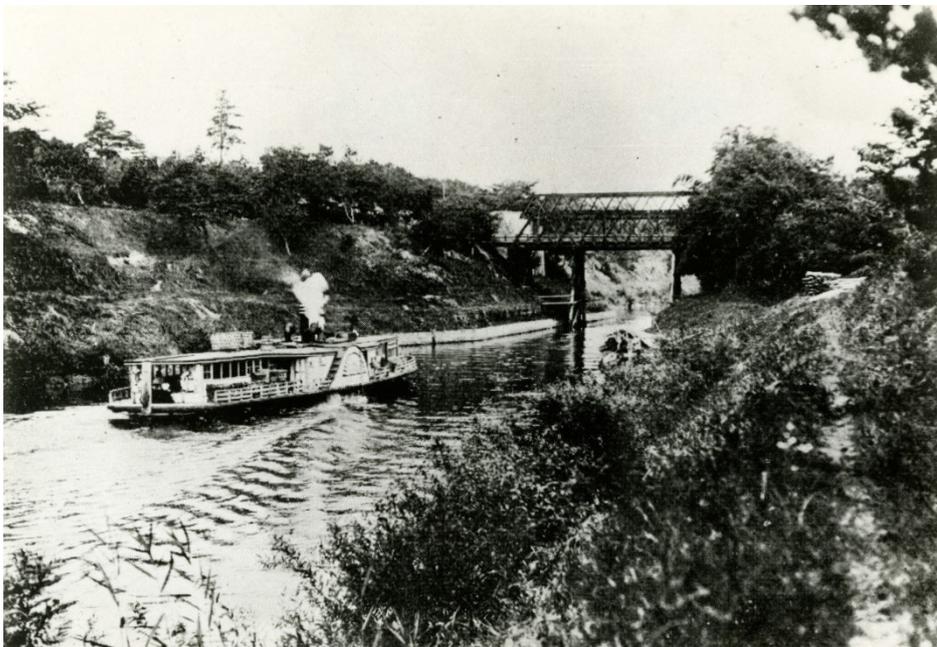


写真3 利根運河の外輪船 (大正4(1915)年, 柏市教育委員会)

(3) 利根運河の建設

「利根運河計画」を推進したのは、広瀬誠一郎(茨城県議会議員)でした。当時、土木技術が進んでいたオランダの技師“ムルデム”に依頼し明治18(1885)年に「利根運河計画」を提出しました。また、ムルデムは現場監督としても活躍したのです。広瀬誠一郎などが明治20(1887)年「利根運河株式会社」を設立し、本格的に動き出し明治21(1888)年から2年の工期200万人(3,000人/日平均)が従事して明治23(1890)年竣工したのです。

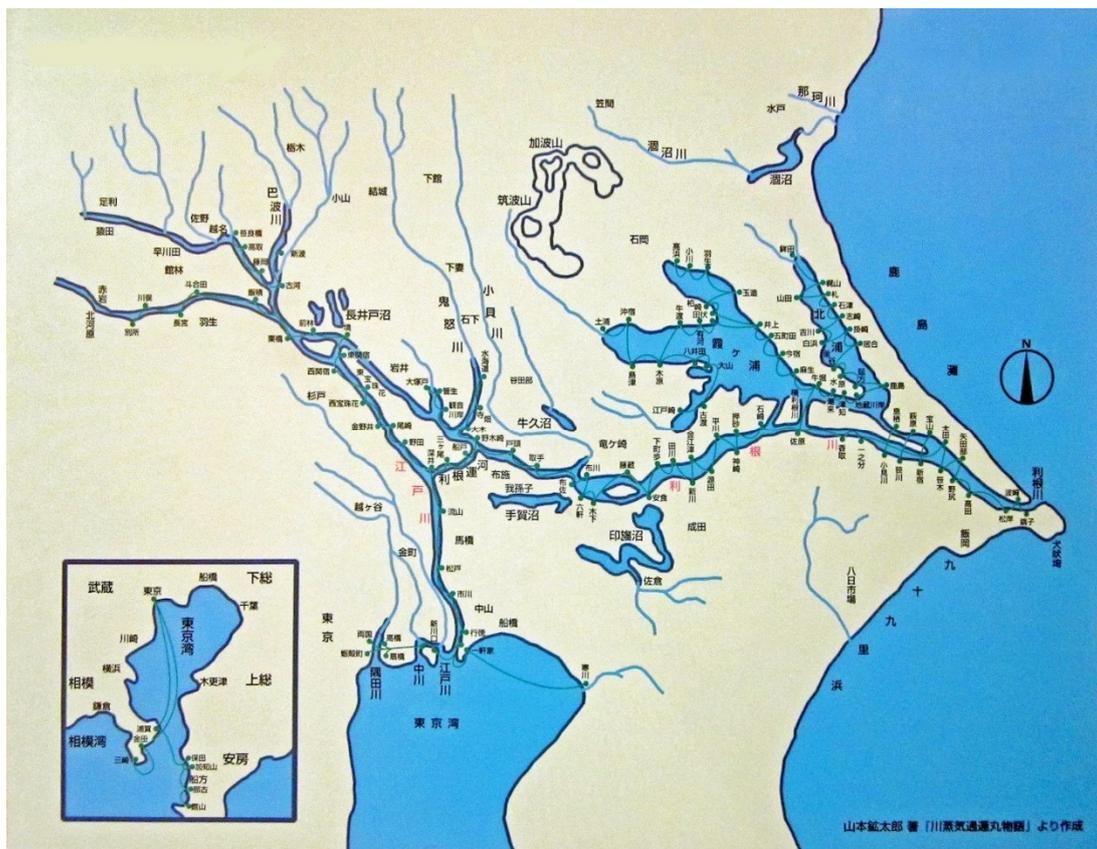


図7 明治中期の水路図（「川蒸気通運丸物語(山本紘太郎著)」を参考に作成）

4. “布施河岸・七里ヶ渡し”と“(通称)うなぎ道”

(1) 布施河岸の七里ヶ渡し(渡船場)

関東三弁財天といわれる布施弁天(東海寺)の近くにあった布施河岸と戸頭(取手市)との間の「七里ヶ渡し」は、江戸時代以前からあったといわれています。

元和2(1616)年、江戸幕府から御定船場に指定され、特に布施の船着き場は利根川を往来する船の河岸場として繁栄しました。布施河岸には回船問屋や宿が十数軒あり、旅人や若い衆相手の茶店も軒を並べていたといえます。

なお、渡しの名は、布施村下の七里ヶ浜に由来するなどの諸説があります。



写真4 布施の渡し舟屋（柏市教育委員会）

(2) (通称) うなぎ道～利根運河完成までの陸送路

江戸時代から明治初期にかけて、布施河岸（七里ヶ渡し）から高田（柏市）を
通って加村河岸（流山市）まで荷駄馬の往来で栄えた物資輸送路（全長約14 km）
がありました。

利根川の水路を使い輸送されてきた北海道や東北からの物資や、銚子沖で捕
れた鮪や鰹などの海産物あるいは霞ヶ浦周辺の米穀などが「布施河岸」で陸揚げ
され、駄馬で加村河岸へ運ばれ高瀬舟に積替えて江戸川を下り、江戸へ運ばれま
した。この道は、手賀沼や利根川で捕れたウナギを生きたまま江戸の魚河岸へ運
ぶことにも利用されたことから“(通称) うなぎ道”とも呼ばれています。

昔から利根川や手賀沼のうなぎは「天下の珍味」との記録があるほどで江戸の
人々に喜ばれていました。捕らえた利根川のうなぎは布施から、手賀沼のうなぎ
は戸張から高田を通して加村河岸まで運ばれ船で江戸川を下りました。布施と
手賀沼から生きたまま運ばれてきたうなぎは、ともに高田の「水切り場（湧き
水）」で水に浸して元気を取り戻させ、鮮度を保って江戸へ運ばれていきます。

布施河岸は、江戸へのいろいろな物流拠点として重要な役割を果たしていました。



写真5 手賀沼の漁業：船曳網（柏市教育委員会）

参考文献：

- 「郷土かしわ地理歴史」柏市教育委員会 中学校教科副読本編集委員会
- 「歴史ガイドかしわ」柏市史編さん委員会
- 「詳説日本史図録」詳説日本史図録編集委員会 山川出版社
- 「柏市制六十周年記念企画所蔵資料調査報告書 小金牧」柏市教育委員会
- 「下総・奥州相馬一族」七宮洋三著 新人物往来社
- 「柏市史 近世編」柏市教育委員会 平成7年7月31日発行
- 「柏市史（原始古代中世 考古資料）」柏市教育委員会 平成31年2月22日発行
- 「千葉県歴史」石井進・宇野俊一編 山川出版社 2012年02月発行
- 「改訂版常設展示図録 小金牧と御鹿狩」松戸市立博物館
- 「河川交通と伝統産業」千葉県立関宿城博物館
- 「手賀沼の歴史・干拓」柏市教育委員会
- 「第3部手賀沼（1）近世開発の歴史」柏市教育委員会
- 「利根川の歴史・利根川の東遷」国土交通省 関東地方整備局
- 「利根川運河（利根川と江戸川をむすんだ川の道）国土交通省 関東地方整備局
- 「東葛観光歴史事典 東葛流山研究」（第16号“諏訪道”）山本紘太郎
- 「手賀沼—東京湾運河構想と手賀沼開発—」（かしわの歴史—柏市史研究 創刊号）中村 勝 柏市教育委員会、平成24年3月30日発行
- 「川蒸気通運丸物語」山本紘太郎
- 「柏の歴史よもやま話」浦久淳子 崙出版 1998年
- 柏市HP「七里ヶ渡し」最終更新日 2011年3月1日、2019年10月29日閲覧
<http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/280400/p001526.html>
- 国土交通省水管理・国土保全局HP「利根川」、2019年11月2日閲覧
https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0316_tonegawa/0316_tonegawa_01.html

第4章 近代

目次

I 小金牧の開墾 一十余二地区を中心として一	
1. 概要	p. 86
2. 牧の廃止と開墾会社	p. 86
(1) 牧の廃止	p. 86
(2) 開墾会社の成立	p. 87
(3) 入植者の選別と入植	p. 87
(4) 開墾会社の解散と土地所有権をめぐる争い	p. 88
(5) 三井組の施策	p. 90
(6) 開墾事業の実態	p. 90
3. 軍事基地	p. 91
(1) 陸軍飛行場の建設	p. 91

I 小金牧の開墾 一十余二地区を中心として一

1. 概要

江戸時代、幕府の御用牧であった小金牧は、明治維新により大量に発生した失業武士や武士に依存して生活していた町人の困窮者を救済し、江戸の治安を守るための授産事業として開墾されることになりました。明治新政府は、東京の富民（裕福な商人）に会社を作らせて、開墾を請け負わせることとしました。入植者は相応の土地を与えられ、独立農民として安定した生活を保障されるはずでしたが、開墾は困難を極め、会社は3年で解散。入植者は5反5畝の土地を分与されただけで、そのほかの耕作地は開墾会社の社員（富裕な商人）の個人的な小作地とされてしまいました。この土地の所有権をめぐる裁判が行われ、当地の農民は長い裁判闘争を戦っていくことになりました。

軍事色が強くなったころ、柏は首都防衛の前線基地と位置付けられました。十余二には陸軍の飛行場が建設され、周辺にも軍関係の施設が多く作られて、戦争遂行の一翼を担っていきました。

2. 牧の廃止と開墾会社

(1) 牧の廃止

江戸時代、下総台地の幕府の御用牧（小金牧・佐倉牧）では、野馬が放牧されていました。牧の周辺の農村は野付村として、馬の管理や野馬土手の修復整備などに駆り出され、相当の負担を負っていました。しかし牧の中にある林から出る木材や薬草の採取、薪の製造や木材の運搬などの駄賃稼ぎなどで、それなりの収入を得ていました。また野馬が定期的に払い下げられ、農耕や運送に利用できたので、牧の存在は農民にとって相互依存的な利益にもなっていました。そのため、江戸幕府が崩壊したときには、牧の管理を任されていた牧士から、牧の存続を願い出る書面が提出されました。

ところが大政奉還によって多くの武士が浪人となり、また武士に依存して生計を立てていた職人などが困窮し、江戸在住者の約2割が極貧民・極々貧民に分類されるほどになったのです。そのため当初、明治新政府は野付村の開墾を一部認めて牧を縮小しながら維持していく方針でしたが、その後明治2(1869)年4

月東京窮民を入植させ開墾させるために、牧を完全に廃止することに方針を転換しました。

(2) 開墾会社の成立

開墾事業を委託された東京府は、明治2(1869)年3月開墾役所を設置し、現地の葛飾県と協議して4月22日に「開墾大意」を作成し、事業遂行の機関として民間の開墾会社を設置することを企画し、政府に進言しました。

政府は新たに開墾局を設置しました。そして、20万両を下げ渡し、明治2(1869)年5月、三井八郎右衛門を惣頭取そうとうどりに開墾会社を設立させ事業に着手させました。

開墾局は「開墾授産取扱内則」を定め、窮民に対し3か年の衣食住の保証や、すべての諸費用は会社で負担すること、手作り地は1人につき5反歩とし他に宅地として1軒に5畝歩の土地を割り当てるなどの救済方法を詳しく規定しました。

これらの窮民を一人前の独立農夫に仕上げるため、まず東京の授産場に彼らを集めて職業訓練が行われました。

開墾場は入植順に13の地域に分けられ、それぞれ名前が付けられました。十余二は12番目の入植地で、その地域は小金牧のうち高田台牧にあたり、その受け持ち社員は三井八郎右衛門でした。

(3) 入植者の選別と入植

明治2(1869)年10月から順次入植がはじまりました。募集人員1万人のところ応募者約8千人。はじめは士族の移住を計画していましたが、生活困窮は町人のほうが厳しく、あまり準備のできていない町人も急遽送り込まれたようです。入植者は東京の窮民を救済するとの意向が重視されたため、高齢者や病人なども多く、開墾者としては不向きな者が多く含まれていたようです。また当初計画されていた牧周辺の地元農民の開墾願いは開墾地の不足により取りやめとなりました。この地元農民は、自力で開墾し、また入植者の農業指導をすることを期待されていました。しかしこの地元農民が参加しなくなったことで、農業に不慣れな東京窮民の開墾成功はおぼつかないこととなってしまいました。

十余二は野馬の捕込とっこめが遅れたことから、明治4(1871)年2月に東京から8戸

27 人が入植しました。これはほかの開墾場が過剰入植者に悩んでいたのに比べるとかなり少ない人数です。十余二地区を引き受けた三井組が、開墾会社の社員の小作人になる約束で入植してくる近在窮民を積極的に受け入れたためとも思われます。彼らは野付村から通う出作開墾人と、近在農村からの移住者である移住開墾人でした。

(4) 開墾会社の解散と土地所有権をめぐる争い

明治2(1869)年10月から始められた入植開墾は、なかなかはかどらなかつたようです。原野の開墾は予想外の困難を伴い、江戸での生活を忘れることができず、江戸へ逃げ帰る者が続出しました。明治3(1870)年春にはすでに最初の脱村者が現れています。会社はこのままでは開墾の成功はおぼつかないことを察して、「教責場」という懲罰施設まで作って監視を厳しくしましたが、離脱者は後を絶ちませんでした。明治3(1870)年9月会社は貸渡米の廃止を通告しましたが、その前に暴風雨がこの地域を襲い、大きな被害が出たため、廃止ではなく1日5合を3合に減らすことにしました。入植者たちの不満は大きく、大規模な「沸騰」(集団行動)が度々発生しました。明治4(1871)年7月台風が襲来し、開墾地は壊滅的な被害を受けました。開墾地は周囲に防風林などがない原野状態であったため、風の被害を受けやすかったのでしょう。多くの農舎が倒壊し、その再建に多大な費用が必要となりました。会社はその対策のため、政府に対し拝借金とさらなる土地の引き渡しを要望しました。そしてその要望が認められなければ事業の廃止を表明しました。政府では民部省の廃止に伴い開墾事業は東京府の管轄となりました。さらに地元葛飾県へ移管することが提言されました。開墾会社は何度かの嘆願の後、明治5(1872)年3月御下賜金20万両は下げ渡しとし、これまで窮民に貸与したものは費用も農舎もすべて渡切として独立農夫とした。独立農夫となった開墾人への救助は、以後一切否定するという最終提案をしました。これは4月に政府から認められ、その後の開墾地の管理は新設された印旛県へ引き渡されることになりました。

開墾会社は当初、佐倉牧・小金牧の土地を45,000町歩と判断していました。ところが牧地の中には野付村が権利を持っている請地があり、これは開墾会社に引き渡されませんでした。また佐倉牧の一部が開墾から外されました。その結

果、開墾会社に渡された土地は10,170町歩となり、当初見込みの約4分の1となっていました。また開墾人に3年間の生活を約束していましたが、深い根拠もなく、開墾が始まれば費用も掛からなくなるだろうと考えていました。しかし開墾の困難と種々の見込み違いにより利益が出せなくなった会社は、明治5(1872)年5月ついに解散することになりました。この時開墾人には手作り地(5反)と家作地(5畝^{注1})が与えられ、その他の諸費用、農舎、農具も返済の義務を免れました。しかし以後は扶助などの嘆願をしない誓約をさせられました。開墾人は1戸3町歩の土地を分与されるはずでしたが、それが5反5畝になりました。また自力で開墾を行うものは耕作地の所有を認められるはずでしたが、規則が変更されていく過程でこの権利は消滅してしまいました。また明治5(1872)年の地租改正に伴う地券の発行に際し、開墾人への地券発行は明治7(1874)年に実行されましたが、近傍村々から移住あるいは通いで自力開墾した者には地券が発行されませんでした。彼らは、会社に小作証文を差し出して少額の手間賃を受け取っていました。東京窮民に分与された以外の土地は、本来開墾会社に属するものでありましたが、会社清算の際、出資金の相殺のため会社員(富裕商人)個人の名義とされました。そのため自力開墾者の小作証文も会社員個人あてのものとされてしまいました。

明治6(1873)年6月、自力で開墾したにもかかわらず小作人にされた豊四季・十余二などの自力開墾者は小作料不払いを行い、会社側はそれに対して小作地の引き上げを図り争いが激化し、裁判が始まりました。裁判の中で、小作料滞納として会社側が逆に裁判を起し、農民は敗訴して裁判費用まで負担させられることとなりました。農民側は千葉県に種々の請願を繰り返しました。また控訴に加え、内務省請願という大衆行動にも訴えました。これには東京窮民も参加し、より大きな運動となりました。農民たちは開墾会社の経理の虚偽性まで言及し、開墾地を社員の私有地化したことの根拠を質すなど開墾事業の構図に疑問を呈し、会社側が回答に窮するような場面もしばしばありました。しかし裁判は農民側の敗訴が続き、農民は大審院に上告しました。その時期に三井組の土地は裁判所に力を及ぼすことができる政府高官の名義に書き換えられ、結局農民の訴えは大審院においても棄却され、農民への強制執行が行われました。

長引く争議に千葉県も介入を余儀なくされたらしく、明治13(1880)年、旧

会社社員から1反5円で所有地の一部を買い取り、県有地も併せて、開墾に関わった農民たちに1反1円で下げ渡しました。その地は開墾に見合うほどのものではありませんでしたが、裁判費用などで疲弊していた農民は、県の調停に服して裁判から手をひくものも多くいました。しかし一部には、あくまでも自分たちの権利を主張して告発・請願を繰り返し、長い闘争を続けるものもいました。この過程では足尾鋇毒事件で政府と対決した田中正造が国会で質問をするなどの動きもありましたが、根本的な解決は農地改革まで全うされることはありませんでした。

特に十余二地区は東京窮民の入植が遅れたため入植者は少なく、管理者であった三井組が積極的に会社持ちの小作人を受け入れました。彼らは近在の村の出身者でありました。彼らは団結力も強く、上記裁判闘争の主体となっていました。

注1：1反=300坪（約991.7m²）1畝=30坪

(5) 三井組の施策

十余二地区を管理した三井組は市岡晋一郎を代人として経営にあたらせました。市岡は裁判に対しては非常に非妥協的な態度で臨んだため、闘争が長引いた一因となりました。しかし殖産では積極的に勸農事業を行いました。明治4(1871)年には養蚕と製茶を始めました。また植林にも力を入れ、明治14年(1881)には製糖会社を設け琥珀甘藷こはくがんしょから製糖を行いました。

村の建設にも心を配っていたようです。明治7(1874)年十余二に私立の小学校を建設し、開墾地の子供たちの教育に尽力しました。この学校は授業料もなく、教具や教員の給料も三井組が負担し、近隣村からも入学者を多く受け入れました。

市岡はまた、ほとんど三井の寄付で皇大神社という村社を建設し、村の精神的支柱を作りました。

(6) 開墾事業の実態

開墾地の農業は困難を極めました。土地はサラサラの赤土で地力が弱く、また水利もよくないため、陸稲以外米作りにはあまり適していませんでした。そのた

め開墾地では商品作物の導入が積極的に行われました。三井組は明治14(1881)年十余二村精糖会社を設立し、サトウキビ(琥珀甘蔗)の生産を奨励しました。しかし農民の技術が未熟で粗悪なサトウキビしか生産できなかったため、採算があわず会社は明治17(1884)年に解散しました。その後もいろいろな作物を導入しましたが、あまり成功しませんでした。しかし農民の努力の結果、十余二ではサツマイモの栽培に成功し特産品となりました。

大正時代から昭和にかけて‘紅赤’という品種を導入し、そこで生産された「十余二赤」というブランドのサツマイモは甘みが強く、焼き芋用として、東京で人気を博しました。農民は栽培方法にも工夫を重ね、高級品としてブランド化に成功したのです。しかし第二次世界大戦中に食料増産が奨励され、収穫量の多い品種にとって代わり、姿を消してしまいました。

3. 軍事基地

(1) 陸軍飛行場の建設

第一次世界大戦時期、戦争遂行のための兵器が飛躍的に発達しました。特に航空機の発達は、各国の脅威となり、航空機による攻撃に対処するための防空兵器の開発や防空諸施設の開発・整備が進められました。

日本でも大正期から飛行部隊の組織化が開始されましたが、昭和期に入ると、「国土防空」特に「帝都防空」が議論されるようになりました。「帝都防空」=「東京防空」のために、東京近郊に飛行場を建設することが必要とされました。そして陸軍が注目した土地は畑地が大半を占めていた東葛地域でした。昭和12(1937)年6月、陸軍は十余二に新飛行場を建設することを決定し、翌13(1938)年11月柏飛行場が完成しました。

柏飛行場は「帝都」防空の第一線の航空基地となり、第二次世界大戦末期にはアメリカ軍B29の迎撃基地ともなりました。

またロケット推進戦闘機「秋水」の開発基地ともなりました。周辺にはこのための燃料貯蔵庫なども作られていたことが知られています。

十余二の地元の農民はこの飛行場建設のために土地、家屋を強制的に徴用されました。本来小作地なので所有権はありませんでしたが、耕作権は補償されず、近隣の農民が耕作権を融通して耕作を助け合ったそうです。また飛行場の建設

には近在の小学6年生を含む13歳以上の男女が勤労奉仕に動員されました。赤土なので、赤い土が舞い上がり息もできないくらいだったといえます。

参考文献

「柏市史近代編」、柏市史編さん委員会、平成12年

「柏のむかし」、柏市史編さん委員会、昭和62年

「柏の歴史よもやま話」、柏市民新聞社・浦久淳子、1998年、崙書房、流山市

「歴史ガイドかしわ」、柏市史編さん委員会、平成19年

第5章 柏市の農業

目次

I 昭和から平成までの変遷	
1. 概要	p. 94
2. 純農村地域から住宅地域への変遷	p. 94
(1) 昭和の初め(1926～)	p. 94
(2) 昭和16(1941)年	p. 95
(3) 戦後から(1945～)	p. 95
(4) 昭和の終盤から平成中期	p. 96
3. 柏市の農業の特徴	p. 97
(1) 多様化してきた柏市の農業	p. 97
(2) 兼業農家の増加と離農の進行	p. 97
(3) 収入にみる農家の特色	p. 100
(4) 都市近郊農業としての特徴	p. 102
II 柏市の農業 トピックス	
1. 概要	p. 105
2. 柏市の農業－特産農産物紹介－	p. 105
(1) 豊四季のサトウキビとカブ	p. 106
① 豊四季のサトウキビ	
② 豊四季のカブ	
(2) 十余二のサツマイモ	p. 109
(3) 現在の柏市の主要農産物	p. 111
① ネギ	
(4) 柏市でしか栽培されていない野菜－根芋－	p. 112

I 昭和から平成までの変遷

1. 概要

柏市は、首都東京の30 km圏内の地域に位置しています。都心へ直接つながる鉄道や道路網も発達しており、都心へのアクセスの利便性も高いといえます。このような立地と利便性に恵まれた柏市は戦後になってから人口が著しく増加してきました。人口の増加に伴い、駅前や市街地への金融機関・大型店舗・百貨店などの進出によって、商業を中心とする第3次産業が発達し、さらに工業団地の造成や工業の事業所数の増加によって第2次産業も発達してきました。一方、第1次産業の農業については、人口の急増に伴い、離農が進み農家戸数や耕地面積が年々減少していく中で、消費者の好みに合わせた観光農業や野菜類栽培を中心とした都市近郊農業への転換が見られます。

本章を通じて、都市化・商業化の進展に対応していく農業の姿と、現在の柏市の農業を紹介します。

2. 純農村地域から住宅地域への変遷

柏市の農業は農地の転用が戦後急速に進み、商・工業地や宅地になり専業農家が少なくなりました。その中でも、専業農家の割合が比較的多く柏市柏の葉地区に隣接する田中地区の農家のお年寄りの話をまとめました。

(1) 昭和の初め(1926～)

田中地区の大部分は専業農家でした。現在のように機械化されておらず、鍬・鎌などの道具を使い人力で農作業をしていました。主な農産物は、コメ、ムギでした。野菜は、サトイモ、ハウレンソウ、ショウガなどを作っていました。現在ほど多くの種類の作物を作らず季節に応じてできた作物は馬車で柏駅まで運び、貨物列車で東京の市場へ送られました。当時は、コメ、ムギの収入に頼り多角経営は見られませんでした。農作業をすることが少ない冬の時期には、茨城県方面に農産物を売りに行ったり、出稼ぎに出たりして副収入を得ていました。また、地主制度による貧富の差がありました。小作人は年末になると年貢などを納めたり、地主の家の仕事を手伝ったりしていました。

(2) 昭和16(1941)年

太平洋戦争が始まり、戦争遂行のために軍需品を中心とする生産力拡充に力が入れられました。その結果、日常生活必需品が極度に不足して、衣服や食べ物などが配給制になりました。男性は兵役にとられ働き手がなくなりましたが、政府からは食料増産を求められました。また、国に売り渡さなければならぬ(供出)米の量が増え、保有米の量は生活ギリギリでした。

(3) 戦後から(1945~)

農地改革により地主制度がなくなりました。これにより、小作人も独立した自作農として農業経営が可能となり、農家はコメ、ムギから、年間を通して収穫できる野菜中心の経営に変わりました。農業収入が増え、農業協同組合を中心に出荷体制が整い、直接東京市場などと契約するなど有利な存在となりました。

そのような流れの中、昭和27(1952)年頃には農業経営に関心が高まり、一部の農家が研究サークル活動を始めました。ビニル栽培が取り入れられ、これがハウス栽培に発展しました。昭和29(1954)年に柏市域に市制がしかれ、多くの農地が住宅や工業団地の造成のため買収されたため、地主的存在の人たち以外の小規模な農業経営をしていた人たちは、生活の採算が取れなくなり、農業経営に行き詰り、年間を通して平均して収入が得られる作付けをしないと赤字に落ち込んでしまいました。

昭和40(1965)年代初め頃から、促成栽培^{注1}などの新しい栽培方法により出荷できる農作物の種類が増え、田中地区の野菜は都市近郊野菜として有名になりました。これにより、年間を通して野菜中心の多角経営が行われるようになりました。

注1: 寒い時期に加温するなどして、自然の収穫時期より早く花を咲かせたり、収穫したりする栽培方法のこと(ハウス栽培も一手法)

(4) 昭和の終盤から平成中期

農地（主に水田）が減ったことで、さらに野菜中心の多角経営が進み土地を集約的に利用するようになりました。また、近くの工場で働いて副収入を得て生活をする兼業農家がでてきました。

表1に、昭和の終わり頃から平成の中頃にかけての農地の転用状況を示しました。住宅用地とその他建設施設用地への転用面積が広く、鉱工業用地への転用面積は平成に入って減少しています。

表1. 農地転用の状況

単位：面積 a

年	転用された農地の総数		住宅用地		鉱工業用地		道水路鉄道用地		その他建設施設用地	
	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積
昭和 59	535	1,750	394	1,146	4	65	41	49	92	591
昭和 61	776	3,051	525	1,359	11	65	78	81	140	1,096
昭和 63	627	2,773	399	1,163	12	72	64	74	152	1,464
平成 2	623	3,134	376	1,090	13	104	65	132	169	1,808
平成 4	722	3,713	424	1,643	7	81	49	46	242	1,943
平成 6	632	3,139	410	1,623	-	-	42	36	166	1,348
平成 8	560	2,550	353	1,200	2	4	50	40	148	1,099
平成 10	499	2,447	289	955	-	-	51	78	131	1,137

農業委員会事務局（郷土かしわ）

3. 柏市の農業の特徴

平成 30（2018）年の全国都道府県別の農業産出額は 1 位：北海道（12,593 億円）、2 位：鹿児島県（4,863 億円）、3 位：茨城県（4,508 億円）、4 位：千葉県（4,259 億円）となっており、千葉県は全国有数の農業県といえます。そこで、農業県である千葉県の中にある柏市がどのような農業の特徴を有しているのか、資料を基に紐解いていきます。

(1) 多様化してきた柏市の農業

昭和 27（1952）年頃から始まったビニルハウスを活用した農業（施設栽培）が日本全国で増え始めます。柏市でも昭和 40 年代の初めをピークに農家戸数が減りましたが、ビニルハウス面積は増えていきました。また、柏市豊四季では中国野菜^{注2}が栽培され始めました。近年では、宅地化の進行とマイホームの増加に伴った農業として、切り花・鉢物・観葉植物・庭園樹木の栽培が増えてきました。このほか、都市化した生活の中から自然志向ニーズに応え、イチゴ、ブドウ、ナシ、サツマイモなどの観光農業も増えてきました。

以上のような農業の変遷は、いずれも人口の増加と都市化した柏市の特色に敏感に反応した農業経営といえます。

そして、これまでこれらの農産物は、各地区の農業協同組合や民間の出荷業者を通じて、県内外の各地へトラックにより出荷されてきました。その後、昭和 46（1971）年、柏市自体が商業都市化するにつれて市内での取引を円滑に行うために、国道 16 号線沿いに公設の総合地方卸売市場が開設されることによって、農作物が柏市内だけで流通させる仕組みができてきました。

注 2：中国から導入された野菜（チンゲンサイ、タアサイなど）のこと

(2) 兼業農家の増加と離農の進行

一般に農家は、専業農家から第 1 種兼業農家^{注3}・第 2 種兼業農家^{注4}への移行（第 1 段階）、第 2 種兼業農家の増加（第 2 段階）、すべての農家の減少（第 3 段階）と 3 つの段階を経て減少していきます。図 1 で見ると柏市は、昭和 35

（1960）年までが第 1 段階であり、昭和 45（1970）年までが第 2 段階、それ以降は第 3 段階となります。また、全農家戸数自体は、昭和 35（1960）年をピー

クに年々減少し続け、それと連動して農家が経営する耕地面積も減少していき
ました。昭和 35（1960）年から昭和 50（1975）年までは、田畑の耕地面積に
大きな減少が見られましたが、昭和 50（1975）年以降は大きな減少は見られな
いものの、田畑の休耕地の面積が目立つようになってきました。一方、田畑の
耕地面積の減少とは逆に、樹園地の耕地面積は観光農業での需要も加わり徐々
に増加していることがわかります。

柏市内の農家が減った理由として、1 時間ほどで東京に通勤できるため宅地
が増加し市街地整備計画で農地が減ったこと、柏市の商・工業が発展し農業以
上の収入が得られる職ができたことなどがあげられます。このように、柏市の
農業をみると、消費生活水準の向上により自給的な農家が減少していく過程を
見ることができます。

注 3：農業を主とする兼業農家

注 4：農業以外の仕事を主とする兼業農家

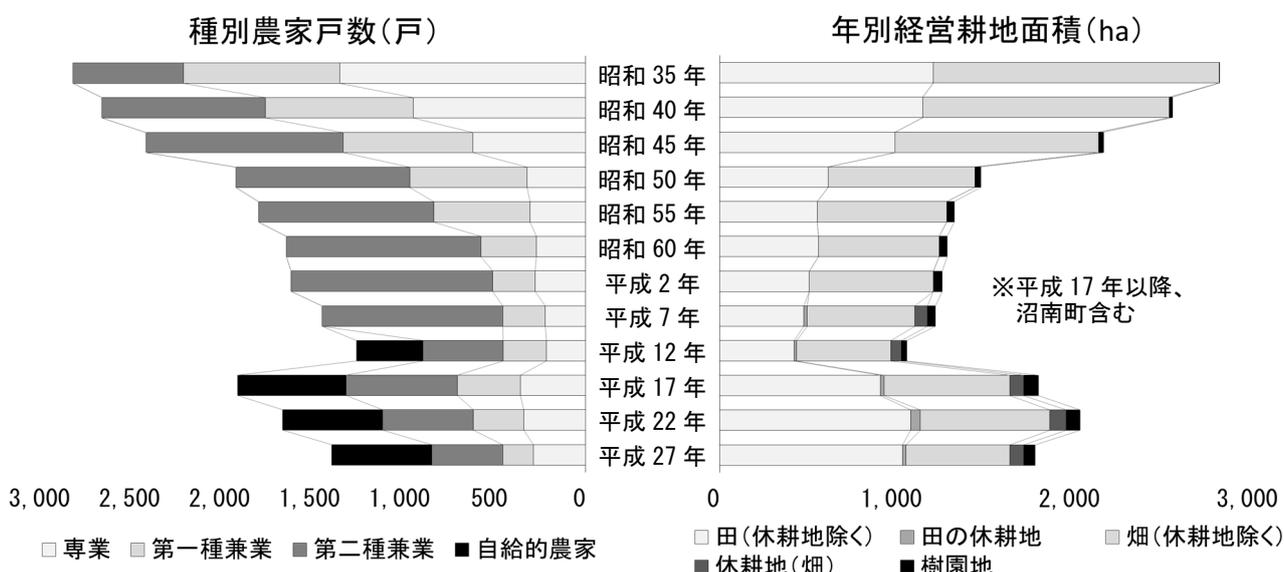


図 1. 柏市の農家戸数と経営耕地

農業基本調査結果報告書
農林業センサス結果報告書（昭和 55 年・平成 2 年、12 年、17 年、22 年、27 年調査）
農業センサス結果報告書（昭和 60 年・平成 7 年調査）

表2のとおり、柏市の昭和と平成の農家人口を比べると、昭和30（1955）年では総人口の36.8%を農家人口が占めていたのに対し、平成27（2015）年は総人口の約0.8%にまで減少しました。同様に、昭和と平成における柏市の農家戸数は、昭和30（1955）年では総世帯数の31.9%を占めていたのに対し、平成27（2015）年は総世帯数の約0.8%にまで減少しています。

また、農家人口は、昭和35（1960）年の18,082人をピークに、調査最新年の平成27年まで減り続けています。

表2. 農家人口・農家戸数（平成17年以降、沼南町含む）

年次		昭和30	35	40	45	50	55	60
項目								
総人口（A）		45,020	63,745	109,237	150,635	203,065	239,198	273,128
農家人口（B）		16,565	18,082	16,154	13,714	10,690	9,550	8,539
（B/A）（%）		36.8	28.4	14.8	9.1	5.3	4.0	3.1
総世帯数（C）		8,586	13,673	27,746	40,216	57,445	73,172	84,271
農家戸数（D）		2,743	2,846	2,686	2,442	1,972	1,815	1,661
（D/C）（%）		31.9	20.8	9.7	6.1	3.4	2.5	2.0
1戸当	（A/C）	5.2	4.7	3.9	3.7	3.5	3.3	3.2
人数	（B/D）	6.0	6.4	6.0	5.6	5.4	5.3	5.1

年次		平成2	7	12	17	22	27
項目							
総人口（A）		305,058	317,750	327,851	380,963	404,012	413,954
農家人口（B）		8,179	7,168	6,094	8,627	4,962	3,441
（B/A）（%）		2.7	2.3	1.9	2.3	1.2	0.8
総世帯数（C）		100,398	111,129	121,221	144,013	162,287	175,691
農家戸数（D）		1,635	1,463	1,271	1,932	1,682	1,410
（D/C）（%）		1.6	1.3	1.0	1.3	1.0	0.8
1戸当	（A/C）	3.0	2.9	2.7	2.6	2.5	2.4
人数	（B/D）	5.0	4.9	4.8	4.5	3.0	1.7

A、C：国勢調査結果報告書（各年10月1日現在）

B、D：昭和30年は昭和35年柏市勢要覧、昭和35～平成7年は農業基本調査、平成12～27年は柏市統計書（平成30年版）・世界農林業センサス（2月1日）

(3) 収入にみる農家の特色

昭和と平成の野菜の品目を比べると、カブ、ネギ、ホウレンソウは調査年のどの年においても上位に位置しています。一方で、平成に入ってから出現した野菜としてトマトがあげられます。表3では、平成9（1997）年の野菜のうち、上位3品目のカブ、ネギ、ホウレンソウで生産額の約58%を占めていることがわかります。このことから、都市近郊農業地域としての柏市の特色を表していることがうかがえます。

農家としては、野菜類は販売価格が不安定であることが大きな悩みです。加えて、都市化の問題から土地を手放す農家がいる反面、消費者の好みに合わせて経営を多角化させるなどの工夫をすることで多くの収入を得ている農家もいます。

表3. 農業粗生産額年別作物比率

昭和 62 年	かぶ	ねぎ	米	ほうれんそう	きゅうり	その他	計（百万）
	1,190 (20.1%)	1,127 (19.0%)	717 (12.0%)	689 (11.6%)	278 (4.7%)	1,928 (32.5%)	5,929
平成 元 年	ねぎ	かぶ	米	ほうれんそう	きゅうり	その他	計（百万）
	1,855 (27.0%)	1,174 (17.1%)	741 (10.8%)	694 (10.1%)	321 (4.7%)	2,074 (30.3%)	6,859
平成 3 年	かぶ	ほうれんそう	ねぎ	米	トマト	その他	計（百万）
	1,720 (22.1%)	1,334 (17.2%)	1,249 (16.1%)	704 (9.1%)	381 (4.9%)	2,381 (30.6%)	7,769
平成 5 年	ねぎ	かぶ	ほうれんそう	米	トマト	その他	計（百万）
	1,572 (21.1%)	1,553 (20.9%)	982 (13.2%)	741 (10.0%)	316 (4.2%)	2,274 (30.6%)	7,438
平成 7 年	かぶ	ねぎ	ほうれんそう	米	トマト	その他	計（百万）
	1,907 (26.4%)	1,085 (15.1%)	1,037 (14.4%)	750 (10.4%)	347 (4.8%)	2,077 (28.8%)	7,203
平成 9 年	かぶ	ねぎ	ほうれんそう	米	トマト	その他	計（百万）
	1,637 (24.5%)	1,311 (19.6%)	922 (13.8%)	719 (10.7%)	313 (4.6%)	1,762 (26.8%)	6,664

「郷土 かしわ〔地理・歴史編〕」柏市教育委員会 平成12年度版

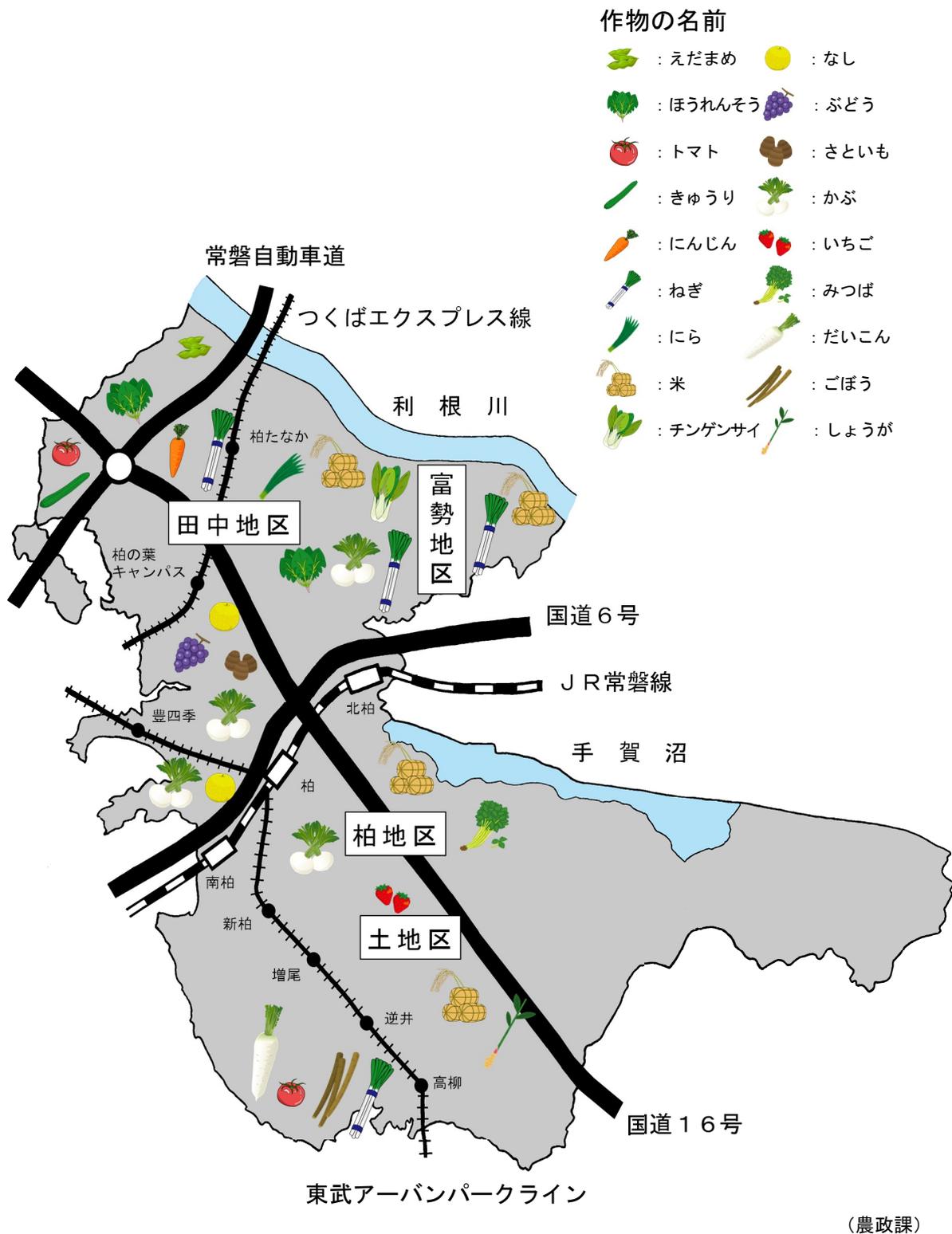


図3. 柏市の主な農作物と産地

「郷土 かしわ〔地理・歴史編〕」柏市教育委員会 平成12年度版

(4) 都市近郊農業としての特徴

東葛地域の自治体と比較しながら、現在の柏市の農業の特徴を見ていきます。表4に東葛地域の自治体の耕地面積と農業産出額を示しました。柏市の耕地面積は野田市に次いで広く、農業産出額は船橋市に次いで高い金額となっています。また販売農家一戸当たりの耕地面積が最も広く、東葛地域の自治体の中では農業が盛んな自治体の1つといえます。

表4. 東葛地域の耕地面積と農業産出額

(浦安市には農地がないため、グラフの区分には含めない)

区分	H29耕地面積 (ha)	市面積に対する 耕地面積(%)	販売農家一戸当 りの耕地面積(ha)	H28農業産出額 (億円)	耕地面積1ha 当たりの農業産出 額(万円/ha)
柏市	2,580	22.5	1.82	103.4	401
市川市	532	9.3	1.07	42.6	801
船橋市	1,230	14.4	1.24	103.5	841
野田市	2,640	25.5	1.41	75.7	287
松戸市	740	12.1	1.03	64.4	870
流山市	423	12.0	0.96	22.9	541
我孫子市	1,240	28.7	1.78	23.2	187
鎌ヶ谷市	449	21.3	1.20	40.6	904

松戸市都市農業振興計画

耕地面積：平成29年耕地面積統計

販売農家：経営耕地面積が30a以上の農業を営む世帯または、
農産物販売金額が年間50万円以上ある世帯

農業生産額：平成28年市町村別農業生産額（推計）

柏市と東葛地域の自治体における農業産出額の内訳を表5に示しました。野菜の割合が50%以上の自治体は柏市、船橋市、松戸市、流山市で、果実の割合が50%以上の自治体が市川市と鎌ヶ谷市です。野菜、果実の割合が高いことが都市近郊農業の特徴であるといわれています。コメの割合が高い我孫子市と、畜産の割合が高い野田市は、先述した自治体とは農業産出額の内訳が異なっています。

表5. 東葛地域の自治体の農業産出額の内訳

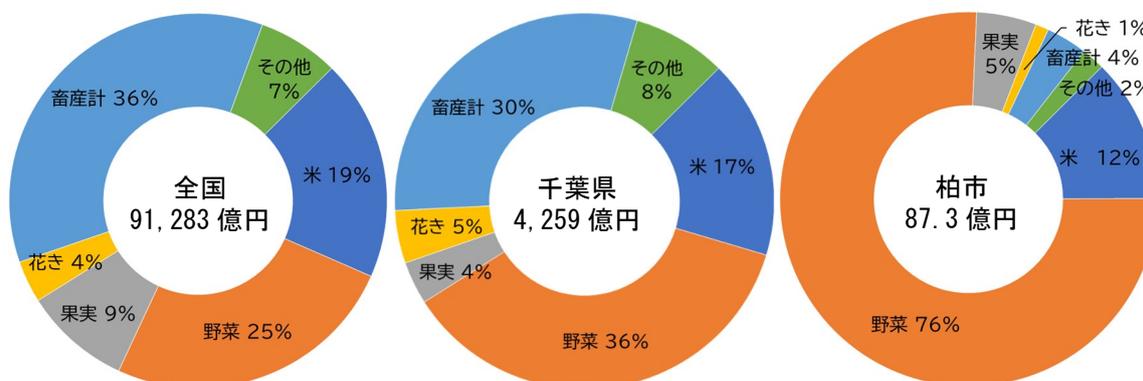
区分	米 (%)	野菜 (%)	果実 (%)	畜産 (%)	その他 (%)	合計 (千万円)
柏市	12	76	5	4	3	873
市川市	0	28	68	0	5	351
船橋市	1	64	20	11	3	840
野田市	16	48	1	30	4	646
松戸市	1	82	11	0	6	528
流山市	8	86	3	0	3	185
我孫子市	46	48	1	1	3	209
鎌ヶ谷市	0	35	59	3	3	322

市町村の姿 グラフと統計でみる農林水産業

図4に全国、千葉県、そして柏市の農業産出額の内訳を示しました。全国と千葉県はどちらも野菜と畜産の割合が高くその合計が60%以上で、次いでコメの順となっており、似た傾向を示しています。一方で柏市では、野菜の割合が70%以上と高く、畜産の割合が低いことから都市近郊農業の特色が出ているといえます。

ちなみに、柏市の農業産出額は全国の0.1%、千葉県の2%で、千葉県の中で柏市は、農業の盛んな自治体でないことがわかります。

図4. 全国、千葉県、柏市の農業産出額の内訳



市町村の姿 グラフと統計でみる農林水産業

参考文献

「郷土 かしわ〔地理・歴史編〕」 柏市教育委員会 平成12年度版

農業基本調査結果報告書

農林業センサス結果報告書（昭和55年・平成2年、12年、17年、22年、27年調査）

農業センサス結果報告書（昭和60年・平成7年調査）

国勢調査結果報告書

昭和35年柏市勢要覧

柏市統計書（平成30年版）

松戸市都市農業振興計画. 2020年7月確認.

[https://www.city.matsudo.chiba.jp/jigyosya/nougyou/
matudositosinougyou.html](https://www.city.matsudo.chiba.jp/jigyosya/nougyou/matudositosinougyou.html)

市町村の姿 グラフと統計でみる農林水産業. 農林水産省. 2020年7月確認.

<http://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/12/217/index.html>

II 柏市の農業 トピックス

1. 概要

本章では、柏市の特産農産物について6つ取り上げました。豊四季で明治時代に3年間だけ栽培されたサトウキビ、今も昔も柏の特産品であるカブ、大正～昭和時代に人気を博した十余二のサツマイモ、柏市の主力野菜であるネギとホウレンソウ、そして、柏市のみで栽培されている根芋について、まとめています。

2. 柏市の農業－特産農作物紹介－

柏市とその周辺の地域には、13カ所の数字にちなんだ地名が存在します(初富、^{はつとみ}二和、^{ふたわ}三咲、^{みさき}豊四季、^{とよしき}五香、^{ごこう}六実、^{むつみ}七栄、^{ななえ}八街、^{やちまた}九美上、^{くみあげ}十倉、^{とくら}十余一、^{とよいち}十余二、^{とよふた}十余三)。これらの地名は、明治2(1868)年に三井八郎右衛門が設立し、市岡晋一郎が指揮した「小金牧の開墾会社」が開墾した順番に由来しています¹。このうち、柏市で見られる地名は、4番目に開墾されて出来た「豊四季」と12番目に開墾されて出来た「十余二」の2つです。

明治初期の柏市域の村々では、主に米、麦、雑穀などの食用作物が生産されており、工芸作物としては藍などの染料作物や菜種などの油料作物が少々生産されていたのみでした¹。しかし、小金牧の開墾により出来た豊四季村と十余二村では、工芸作物の導入が盛んに図られ、豊四季村ではサトウキビが、十余二村ではサツマイモが生産されました¹。また、豊四季村では、明治時代に福神漬け用のカブの生産が始まり、現在もなお柏市の特産品として栽培され続けています。

ここからは、「豊四季のサトウキビとカブ」、「十余二のサツマイモ」、「現在の柏市の主要農産物」、「柏市でしか栽培されていない野菜」を紹介していきます。

(1) 豊四季のサトウキビとカブ

① 豊四季のサトウキビ¹

- ・ サトウキビ (*Saccharum officinarum*)²
イネ科サトウキビ属
高さ：3～6m
原産：ニューギニア(太茎種)、インド(細茎種)

明治 14(1881)年に、小金牧の開墾を請け負っていた三井組は、現在の十余二の皇大神宮付近に、「十余二村製糖会社」を設立しました。十余二村製糖会社は、砂糖の原料となるサトウキビを豊四季村の農民に生産してもらい、そのサトウキビを買い取ろうと考えました。

しかし、明治 17(1884)年に、わずか 3 年で十余二村製糖会社は解散することとなってしまいました。一体何故解散にいたってしまったのでしょうか。

【原因 1：豊四季村の気候がサトウキビの栽培に向いていなかったため】

現在の日本におけるサトウキビの主要産地は、九州及び沖縄といった亜熱帯地域です。柏市(豊四季村)は温帯地域に属しており、サトウキビを栽培するには不適な環境と言えます。また、小金牧の開墾に携わった方々のご子孫のお話にもあったように、開墾当初の柏市は現在よりも気温が低かったため、サトウキビの栽培はさらに困難な状況であったと推測されます。

現在であれば、施設栽培(ビニルハウスなどの施設内で植物を栽培すること)を行うことや、暖房や寒冷紗(病虫害防除、遮光、防寒目的で、施設内部を覆うように設置したり、トンネルに使用したりするポリエステル性の資材)を設置することができますが、19 世紀後半の日本では不可能な技術です。

そのため、サトウキビを導入・栽培しようとしても、サトウキビの栽培に不適な環境である豊四季村では、サトウキビの生産量を伸ばすことができなかつたと考えられます。

【原因2：豊四季村の農民がサトウキビの栽培技術を持っていなかったため】

サトウキビは、小金牧の開墾によって豊四季村に導入された作物です。したがって、豊四季村にはサトウキビの栽培技術を持った農民は存在しなかったと言えるでしょう。サトウキビの栽培技術を持たない上に、サトウキビ栽培に不適な環境であることで、豊四季村の農民は非常に苦労を強いられたのではないかと考えられます。

【原因3：明治16(1883)年の天候不順による不作のため】

明治16(1883)年に天候不順があったとされ、サトウキビ栽培は打撃を受けたと言われています。明治14(1881)年に豊四季村でサトウキビ栽培が始まり、収量が伸び悩んでいる中でこの天候不順は、十余二村製糖会社の解散の大きな要因となったと考えられます。

【原因4：サトウキビが低収量・低品質で、砂糖の製造量が少なかったため】

原因1～原因3より、豊四季村のサトウキビの生産量は伸び悩み、品質も粗悪なものであったと考えられます。サトウキビの生産量が少なかったため、砂糖の製造量も必然的に少なくなり、十余二村製糖会社の経済状況が苦しくなりました。

豊四季村のサトウキビの生産量が少なかったため、需要に対する供給が足りず、豊四季村の農民に支払う費用が増加したことも重なり、十余二村製糖会社は解散してしまいました。豊四季村では、十余二村製糖会社の解散に伴ってサトウキビ栽培を断念し、それ以降サトウキビは栽培されていません。また、小金牧の開墾によってできた村々では、サトウキビ以外にも様々な工芸作物の導入が図られたのですが、柏市には定着せず、現在は栽培されていません。

② 豊四季のカブ

- ・ カブ (*Brassica rapa*)³
アブラナ科アブラナ属
原産：アジア(アフガニスタン)とヨーロッパ(地中海)の両方
または、ヨーロッパ(地中海)のみのどちらかとされる

千葉県は、平成 29(2017)年農業産出額の都道府県別ランキングで 4 位に入っています⁴。では、千葉県が収穫量全国トップを誇る農産物をご存知でしょうか。

【千葉県が収穫量全国 1 位を誇る農産物(平成 28(2016)年)】^{5,6,7}

野菜：ダイコン、カブ、サトイモ、ホウレンソウ、ミツバ、シュンギク、ネギ、
サヤインゲン、ソラマメ、エダマメ

作物：ラッカセイ

果樹：日本ナシ

この中で、カブは柏市の農業について語る上で外すことができません。カブは柏市を代表する野菜の 1 つであり、柏の 3 大野菜(カブ・ネギ・ホウレンソウ)にも含まれます。柏市におけるカブの生産量は、全国で第 1 位です。中でも、豊四季での栽培が盛んに行われています。では、豊四季でのカブの栽培は何時頃から始まったのでしょうか。

豊四季のカブの栽培の歴史は、明治時代までさかのぼります。豊四季村は、東京府金町(現在の東京都葛飾区)から注文を受けて、福神漬け用の小カブを委託栽培し始めました。これが現在まで続く豊四季のカブ栽培の始まりです¹。

小金牧の開墾に携わった方々のご子孫によると、「豊四季村の土は黒く、地力があつたため、葉菜(カブ)の栽培に向いていたが、十余二村の土は赤土で痩せていて、サラサラしていたため、根菜(サツマイモ)しか栽培できなかった」そうで、同じ柏市域でもカブの栽培に適した豊四季村を選び、栽培し始めたと考えられます。

大正 10(1921)年になると、恩田藤太郎が本格的なカブの栽培を始めたとされています¹。また、東京府のカブ農家が水害に遭い、カブの出荷が出来なくなった際に、豊四季の2、3戸の契約農家が千住市場にカブを出荷したところ収益が得られたため、関東大震災以降、本格的に栽培が行われるようになったとも言われています¹。したがって、明治時代に栽培が始まった豊四季村のカブは、大正時代になって本格的な栽培が始まったと考えられます。

昭和 10(1935)年には、「豊四季第一出荷組合」が設立され、豊四季のカブの出荷が組織的に行われるようになりました¹。現在は、「JA ちば東葛柏小かぶ共撰部会」の方々が、豊四季を含む柏市のカブを生産・出荷しています⁸。

柏市では、主に小カブの秋播き栽培を行っていました。なぜならば、小カブは冷涼な気候を好んでおり、夏の高温では病虫害被害が大きくなり、冬の低温ではカブが生育不良を起こしてしまう可能性があり、春は抽苔(高温・長日条件で花芽が分化し、花茎が伸長してしまう現象)してしまう可能性があるためです⁹。

しかし、栽培技術の研究や品種改良の結果、近年は8月以外のほぼ1年中の生産・出荷が可能となっています⁹。この周年生産技術の研究や産地育成の功績が認められたことにより、平成元(1989)年に「JA ちば東葛柏小かぶ研究会」は「朝日農業賞」を受賞しました⁹。

(2) 十余二のサツマイモ

- ・ サツマイモ (*Ipomoea batatas*)¹⁰
 ヒルガオ科サツマイモ属
 原産：中南米の熱帯・亜熱帯地域

サツマイモは、1492年にコロンブスがスペインに持ち帰って以降、世界各地に伝わったと言われています¹⁰。日本へは1597年に福建省から宮古島へ入り、1605年には、野国総管ぬぐんにより琉球(沖縄)に伝わりました¹⁰。その後九州、全国に伝わり、17~18世紀に入ると青木昆陽により普及が行われ、救荒作物として多くの人々の命を救いました¹⁰。

大正時代になると、豊四季村と十余二村でもサツマイモの栽培が盛んに行わ

れるようになりました¹。小金牧の開墾に携わった方々のご子孫の話によると、十余二村では、サツマイモの方が麦や陸稲よりも大きな収入源となったそうです。大正元(1912)年に「十余二甘藷組合」が設立され、大正3(1914)年には「十余二甘藷耕作組合」に改称し、サツマイモの栽培方法や出荷方法の改善に取り組んだとされています¹。また、十余二村で最初にサツマイモの栽培をした人物は山口富蔵とされています¹。

現在のサツマイモの利用方法としては、我々が食用とする「食用作物」としての利用、家畜が食用とする「飼料作物」としての利用、デンプンを使用する「工芸作物」としての利用が挙げられます。しかし、「十余二甘藷組合」が設立された頃に十余二村で栽培していたサツマイモは、デンプンを使用するには向かない非常に甘いイモであったとされています¹。十余二村で栽培されたサツマイモは、東京市内で焼き芋にして食されました。

十余二村のサツマイモは、当時サツマイモの主要産地であった埼玉県川越産のサツマイモよりも人気があり、「十余二赤」と呼ばれるブランド名で親しまれました。この十余二赤の選抜には、石塚忠蔵氏(小金牧の開墾に携わった方のご子孫で、お話を伺った石塚とみさんのご先祖)が携わったとされています。石塚忠蔵氏は千葉県農事試験場から委託されて、昭和16(1941)年～昭和26(1951)年の間、サツマイモの品種比較試験を行い、試験設計書などの当時の栽培状況が分かる詳しい資料を残しています。

また、小金牧の開墾に携わった方々のご子孫から、「十余二赤」は後に名称が「千葉紅」とされたと伺いました。千葉紅は「紅赤」と呼ばれる品種を千葉県で栽培した際に付けられる名称とされています。千葉紅は栽培が難しいとされており、収量が得られなかったため戦中・戦後の食糧増産の陰に隠れ、徐々に生産されなくなってしまったと考えられます。そのため、現在十余二赤や千葉紅といった品種のサツマイモは存在していません。

大正・昭和時代のサツマイモの栽培の流れ

(小金牧の開墾に携わった方々のご子孫の話)

種芋で苗床を作る→露地で栽培→収穫→洗浄→出荷→種芋を消毒→種芋を牟呂で保存

肥料：落ち葉の堆肥、単肥

利用：焼き芋用(東京市へトラックで輸送)、「マンジョウみりん(キッコーマン)」の原料となる焼酎用、献上用(皇族の北白川宮家へ献上)

(3) 現在の柏市の主要農産物

先にも述べたように、柏の3大野菜はカブ・ネギ・ホウレンソウです。カブは、柏市豊四季において、明治時代から栽培されており、カブの生産量は全国1位です。では、ネギについても見ていきましょう。

① ネギ

・ ネギ (*Allium fistulosum*)³

ヒガンバナ科ネギ属

原産：中国北西部、モンゴル、シベリア南部とされる

柏市では、根深ネギと葉ネギのうち、主に根深ネギを栽培しています。特に柏市が含まれる東葛飾地区では、「坊主不知ネギ」が栽培されています。

東葛飾地域では、江戸時代からネギ栽培を始めたとされており、中でも「坊主不知ネギ」は、昭和初期に埼玉県から入ったとされています¹¹。その後、系統選抜を経て、現在は「向小金」、「小金」、「手賀黒」、「風早黒」系が中心となって栽培されています¹¹。

「坊主不知ネギ」の特徴は、名前の通り、春になってもほとんどネギ坊主が出ないことです¹¹。ネギ坊主とは、ネギ科の植物に見られる特徴的な花序(花の配列状態を示す言葉)のことで、白色の花が300~400個、球状に咲いた状態を指します³。3月下旬~4月になると、ネギは花茎が伸びてネギ坊主が出てきてし

まい、ネギとしての商品価値が下がってしまい、生産や出荷が困難になってしまいます³。しかし、「坊主不知ネギ」は春になってもほとんどネギ坊主が出ないことで、冬ネギと夏ネギの端境期に生産・出荷が可能となります¹¹。そのため、5月～6月に入手可能となります¹¹。これにより、柏市ではネギをほぼ周年出荷することが可能となりました。

平成 20(2008)年に、柏市の江口金男氏は、ネギの周年出荷体系における「坊主不知ネギ」の有効利用技術を確立したとして、農林水産省が選定する「農業技術の匠(地域活性化への貢献が期待できる農業技術を自ら開発・改良した農業者)」に選ばれました¹²。

(4) 柏市でしか栽培されていない野菜—根芋—

皆様は「根芋(ねいも)」という野菜をご存知でしょうか。根芋は、サトイモの新芽を軟白栽培してできた野菜です¹³。現在は柏市の4戸の生産農家の方のみによって栽培されており、柏市内でもなかなか見かけることができません¹⁴。ここでは、その根芋の特徴的な栽培方法についてご紹介します。

- ・ サトイモ(*Colocasia esculenta* (L.) Schott)³
サトイモ科サトイモ属
原産：インドおよびインドシナ半島、または中国とされる

サトイモは、親イモの周りに子イモが、子イモの周りに孫イモがつき、一般的には子イモや孫イモが収穫・出荷されます³。

他にも、「ズイキ(葉柄部分)」は生食や乾燥して食すことができ、中でも新芽の若いものは「根芋」として食すことができます¹³。

根芋は、畑に穴を掘り、米ぬかをベースにした堆肥を敷き込み、腰の深さにサトイモの親イモを並べて、籾殻で保温しながら育てていきます¹³。堆肥の発酵によって生じる熱を利用して親イモを発芽させるため、温度の管理が非常に重要です¹³。そのため、籾殻には温度計を指して栽培しています¹³。発芽したサトイモは、米ぬかの中で日光を浴びることなく伸びていくため、根芋は真っ白になります。

収穫する際は、親イモから切り離し、洗浄され、箱詰め後に出荷されます¹²。
しかし、根芋の出荷は東京都の市場を中心に行われるため、柏市内ではあまり見かけることができません¹³。

根芋は灰汁があるため、通常の「ズイキ」のように生食することはできません¹³。そのため、加熱するか酢漬けにして灰汁抜きしてから調理されます¹³。

根芋の出荷は10月下旬から6月、2月～3月が旬となっていますので、根芋を見かけた際は、是非一度食べてみてください¹³。

【参考文献】

- 1 柏市史編さん委員会 『歴史ガイドかしわ』
(柏市教育委員会、2007年3月31日発行)
- 2 巽二郎、堀江武、石井龍一、稲永忍、伊東睦泰、石井康之、藤本文弘
『作物学(Ⅱ) 一工芸・飼料作物編一』
(文永堂出版株式会社、2000年11月30日初版第1刷、2006年3月10日
初版第2刷発行)
- 3 金浜耕基 『野菜園芸学』
(文永堂出版株式会社、2007年9月30日初版第1刷発行)
- 4 農林水産省 HP 「農林水産統計」
(農林水産省大臣官房統計部、平成30年12月25日公表)
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/attach/pdf/index-6.pdf
- 5 農林水産省 HP
「作物統計調査 作況調査(野菜) 確報 平成29年産野菜生産出荷統計」
(農林水産省生産流通消費統計課、2018年11月12日公開)
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_yasai/index.html
- 6 農林水産省 HP
「作物統計調査 作況調査(果樹) 確報 平成29年産果樹生産出荷統計」
(農林水産省生産流通消費統計課、2018年11月1日公開)
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kazyu/index.html
- 7 農林水産省 HP
「作物統計調査 作況調査(水陸稲、麦類、豆類、かんしょ、飼料作物、工芸農作物) 確報 平成29年産作物統計(普通作物・飼料作物・工芸農作物)」
(農林水産省生産流通消費統計課、2018年6月27日公表)
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kome/index.html

- ⁸ JA ちば東葛柏小かぶ共撰部会 HP
<http://www.ja-chibatoukatsu.jp/index.htm>
- ⁹ 千葉県 HP 「教えてちばの恵み かぶ | 旬鮮図鑑」
(農林水産部流通販売課 販売・輸出促進室、2019年2月14日更新)
<https://www.pref.chiba.lg.jp/ryuhan/pbmgm/zukan/yasai/kabu.html>
- ¹⁰ 秋田重誠、吉田智彦、窪田文武、俣野敏子、国分牧衛、石井龍一、今井勝、岩間和人 『作物学(I) -食用作物編-』
(文永堂出版株式会社、2000年8月10日初版第1刷発行、2010年3月20日初版第6刷発行)
- ¹¹ 千葉県 HP 「教えてちばの恵み ねぎ | 旬鮮図鑑」
(農林水産部流通販売課 販売・輸出促進室、2019年2月14日更新)
<http://www.pref.chiba.lg.jp/ryuhan/pbmgm/zukan/yasai/negi.html>
- ¹² 農林水産省 HP
「「農業技術の匠」：江口金男さん ～ねぎの周年出荷体系における「坊主不知ねぎ」の有効利用技術～」
http://www.maff.go.jp/j/seisan/gizyutu/hukyu/h_takumi/attach/pdf/170929-35.pdf
- ¹³ 柏市 HP 「全国でも柏市でしか栽培されていない野菜、根芋（ねいも）」
(柏人への道(農×食×人)、2014年1月28日更新)
<http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/bloghakunchu2/p017555.html>
- ¹⁴ 柏市 HP 「根芋が日本テレビ news every に取り上げられました！」
(柏人への道(農×食×人)、2017年2月28日更新)
<http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/bloghakunchu2/p040157.html>

第6章 (小金牧) 十余二開墾物語

目次

I 小金牧の開墾—入植時の苦労話—	p. 117
1. 苦しかった生活面	p. 117
2. 開墾農地のこと	p. 117
3. 十余二の開墾—トピックス—	p. 118
II 十余二の土壌と栽培作物に関する話	p. 118
III サツマイモ・農業に関する話	p. 119
1. 柏の名産品—サツマイモ‘十余二赤’	p. 119
2. サツマイモ‘十余二紅’の選抜と 県からの品種適応性試験について	p. 119
IV 柏飛行場の開設に関する話	p. 120
V 戦後の農地改革・金属工業団地に関する話	p. 120

I 小金牧の開墾—入植時の苦労話—

明治新政府が明治2(1869)年に始めたのが、窮民対策を目的とした下総牧開墾事業でした。

下総開墾地は、入植が始まった順に13の村名がつけられ、小金牧(高田台牧)の十余二は12番目の入植地でした。関東ローム層で水利が悪く、地味も悪くて耕作地に適さない土地であったうえに、天災等も重なり開墾は非常に困難なものだったようです。

本書を編集する中で、「小金牧の開墾に携わった方々のご子孫の方にお話を伺いたい」という声が多数上がりました。そこで、2018年10月13日に千葉大学環境健康フィールド科学センターにて、十余二入植者の子孫にあたる方々4名にお集まりいただき入植当時の十余二の様子を聞かせていただきました。そのお話から、厳しい開墾生活と逞しく生き抜いたお姿を垣間見ることができました。

お話のエピソードをまとめてみました。

ここでは、「入植時の苦労話」について伺ったことを簡単にまとめています。「当時の栽培作物」について伺った内容は、第5章Ⅱ2『柏市の農業—特産農産物紹介—』で触れています。ご覧ください。

1. 苦しかった生活面

入植当時の生活は非常に厳しいものでした。例えば、主食は麦ご飯であり、家はあばら家で、屋根は杉の皮で葺いたものであったため、屋根の隙間から星空が見えたことが記憶に残っているそうです。また、現在よりも気温が低く、冬の朝は布団に霜が付くほど寒かったようです。江戸から入植してきた武士たちの家は、全部で27戸しかなかったのですが、開墾作業の大変さや生活面の厳しさに耐え切れず、すぐに江戸に帰ってしまったそうです。

2. 開墾農地のこと

開墾をしていくことで広い土地が手に入る予定でしたが、開墾した土地が手に入らず、開墾会社と農民は裁判で争いました。足尾銅山鉱毒事件を明治天皇に直訴したとして有名な田中正造(1841~1913)が、この問題について国会で質問

し、その後も支援をしてくださったが、解決に至らなかったとのことでした。また、窒素を含む化学肥料が生み出されたのは大正2(1913)年であり、入植当時は良い肥料もなかったため、作物が良く育たなかったそうです。

3. 十余二の開墾ートピックスー

“入植時の苦労話”

- ・入植者は江戸からだけでなく、農家の次・三男が自分の土地を持ちたい(自作農)と希望して入植した者も多かった。
- ・入植当初、家はあばら家で、屋根は杉皮で葺いていた。屋根には隙間が多く、夜には天井から星空が見え、朝起きると布団に霜が降っているような家だった。
- ・入植時の生活は、非常に厳しかった。
- ・主食は‘おかぼ(陸稻)’に麦(丸麦)入れたご飯だった。
- ・農具は入植時に実家から持ってきたトンビ鍬を使っていたようだ。
- ・農具の補修のため鍛冶屋もあったようだ。他に「かごや」などの屋号の家もあった。今でも当時の仕事がかがえる鍛冶屋、豆腐屋などの屋号が残っている。

II 十余二の土壤と栽培作物に関する話

- ・入植時、水利が悪く水田が作れないので、まず‘おかぼ(陸稻)’を作り、ほかに少量であるが、落花生、蚕、お茶、サトイモ、サトウキビなどを作ったと聞いている。稗は作らなかったようだ。いろいろな作物を試したようだ。
- ・土地は赤土で痩せており、サラサラしていて石は無かった。
- ・肥料が無いので、作物がよく育たなかった。
- ・十余二は根菜類しか生産できなかった。(豊四季は同じ関東ローム層でも、土は黒く、地力は十余二よりもあったようだ。そのため、作物も違っており、豊四季は葉物が生産できた。)

Ⅲ サツマイモ・農業に関する話

1. 柏の名産品ーサツマイモ ‘十余二赤’

- ・十余二における戦前からの主力農産物はサツマイモで、サツマイモが有名になり麦や陸稲より多くの収入となった。陸稲や麦からサツマイモへの転作も増えた。
- ・B家は4町歩ぐらいサツマイモを作っていた。
- ・サツマイモは、苗床づくりが重要で、飯岡町で穴沢式甘藷苗床の作り方を習ってきて栽培した。
- ・サツマイモの栽培は、幅2尺1寸の東西につくった畝の南側に麦を播き、麦の北側にサツマイモの苗を植えた。(収穫期がずれているため、両方栽培できた)
- ・種芋の消毒にドラム缶にイモを入れ、F90度(約40℃)のお湯を入れて殺菌した。
- ・種芋の保存が大変だった。室(むろ)に保存した。室は3mほどの縦穴を掘り、そこから横へ何本か横穴を掘り、床に落ち葉などの枯葉を敷き、イモを保存した。有毒ガスが発生する(酸素不足か?)ので、穴に入るときは必ずローソクを点けて入った。室の中は夏涼しく、冬は暖かかった。
- ・肥料は落ち葉などを利用した。(実際は落葉のたい肥と単肥:試験設計書より)
- ・出荷は東京行からトラックが荷を積みに来ていた。
- ・「マンジョウみりん(キッコーマン)」の原料となる焼酎用にイモを作っていたこともある。
- ・戦争中、戦後の食糧不足の時、都内から多くの人買い出しに来て、おいしくない種芋まで買っていった。
- ・戦後は梨(豊水)やスイカも作った。

2. サツマイモ ‘十余二紅’ の選抜と県からの品種適応性試験について

- ・最初、サツマイモは農林1号を植えた。
- ・B家の初代入植者から数えて3代目(リーダー格)は、千葉県農事試験場の指定を受け品種比較試験をしていた。(昭和16(1941)年~26(1951)年(資料から判明))
- ・B家の初代入植者から数えて3代目は、サツマイモの改良に熱心で、イモの芽

の色や感触で良いものを選び出し、何年もかけて改良した。

- ・品種改良は試験場でするからやるなと叱られたこともあったという。
- ・B家の初代入植者から数えて3代目たちは、十余二赤という品種（系統・名称・ブランド名と思われる）のサツマイモを選抜。
- ・十余二赤は薄皮で、傷つきやすいため、かごに入れず、藁蔭(わらむしろ)で作った^{かます}俵に入れていた。
- ・吉田邸の口利きで皇族の北白川宮家に献上した。献上芋は絹で洗い汚れを取った。
- ・‘十余二赤’は、その後、知らないうちに‘千葉紅’（昭和16年度には千葉紅となっている）と名前を変えられた。
- ・千葉紅は、農林大臣賞を貰った。

IV 柏飛行場の開設に関する話

- ・飛行場の建設は上意下達だった。
- ・滑走路の建設には、13歳以上の男女を問わず勤労奉仕で携わった。小学6年生も動員された。
- ・昭和12（1937）年に工事が始まり13年に完成。軍用道路は舗装されていた。赤土だったので、建設中は赤い土が舞い上がり、息もできないくらいだった。
- ・飛行場を作るために、入植者は強制的に立ち退かされた。（家引きもあった。）
- ・転居先の住居は保証してくれたが、耕作地の準備はしてくれなかった。
- ・耕作地がなくなった者には、Bさんなどが、耕作権（小作権）を譲った。
- ・現在の梅林の辺りには、百人部隊（教育隊）と言われる部隊があり、飛行場から飛行機を兵隊が押して移動させていた。

V 戦後の農地改革・金属工業団地に関する話

- ・十余二の地主は大隈家だったが、その後鍋島家に譲渡された。管理人（宮下さんと言った）が常駐していた。
- ・農地改革（解放）のとき（昭和21（1946）年）鍋島家から農地を買い取った。現金払いで1反あたり480円を届けに行った。（1反480円は、そのころの付近の土地が1反1万円であったので、非常に安い価格ではあった。）

- ・高田のあたりは、戦後の入植である。
- ・お話を伺った方々の中で、現在農業をしているのはA さんだけ。
- ・十余二の工業団地は、国道16号が開通した時、市が住み分けによる土地の利用を決定し、工業団地を誘致した。

○13か所の下総開墾地（小金5牧、佐倉7牧）

- ①初富 ②二和 ③三咲 ④豊四季 ⑤五香 ⑥六実 ⑦七栄 ⑧八街 ⑨九美上 ⑩十倉 ⑪十余一 ⑫十余二 ⑬十余三

注：開墾地名は、東京府開墾局北島秀朝が名付けたとされますが、十余二は「十二分の発展を未来にかける」意味から名付けられたといわれています。

【お話を伺った方々】

※年齢は2018年10月13日現在

- ・ A さん（91歳）
ご先祖のご出身：埼玉県一宮市
ご先祖の入植の経緯：埼玉県で水害にあったため
- ・ B さん（86歳）（初代入植者から数えて5代目）
ご出身：千葉県野田市関宿（旧二川村）
ご先祖の入植の経緯：二川村は土地が狭く、自らの土地を持ちたかったため
- ・ C さん（76歳）（Bさんの従姉妹）
現在柏市唯一のキウイ生産者
- ・ D さん（74歳）
ご先祖のご出身：千葉県流山市
本家筋は郵便局長をしていた家で、開墾地で小学校も作ったとのこと

柏市とその周辺の歴史年表

※本年表は「郷土かしわ」の歴史年表をベースとし、末尾欄外に示す引用・参考文献より重要と思われる「できごと」を補足した。

時代区分	西暦	年号	主なできごと
原 始 時 代	約4万年前 約3万年前		<ul style="list-style-type: none"> ・日本列島に最古の明確な石器が出現 ・常磐自動車道柏地区に旧石器時代の遺跡が現れる（聖人塚、中山新田、元割遺跡など） ・環状ブロックの形成（中山新田Ⅰ遺跡） ・長期間の人々の営み（聖人塚遺跡） ・本の木型石槍の生産（元割遺跡）
	約1万5千年前	草創期 早期 前期 中期 後期 晩期	<ul style="list-style-type: none"> ・土器の使用が始まる ・狩猟や採集の生活が続く ・本格的なムラがつくられ始まる（鴻ノ巣、花前遺跡） ・前期前葉の黒浜式期の集落が出現（若葉台遺跡、花前Ⅰ遺跡） ・貝塚を中心に大集落ができる（布施貝塚、林台遺跡） ・中期前葉の阿玉台式期の集落が展開（聖人塚遺跡、中山新田Ⅰ・Ⅱ遺跡、水砂遺跡） ・中期中葉～後葉の環状集落（小山台遺跡） ・中島遺跡、岩井貝塚 ・宮根遺跡
弥 生 時 代	前10世紀後半～前8・7世紀 紀元後 239		<ul style="list-style-type: none"> ・大陸から北九州に稲作が伝わる ・大陸から青銅器、鉄器が伝わる (今のところ柏市内では弥生時代 早・前・中期を示す明確なものは発見されていない) ・邪馬台国の女王卑弥呼が倭国王になる ・笹原、中馬場遺跡（弥生後期）
	538 593 飛鳥時代 607 645 646 701	大化元 大化2 大宝元	<ul style="list-style-type: none"> ・前方後円墳がつくられる（大王が支配する大和政権） ・戸張一番割、戸張城山、石揚遺跡（古墳前期） ・北ノ作1号・2号墳 ・弁天古墳（古墳・中期） ・花野井大塚古墳 ・小規模な集落が出現（花前Ⅱ-1遺跡、矢船遺跡） ・集落規模の拡大（上貝塚遺跡） ・百済から仏教伝わる ・聖徳太子が推古天皇の摂政になる ・柏・我孫子あたりは朝廷の御名代（みなしろ）として直接支配される ・小野妹子を遣隋使として隋に送る ・市内各所に小円墳がたくさんつくられる ・総の国を二分して南部を上総、北部を下総とした ・大化改新の詔が発布される ・大宝律令ができる ・下総国府（市川市国府台）置かれる ・根戸周辺に大集落ができるようになる（中馬場遺跡）
奈 良 時 代	710 721 741 771	和銅3 養老5 天平13 宝亀2	<ul style="list-style-type: none"> ・平城京（奈良）に遷都 ・この頃鉄器生産を伴う集落の出現（花前Ⅰ遺跡、花前Ⅱ-2遺跡） ・養老5年「下総国倉麻（そうま）郡意布郷（おふのさと）」戸籍つくられる（ほとんどの人が「藤原部」姓をもつ） ・国分寺建立の詔 ・下総国分寺建立 ・武蔵国-下総国-常陸国（東海道）の交通が多くなり、駅馬が増強される
	794 823 935 1126 1130 1156 1167	延暦13 弘仁14 承平5 大治元 大治5 保元元 仁安2	<ul style="list-style-type: none"> ・平安京（京都）に遷都 ・この頃本格的な製鉄の展開（花前Ⅱ-2遺跡） ・空海、布施弁財天に紅竜山東海寺を建立（東海寺縁起による） ・平将門反乱をおこす ・相馬御厨成立 ・平常重、布施郷（相馬御厨）を伊勢皇太神宮領に寄進（志子多谷、手下水海の名みえる） ・保元の乱に、千葉介常胤（相馬郡司）、源義朝に従って参加 ・平清盛が太政大臣となる

時代区分		西暦	年号	主なできごと
古	平安時代	1180	治承4	<ul style="list-style-type: none"> 源頼朝伊豆に拳兵 千葉一族協力する
		1185	文治元	<ul style="list-style-type: none"> 千葉介常胤本領安堵（相馬御厨の下司職）を得る 守護, 地頭の設置 千葉介常胤「下総一國守護職」に補任
中	鎌倉時代	1192	建久3	<ul style="list-style-type: none"> 源頼朝征夷大將軍に任ぜられ, 鎌倉に幕府を開く
		1204	元久2	<ul style="list-style-type: none"> 相馬次郎師常（常胤の次男）没
		1227	嘉禄3	<ul style="list-style-type: none"> 相馬五郎能胤が娘土用（むすめとよ）に相馬御厨内の手加, 布瀬, 藤心, 野木崎らをゆずる
	南北朝時代	1334	建武元	<ul style="list-style-type: none"> 建武の新政
		1338	延元3	<ul style="list-style-type: none"> 足利尊氏, 征夷大將軍となり幕府を開く
	室町時代	1462	寛正3	<ul style="list-style-type: none"> 高城胤忠, 根木内城構築
		1467~77	応仁元	<ul style="list-style-type: none"> 応仁の乱
		1478	文明10	<ul style="list-style-type: none"> 太田道灌, 国府台に陣し, 千葉孝胤と境根原で戦う
		1537	天文6	<ul style="list-style-type: none"> 高城胤吉, 小金大谷口城構築
		1538	天文7	<ul style="list-style-type: none"> 北条軍と小弓軍国府台に戦う 北条軍勝利
近世	安土桃山	1564	永禄7	<ul style="list-style-type: none"> 国府台後の戦, 里見氏, 北条軍に敗れる
		1573	天正元	<ul style="list-style-type: none"> 室町幕府滅ぶ
		1590	天正18	<ul style="list-style-type: none"> 豊臣秀吉の統一 高城氏滅ぶ
	江戸時代	1600	慶長5	<ul style="list-style-type: none"> 関ヶ原の戦い
		1603	慶長8	<ul style="list-style-type: none"> 徳川家康將軍となり江戸に幕府を開く
		1614	慶長19	<ul style="list-style-type: none"> 江戸幕府, 小金三牧と佐倉七牧を管理する
		1616	元和2	<ul style="list-style-type: none"> 幕府七里ヶ渡を定船場とする 本多正重が相馬郡内に1万石を領す
		1641	寛永18	<ul style="list-style-type: none"> 江戸川開通
		1641~43	寛永18~20	<ul style="list-style-type: none"> 寛永の大飢饉
		1654	承応3	<ul style="list-style-type: none"> 伊奈備前守忠次, 利根川東遷に成功
		1663	寛文3	<ul style="list-style-type: none"> 大青田村と船戸村の草場をめぐる争いで双方の名主入牢
		1671	寛文11	<ul style="list-style-type: none"> 江戸商人（海野屋作兵衛ら17名）による手賀沼干拓始まる
		1702	元禄15	<ul style="list-style-type: none"> 大室村と高野村草場をめぐる争いで3人死に, 双方の名主入牢
		1708	宝永5	<ul style="list-style-type: none"> 戸張村と大井村草場をめぐる争い
		1724	享保9	<ul style="list-style-type: none"> 利根川沿いに流作場生まれる 布施河岸が正式に成立
江戸時代	1725	享保10	<ul style="list-style-type: none"> 小金原で將軍吉宗鹿狩, 村々より勢子, 人足差し出す このころより代官, 小宮山奎之進, 牧付新田を開発させはじめる 	
	1726	享保11	<ul style="list-style-type: none"> 小金原で將軍吉宗鹿狩 	
	1727	享保12	<ul style="list-style-type: none"> 幕府年貢増収をねらって手賀沼干拓を始める 	
	1729	享保14	<ul style="list-style-type: none"> 手賀沼開墾により千間堤完成(5年後決壊) 手賀沼干拓竣工 	
	1732	享保17	<ul style="list-style-type: none"> 享保の大飢饉 	
	1737	元文2	<ul style="list-style-type: none"> 藤ヶ谷に鮮魚街道石橋が作られる 	
	1738	元文3	<ul style="list-style-type: none"> 千間堤洪水により決壊 	
	1745	延享2	<ul style="list-style-type: none"> 手賀沼再工事竣工 利根川洪水のため千間堤再決壊 	
	1748	寛延元	<ul style="list-style-type: none"> 水戸公, 小金原で鹿狩, 帰途, 弁天で参詣 	
	1783~87	天明3~7	<ul style="list-style-type: none"> 関東一帯大飢饉(天明の大飢饉) 	
	1787	天明7	<ul style="list-style-type: none"> 寛政の改革始まる 	
	1790	寛政2	<ul style="list-style-type: none"> 船戸・小青田等16ヵ村・水戸公の鷹場の免除を願い出る 	
	1795	寛政7	<ul style="list-style-type: none"> 小金原で將軍家齊鹿狩 	
1849	嘉永2	<ul style="list-style-type: none"> 小金原で將軍家慶鹿狩 		
1853	嘉永6	<ul style="list-style-type: none"> 黒船渡来で世間騒がしくなり水戸街道の往来がはげしくなる（助郷増加） 非常時（黒船渡来）のため, 村々から船戸, 藤心詰足軽勤番差し出す 品川沖へ御台場建築のため根戸村御林から木材を江戸へ送る 		
1855	安政2	<ul style="list-style-type: none"> 下総布川の儒医, 赤松宗旦「利根川図誌」を著す 		
1867	慶応3	<ul style="list-style-type: none"> 大政奉還 		

時代区分	西暦	年号	主なできごと	
近代	1868	明治元	・旧領主本多紀伊守、駿河から安房国長尾藩（現南房総市白浜）へ移封	
	1869	明治2	・葛飾県の支配となる	
	1871	明治4	・小金、佐倉牧開墾会社設立、小金・佐倉牧廃止 ・ 廃藩置県	
	1873	明治6	・葛飾県を廃止、印旛県となる	
	1873	明治6	・下総開墾会社を解散	
	1879	明治12	・豊四季村、十余二村誕生 ・千葉県となる ・第1回県会議員選挙、成島巍一郎（布施）、木村作左衛門（名戸ヶ谷）当選する	
	1888	明治21	・藤ヶ谷に鮮魚街道常夜灯造立	
	1889	明治22	・利根運河の工事始まる ・ 大日本帝国憲法発布 ・ 市町村制施行	
	1890	明治23	・富勢村・土村・田中村・千代田村・手賀村・風早村誕生	
	1894	明治27	・利根運河完成	
	1896	明治29	・ 日清戦争始まる	
	1897	明治30	・常磐線（当時日本鉄道株式会社土浦線）、田端～土浦間開通、柏駅開設	
	1901	明治34	・成田線開通（成田～佐倉間開業）	
	1904	明治37	・成田鉄道（現成田線）我孫子～安食間開通（成田直通は翌年）	
	1911	明治44	・ 日露戦争始まる ・県営軽便鉄道 柏～野田間開通（現東武アーバンパークライン）	
	大正	1914	大正3	・ 第1次世界大戦始まる
		1920	大正9	・陸前浜街道は国道六号となる ・第1回国勢調査実施 柏市域人口24,908人
		1923	大正12	・ 関東大震災 ・北総鉄道株式会社、柏～船橋間開通（現東武アーバンパークライン） ・東葛飾中学校（現東葛飾高校）開校 ・詩人「八木重吉」が東葛飾中学校に赴任 ・柏郵便局に電報、電話事務取扱
		1926	大正15	・千代田村、柏町と改称（9月15日）
昭和		1928	昭和3	・豊四季に柏競馬場ができる
	1938	昭和13	・十余二に陸軍柏飛行場建設始まる	
	1939	昭和14	・ 第2次世界大戦始まる	
	1941	昭和16	・ 太平洋戦争始まる	
	1943	昭和18	・この頃柏町に軍需工場ができる	
	1945	昭和20	・ 広島、長崎に原爆投下、日本無条件降伏	
現代	1947	昭和22	・利根遊水地の築堤始まる	
	1949	昭和24	・常磐線松戸～取手間電化	
	1952	昭和27	・国道6号整備着工（50年完成）	
	1953	昭和28	・南柏駅開設	
	1954	昭和29	・柏町、田中村、小金町、土村が合併「東葛市」となる ・小金町の大部分が松戸へ合併 ・東葛市に富勢村の大部分を編入し柏市誕生（11月15日）	
	1955	昭和30	・手賀村、風早村が合併し沼南村となる ・国勢調査 柏市の人口45,020人、沼南村人口10,911人、合計市域人口55,931人	
	1957	昭和32	・米軍柏通信所（キャンプ・トムリンソン）開設 ・国道6号（小金～青山間）で全線開通（12月）	
	1964	昭和39	・ 第18回オリンピック大会東京で開催 ・沼南村が沼南町となる ・柏市人口10万人突破（11月） ・国勢調査 柏市の人口109,237人、沼南町人口15,262人、合計市域人口124,499人	
	1970	昭和45	・ 日本万国博大阪で開催 ・国道16号（野田～千葉間）全線開通（4月） ・柏市人口15万人突破 ・沼南町人口2万人突破	
	1973	昭和48	・柏駅東口再開発事業完成 東口ダブルデッキができる（10月）	
1975	昭和50	・ 海洋博、沖縄で開催 ・柏市の人口20万人を突破（5月）		

時代区分	西暦	年号	主なできごと		
現代			・国勢調査 柏市人口203,065人、沼南町人口22,150人、合計柏市域人口225,215人		
	昭和	1979	昭和54	・米軍柏通信所（柏の葉）全面返還（8月） ・沼南町人口3万人突破	
		1982	昭和57	・柏市の人口25万人を突破	
		1985	昭和60	・科学万博、筑波学園都市で開催 ・常磐高速道路一部開通（柏～三郷） ・国勢調査 柏市人口273,128人、沼南町人口38,027人、合計柏市域人口311,155人	
		1987	昭和62	・運輸政策審議会において常磐新線の整備を答申（7月）	
		1988	昭和63	・柏市立十余二小学校開校 ・沼南町人口4万人突破	
	平成	1989	平成元	・柏市の人口30万人を突破（5月） ・国勢調査 柏市人口317,750人、沼南町人口45,130人、合計柏市域人口362,880人	
		1991	平成3	・税関研修所移転 ・柏の葉公園一部開園 ・千葉大学園芸学部附属農場設立 ・1都3県は宅地・鉄道一体化法に基づく基本計画を策定し、運輸・建設・自治大臣が承認	
		1992	平成4	・国立がんセンター東病院開院	
		1994	平成6	・常磐新線起工式（秋葉原～新浅草間）（10月）	
		1996	平成8	・緑園都市構想策定（3月） ・さわやかちば県民プラザ開館	
		1999	平成11	・科学警察研究所移転 ・東京大学の物性研究所・宇宙線研究所が柏の葉キャンパスへ移転	
		2001	平成13	・常磐新線新名称を「つくばエクスプレス」に決定（2月） ・柏ゴルフ倶楽部閉鎖（9月）	
		2003	平成15	・千葉大学環境健康都市園芸フィールド科学教育センター設立	
		2004	平成16	・柏市制50周年記念式典を挙行 ・つくばエクスプレス開業「柏の葉キャンパス駅」「柏たなか駅」誕生（8月）	
					・国勢調査 柏市人口380,963人
		2007	平成17	・県立柏の葉高校開校	
		2008	平成20	・中核市となる(4/1) ・柏の葉国際キャンパスタウン構想策定（3月）	
	2011	平成23	・柏の葉キャンパスを中心とし、内閣府より「総合特区」及び「環境未来都市」の対象地域として指定（12月）		
2012	平成24	・柏の葉小学校開校（4月）			
2014	平成26	・柏市制60周年			
2018	平成30	・柏市立柏の葉中学校開校（4月）			

（引用文献）

- 柏市教育委員会. 2018. 郷土かしわ地理・歴史・公民編 平成30年度版. P99-114
 柏市市史編さん委員会. 2007. 歴史ガイドかしわ. P238-241. 柏市教育委員会
 柏市教育委員会. 2014. 柏市郷土資料室揭示 柏市略年表
 (公財)千葉県教育振興財団. 2017. 常磐道の遺跡展図録
 柏市議会事務局. 2018. 市政概要 平成30年版. P275-277

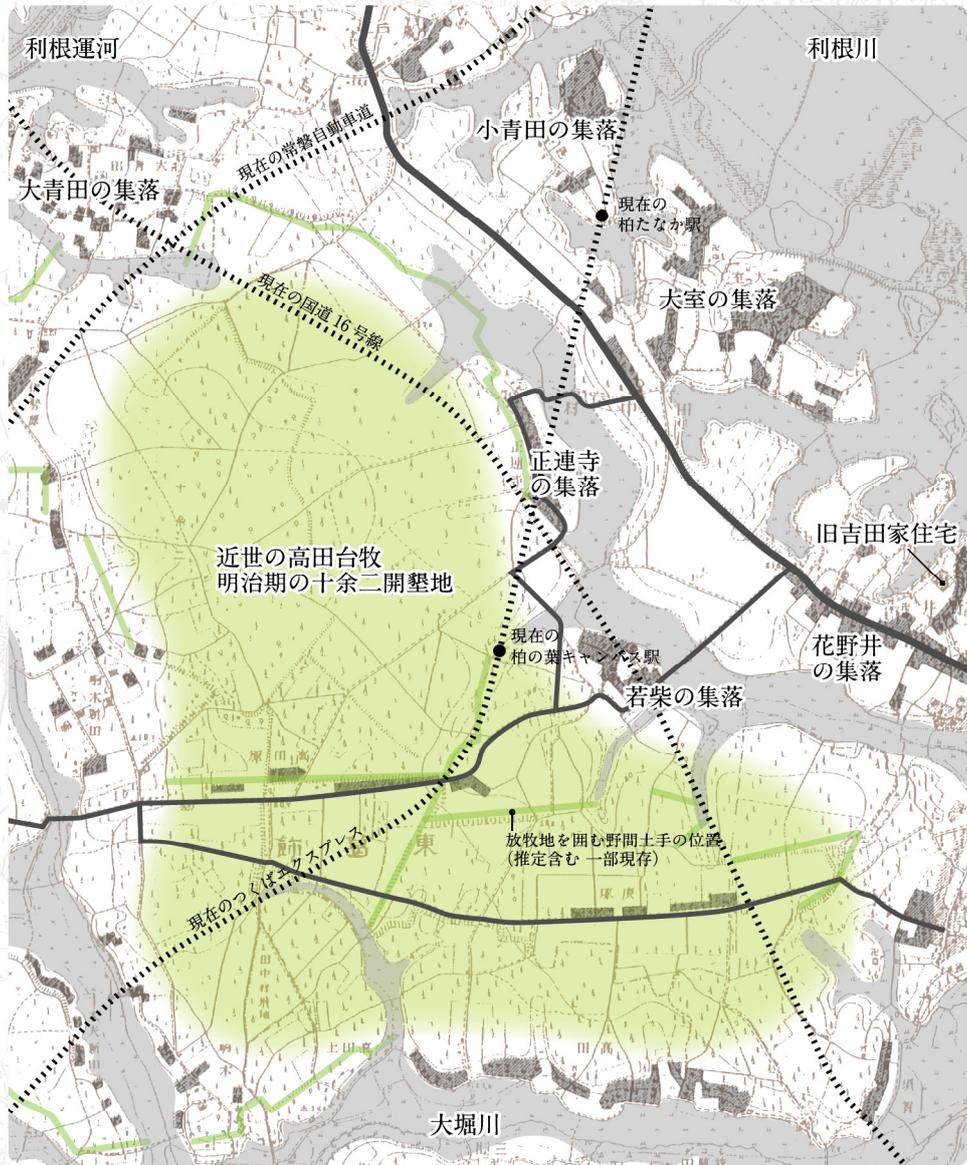
（参考文献）

- 柏市史編さん委員会. 1980. 柏市史年表. 柏市役所
 柏市役所（最終更新日2018.1.11）柏市の歴史 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020300/p000077.html> 2018.8.27参照
 柏市役所（最終更新日2017.3.8）旧沼南町の概要 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020100/p000138.html> 2018.8.27参照
 柏市役所（最終更新日2018.7.2）柏市統計書 平成29年版 柏市の沿革 <http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020800/p008433.html> 2018.8.27参照
 柏市役所（最終更新日2018.5.23）柏市都市計画マスタープラン平成30年4月 p7 都市の変遷 www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/140300/p045777.htm 2018.8.27参照

「私たちの柏の歴史～牧から街へ～」制作プロジェクトチームメンバー

統括・代表	野田勝二（千葉大学環境健康フィールド科学センター） 大鷹秀生 笠羽英男 河合都志子 今野尚子 齋藤優子 下重野乃香 常盤 猛 中山千花 浜口勝美 校條邦夫 山口政子
制作協力	高野博夫（柏市生涯学習部文化課）
表紙・裏表紙デザイン	大野将司
印刷協力	柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）

発行者：千葉大学柏の葉カレッジ・リンクプログラム
野田勝二
発行日：2021年6月30日
千葉大学環境健康フィールド科学センター
〒277-0882
千葉県柏市柏の葉 6-2-1



昭和初期までの柏の葉地域 (UDCK)

私たちの柏の歴史

— 牧から街へ —

History of *Kashiwa*

千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム